

脱サラ芸術起業

～凡人でも人生を自由自在に楽しむ秘訣～

川名慶彦



まえがき

人は皆、「才能の種」を持っています。

そしてその種は、一人ひとり違っていています。光や水、養分の与え方、つまり育成方法も違えば、発芽する時期も人によって違います。

「個性を大事にしましょう」

「自分だけの花を咲かせましょう」

「才能を発揮して人生を楽しみましょう」

一度は聞いたことがあるこれらのことは、理解はするが体現できているかという、そう皆できているものではないと思います。

それは、なぜでしょうか。

様々な側面から考えると、現代社会にもまれ、人間関係や環境などの複雑な外的要因が、種の発芽を妨げている原因だと僕は思います。

だからといって、いきなり仕事を辞めて田舎に住むことが良いとは薦めません。

じっくり、ゆっくり、時間と手間をかけて、あなただけの才種（さいだね）を発芽させていけば良いのです。

才種を見つけていく途中で、本当の自分と向き合うことを避けたり、才種の発掘や育成を放棄したりするかもしれません。逆に、満開の花を咲かせることで、何事にも代えられない人生の喜びに包まれるかもしれません。

本書に書かれたこの物語は、平凡なサラリーマンだった僕自身が才種を発掘・発芽させて、最適な育成方法で開花させた図鑑のようなものです。

これを読んだあなただけの素晴らしい才種が発芽・開花するキッカケになれば、この上なく嬉しく思います。

才種を開花させて人生を楽しみ、色彩豊かな「世界に一枚だけの絵」を完成させることで、これまでない幸せを感じるようになるでしょう。



Y-Art Style Vol.12

芸術起業

脱サラ

〜凡人でも人生を自由自在に楽しむ秘訣〜

Yoshihiko Kawana
川名慶彦

<もくじ>

まえがき

1. 超凡人の小さな夢と光

- 1-1 生きる希望がない絶望感
- 1-2 自己プロデュース力は人生を変える
- 1-3 少数派を選ぶが勝ち
- 1-4 タブーに秘密が眠っている
- 1-5 犠牲を払うことで得られるリターン

2. 最大の弱点は武器になる

- 2-1 人生を 180 度変える影響力
- 2-2 成幸者にインタビューする
- 2-3 非理想像の史上最悪な人物
- 2-4 夢を幻想で終わらせない
- 2-5 生命という原液

3. 背水の陣で発揮される本能

- 3-1 人生逆転ホームランを打つ直前
- 3-2 魔法の道具はスプレー缶
- 3-3 心に花を咲かせるアート
- 3-4 脱サラという見切り発車で壁を壊す
- 3-5 6つの顔を持つ芸術起業家

4. 目に見えない最上の喜び

- 4-1 芸術起業の神様
- 4-2 究極精神の先にある空なる領域
- 4-3 呼ばれないと行けない国
- 4-4 異国の地でアートを披露する
- 4-5 スーパースターも批判される

5. 人生はジェットコースター

- 5-1 地獄の釜の底
- 5-2 不幸の度合いは幸福の度合いに比例する

- 5-3 社会のゴミをかき分けながら
 - 5-4 キラリと輝く一筋の光明
 - 5-5 お金で買えない財産
6. 芸術で起業するメリットとデメリット
- 6-1 未来を想像して創造していく楽しさ
 - 6-2 成幸の正体
 - 6-3 学歴・性別・年齢・才能は関係ない
 - 6-4 無名の夢追い人の未来
 - 6-5 批判は成幸へのバネになる
7. 自分を革命していく
- 7-1 人生は才能だけで決まらない理由
 - 7-2 芸術起業で失敗する人
 - 7-3 芸術起業で成功する人
 - 7-4 人生という会社の社長になる
 - 7-5 夢のクリア化
8. 芸術起業を加速させる成幸マインド
- 8-1 投資脳を持つ
 - 8-2 右脳と左脳を融合させる
 - 8-3 先駆者のみ受けられる最大恩恵
 - 8-4 邪道か正道か
 - 8-5 想念の強さが道を切り拓く
9. 芸術起業の必須スキル
- 9-1 自己管理は人生の土台
 - 9-2 3つのマネジメントスキル
 - 9-3 芸術起業の心構え
 - 9-4 芸術起業の戦略
 - 9-5 芸術起業の成幸方程式

～メッセージ～

人生という名の航海

人生を狂わす2つの見えない波

さいごに

脱サラ芸術起業家の人生

これからはじめる知覚動考

あとがき

著者略歴

1. 超人の小さな夢と光

1-1 生きる希望がない絶望感

「おれの人生、終わったな…」

そう痛感した僕は16才、高校に入学した時のことです。高校受験を失敗した当時の僕は、絶望のドン底にいました。なぜなら、「学歴=成功した人生」だと信じ込んでいたからです。希望の進学校に合格することが、幸せで物質的に豊かな人生への第一歩だと思っていました。ましてや、「努力すればすべて報われる」と思って勉強に部活動に全力で真面目に打ち込んできた中学生時代の生き方が、まったく通用しなかったことにショックを隠せませんでした。

「大学進学率が高い有名高校に行って、高学歴な大学へ進学する。その後、大企業または公務員に就職して、家族を持ち、マイホームを建てて、一般的で安定的な人生を過ごす」

これがもっとも良い人生だと、地方公務員の親から教育されていました。

だから、高校受験に失敗した時点で、僕の人生は「負け組」決定だと感じたのです。入学早々、本当に魂が抜けてしまったかのようなようでした。高校生にしては覇気もなく、ダラダラとつまらない1日を繰り返す毎日を過ごしていました。

僕は普段から人と会話をするのが苦手でした。というよりも、コミュニケーションを円滑にとることに抵抗があったのです。なので、友達も作りづらい高校生でした。クラスメートの女子となんてまともに話せないですし、会話のキャッチボールをすることが一番苦勞していました。そして、さらにそれから逃げるように人を避けてしまっていました。

個人対個人はもちろん、個人対団体はさらに苦手でした。特に、大勢の人前で話すことなんて、本当に無理だと感じていました。あがり症と赤面症、吃音など恥ずかしい欠点を披露してしまうことで頭はいっぱいだったのです。朝のホームルームで学籍番号順に日直当番が周ってくる時は、本当に辛かったです。学校を休みたい衝動に駆られながら

も、無理して人前で話そうとすると焦りと混乱で一言も言葉が出なくなります。喉がカラになり、急に何も話せなくなっていました。

福島県の田舎で育ち、高校受験に失敗して生きる希望を失った、コミュニケーション能力が低い超凡人な高校生。それが16才の僕です。

そして、親が公務員ということもあって、一般の家庭よりも規制や教育が厳しいと感じていました。思春期には手を出したくなる酒、タバコ、ピアス、頭髪染めはもちろんNGですし、「子どもが迷惑を起こしたら公務員をやっていられなくなる」という世間体を常に意識させられて目立たないようにしていました。例えるなら「カゴの中の鳥」のような、縛られた毎日だと感じていたのです。

だから、自由を得たいと思いました。誰にも何も言われたい、行動範囲も狭くなく、好きなだけ好きなように制限なく自由に生きたかったのです。時間も環境も縛られない、本当の自由を手に入れたいと心底、願いながら朝を迎えていました。

高校受験に失敗して第三志望の高校に滑り止め入学した僕は、いつも自分にこう問いかけていました。

「どうすれば自分なりの自由を手に入れられるのだろうか？」

漠然とした将来の不安を抱えながら、自転車で田舎道を走る毎日でした。

<ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・悲劇のヒーローになって落ち込んでいても人生は変わらない
- ・現状満足は退化の道
- ・自分の内面と外面を客観視して評価する
- ・「なぜ」から「どうしたら」の問題解決思考パターンに変える

<響いた言葉とその解釈>

「剣道やってるのだから、人前で話すこともできるんじゃないの？」

…ホームルームで何も話せない僕に、担任の先生から言われた言葉。
あまりにも完璧主義だった当時の僕は、人前に出ると一言も言葉が出ない極度のあがり症を持っていました。「このままではダメだ」と真剣に自分と向き合うキッカケになった一言でもあります。

「迷ったら己が負ける。心に設計図を描け」

…中学生の時に出会った言葉。
壁にぶつかった時は、この言葉を思い出して、自分の心の声に耳を澄ませています。現代では他人とコミュニケーションするためのツールが多くありますが、自分とのコミュニケーションをとる時間を作ることも必要だと思います。自分という一人の人間を深く知ることで、本当の意味で人間性を磨いていけるからです。そのためには、嘘偽りない心の声に従って、自分を信じて突き進んでいくことが重要になっていきます。

1-2 自己プロデュース力は人生を変える

自己探求とは、ゴールが見えないマラソンだと例えられます。「用意ドン！」でスタートして、一步一步自分のペースで前進していく長距離走です。その走行途中で石や花を見つけたり、先を行く人の背中を追ったり、休憩したりしながら、**何事にも代えられない素晴らしい景色**を眺められるゴール地点へと向かっていきます。

どれくらいの時間、内なる自分と会話したか覚えていないくらい、高校生の僕も自己探求していました。目覚めた時も、食事中も、授業中も、帰宅中も、ずっと本当の自分から楽しめる人生を想像して思い描いていました。

すると、霧が晴れるようにあるゴールが見えてきたのです。幾度となく自問を繰り返す日々、「大学進学を果たすことで実家から出て一人暮らしをする」という目標が見えました。ゴールが決まれば、あとはどうすればそこへ最短で到着することができるかです。

高校受験に失敗した僕が入学した高校は、市内で2番目に学力が低い私立高校でした。

なので、誰よりも戦略的に努力しないと大学進学は、叶わぬ夢で終わってしまうことも理解していました。

「入れる大学があるなら行きなさい」と親から言われた僕は、「やれるものならやってみろ！」と言われているように捉えたのです。そして、「絶対に納得できる大学に入ってやる！」と心に決めました。かといって、現時点で学力が低い僕はそんな簡単に大学に入れるわけがないことも痛感していました。

そもそも進学校ではない高校に在学している時点で、大学入試への道ではすでに遅れをとっているともいえます。多くの高校生のように塾や家庭教師の力を借りて大学進学を目指すのが、果たして一番の得策なのでしょうか。全国の高校生たちとセンター試験を受けて、競争しなければいけないのでしょうか。

「この状態から大学に行くためには一体、どうすればいい？」

資料を読み漁っていろいろと調べました。そして考えに考えた末、活路を見出すことができたのです。それは、「高校の推薦で大学進学する」ことでした。これしかありません。というのも、進学校に通う学力の高い全国の猛者たちと真っ向勝負することなど、「戦車に竹やり」といっても過言ではないからです。凡人は凡人なりに、天才に追いつき追い越す「思考」と「覚悟」を持たばいいと考えていました。「凡人でも天才と肩を並べられることを証明してみせる」という決意もありました。

1-3 少数派を選ぶが勝ち

大学へ進学するための入試は大きく分けて4種類あります。それは、「一般入試」「センター試験」「AO入試」「推薦入試」です。

「一般入試」とは、高校卒業見込み資格がある高校生が、各大学が行う学科試験と面接試験の結果で合否を決する入試のことです。これが一番ベーシックな大学入試ですが、一般入試を突破するための第一関門のような試験「センター試験」が立ちはだかります。国公立大学を志望する高校にとっては必須となる、全問マークシート方式の入試です。この2つは学力、いわば記憶能力や計算能力、読解力などを重視した左脳を使う入試になりますが、人柄やアピール力を面接試験で判断する右脳を使った入試もあります。

それは「A0入試」と呼ばれ、大学側が求める学生像と一致することが重視され、学生自身の人間性や理解の深さを何度かの面接試験で判断されるアピール型の入試のことです。人前で主張することが得意で、生徒会や文化祭など全体を仕切るリーダー的存在の生徒が合格しやすい入試だともいえます。当然、コミュニケーション能力の低い僕は当てはまりませんでした。

そこで僕が狙った方法は、推薦枠に入ることができれば99%合格すると言われる「**指定校推薦入試**」です。どんな目的と意志を持っているかを主に面接試験や小論文で判断される入試で、校内では一つの大学の一つの学科の推薦枠は**1名**に限定されます。そのためには、校内で「この生徒だったらこの大学に推薦してもいい」と思われる生徒でなければなりません。後輩から尊敬される母校の代表となるような存在といっても過言ではありません。いわゆる、「**模範生徒**」という生徒です。

次に「模範生徒になるためには、どんな要素が必要だろうか？」と考えました。すると、大きく分けて、「学力の数値」「部活動の成績」「資格の取得」「先生からの評価」の4つのテーマになることが分かったのです。

まずは「学力数値」です。これは、校内の中間・期末テストと全国模擬試験の成績で数値化されていきます。校内では何番目で、全国では何番目に位置するのかという順位のことです。指定校推薦の審査では、校内の先生たちが集まって「**大学に推薦する価値のある模範生徒**」を選びます。なので、全国模擬試験よりも校内の中間・期末テストでの点数の方が重要視されるので一番力を入れるべきところになります。

僕は得意科目の英語と生物で高得点を出し、苦手科目の国語や社会を中心に勉強して、なんとか校内2位まで上げることができました。1位を取れば文句はないのですが、テスト前に漫画を読んでいてもずっと1位をキープする天才がいましたので、僕はずっと2位をキープするようになりました。凡人が真っ向勝負で天才に勝つことは簡単ではありません。しかし、別の分野で「**天才ができないことをやれるのが凡人**」でもあります。なぜならば、正しい努力と戦略を融合させられれば、天才が発想しないことを創造できるからです。また、天才はあまり向上心がなく、現状に満足するタイプが多いことも事実だと思います。天才を超えるための必須要素が、2つめ以降のテーマとなります。

「部活動の成績」については、「**県大会出場枠に入る**」ことが重要でした。なぜなら、僕が所属する剣道部は、県大会へ出場する以前に予選負けが数年も続いていたからです。先輩もいない1年生と2年生だけのチーム編成で、一体どこまで勝ち進めるのだろうか

と常に不安でした。逆にいえば、3年生抜きのレギュラーメンバーで、弱小剣道部を初の県大会出場まで導くことができれば好成績になります。高校の名誉に賭けて、なんとしても引っ張っていかなければならない気持ちに駆られていました。

後輩からの期待と先輩がいない不安が複雑に混ざり合いながら、接戦になった時もありました。個人戦は自分の実力がすべてなのである意味、精神的にも身軽なのですが、団体戦では1勝の重みを知るようになりました。同時に、本当に大切なことは稽古の量ではなく、**チームの団結力**だということも理解できました。そして、多くの強豪と切磋琢磨し合った結果、僅差で県大会へ出場することになったのです。

「川名、任せたぞ…」

勝負が決まる試合の前に言われた先生の一言に、すべての想いが入っていました。期待も兼ねて言ってくださった想いを、目に見える結果にできて本当に良かったと思います。弱小剣道部が初県大会出場を果たしたことで、翌年から毎回出場することになったことも嬉しく思います。やはり、最初から諦めて試合に望むことと、「無理だ」という常識をいかに壊して自分やチームを信じられるかでは、雲泥の差があります。

部活動で県大会出場権を獲得した次は、「資格の取得」になります。資格といっても、誰でも簡単に取得できる低価値の資格では意味がありません。難易度は高く取得率の低い資格、客観的にみても**価値ある資格**を取ってこそ、模範生徒としての価値が上がると思ったのです。そこで僕は少数派の難易度が高い資格として、「剣道三段」「漢字検定2級」を選択しました。

「剣道三段」は、中学三年生の時に二段を取得していたので、稽古次第で取得できる資格ではありました。しかし、二段と比べると格段に不合格者は増えますし、受験料も三万円はするので無駄にはできない想いで望みました。合格率は50%以下になります。

「漢字検定2級」は、なんとなく漢字が好きで覚えやすいという単純な理由から受験してみました。誰でも受かるであろう「4級」を持っていた僕は、「3級」と「準2級」を飛ばしていきなり「2級」を受験しました。合格率としては、40人中1人くらい合格する程度だが、「飛び級受験」という荒技を使って、自分で自分を追い込んでみたのです。皆、センター試験の勉強をしている高校三年目の夏休みはずっと、漢字検定の試験対策に費やしたことも大きな要因だと思っています。最初から「センター試験は受験しない」ことを決めていた僕にとって、それくらいは未来への自己投資だと考えていました。

漢字検定2級の検定受験料は五千円でした。アルバイトすれば1日で稼げる金額なのですが、僕が通っていた高校は基本アルバイトを禁止していました。なので、校内でお金を稼ぐことを考えたのです。

1-3 タブーに秘密が眠っている

「お金」について日本では、学校でも家庭でも禁句ワードの風習が今でもあります。根本をたどれば、戦後から国民は型に嵌められた教育システムで洗脳させられているのですが、その上でどう生きるかの方が重要だと僕は考えます。なぜ、「お金」について正しい教育がないのかというと、それらは人生で必ず関わることであり、同時に、捉え次第で仏にも蛇にもなりうるからだと思えます。

「お金」を得るための方法は大きく分けて、時間を切り売りする「労働タイプ」か、お金が流れるシステムを創る「知恵タイプ」に二分します。ゲームに例えるならば、「戦士」と「魔法使い」になります。フリーターもサラリーマンも、労働のために時間と場所に拘束される対価として報酬を得る職業だといえます。それに対して自営業や会社経営は、人や物を動かして、上手くお金が流通するシステムを構築することで報酬を得る職業になります。自分の労力を最低限に抑えることも可能ですが、時間を切り売していないためシステムが構築するまで報酬はありません。

「知恵タイプ」から派生して「能力タイプ」も存在します。一般人が簡単にできない特殊な能力を披露することや、創造物を生み出すことによってそれを換金する「アーティスト」や「職人」が当てはまります。つまり、「労働タイプ」も「知恵タイプ」もメリット・デメリットがあるということです。ここで問題なのは、これらお金の稼ぎ方を知らないで「労働タイプ」しか生きる道はないと思込まされていることであると僕は思います。視野を最初から狭くさせられている教育を、無意識で受けていることを恐ろしく感じるからです。

そう考えると、現在の学校は、労働者を量産するためにできた工場だともいえます。「右向け右」を教えたなら、素直にそのまま右を向くロボット的人間を増やしていくような教育施設でしょうか。その思考で単純化されたシステムの上を動く彼らは、無から有を生む知恵者の思考パターンなどあることも知らないのだと思えます。何も真実を知らずに

教育されてきた場合、10～20代で今まで受けた洗脳的概念を理解して、その後一旦破壊して再創造する必要があると僕は考えます。

「お金」についての正しい教育を受ける場所も教育者も近くにいないことから、いつの時代も、詐欺や犯罪は減ることがないのでしょう。そして、金欲に目が眩んで支配されながら生きている人は少なくないのです。また、「お金」については、「成長過程で自ら体験して慣れる」というような暗黙のルールが存在するかのように思えます。「**お金の使い方や増やし方、貯め方などは自分で学んで習得しろ**」と社会から言われているような感じがします。

僕がお金とサービスが循環する流れを創って、初めてお金を稼ぐことになったのは中学一年生の時でした。それは単に「マッサージすること」で対価をもらうことだったのですが、お客様は不良生徒に限定したことがポイントになります。僕は不良グループ・真面目グループ・オタクグループなど、どのグループにも所属しない生徒でした。しかし、ある意味、どのグループにも入っていける存在だったからこそ、相手にとってちょうど良い「距離感」があると感じてもらっていたのかもしれません。

よく親の肩や背中でのマッサージをしていたからなのか、どこがツボでどうマッサージすれば気持ちが良いのかが一瞬で分かるようになっていました。基本的にケンカが好きな不良生徒は、運動が得意で筋肉質な人が多かったです。なので、疲労により肩こりや筋肉痛になっている可能性が高いことは間違いありません。彼らはそれをすぐに回復させたいという願望があり、マーケティングでいう「需要」が存在することになります。授業の休み時間、筋肉痛の彼らにマッサージして数百円ではあるが、確実に報酬が入る自営業ビジネスになっていました。後に「生命エネルギー」について記述しますが、これらの経験から「中国にいる気功の達人のようになりたい」と願う変な中学生でした。

アルバイトが禁止だった高校時代には、資格取得のために校内でビジネスをして資金を集めていました。そして、検定料や問題集に充てたのです。クラスメートはセンター試験の勉強をしている中、僕は夏休み期間に漢字の勉強をひたすらしていました。その結果、「漢字検定2級」という高校生にとっては難易度の高い資格を取得することに成功したのです。こうして、「剣道三段」のほか、一般の高校生が取得できない資格を持つことで、他の生徒との差別化を測っていきました。

指定校推薦枠の1名に選ばれるためには、「部活動の成績」も関係します。個人戦または団体戦でレギュラーメンバーに入ることはもちろん、試合でどんな結果を出したかが判断基準になるのです。僕の場合、弱小剣道部をまとめ、後輩と共に県大会へ出場でき

たことが、大きなポイントとなりました。その他には、校内を綺麗にするために清掃を呼びかける環境委員会の委員長になったり、積極的にボランティアもしたりすることも、模範生徒と呼ばれる所以になったと思います。

最後に、「先生からの評価」も大きな基準になります。それは一言でいうならば、「多くの先生から自分の子どものように好かれる生徒であるか否か」ということになります。そのためには、コミュニケーションを取らなければいけないし、まったく接点がない先生にも噂が広まるほどの行動をしなければならないと考えていました。具体的には、普通の会話でも楽しいと思える好きな先生を1人でも見つけることでした。その先生が本当に「この生徒ならあの大学に推薦しても良い」と思ってくれるならば、他の先生たちにもそう伝えてくれます。また、先生よりも早く登校して自習することで確実に「学力」の成果も上がるようになりました。

1-5 犠牲を払うことで得られるリターン

これらのポイントとなる課題をすべてこなすと当然、高校生らしい遊びをする時間はなくなっていくます。

「青春時代、夢のために全力を注いでもいい」

「大学合格が決まってから存分に遊べばいい」

「ここでの忍耐がいつか財産になる」

そう言い聞かせながら、一つずつやるべきことをクリアしていったのです。むしろ、そうしなければ周囲の生徒と同じように適当な進路に進み、予想できる未来が現実になってしまうことを鮮明に思い描いていたからこそ実践できたといえます。校内一の模範生徒となるために、指定校推薦枠1名に入るために、時間も労力もすべて費やしていました。そうする過程で、セルフブランディング（自己価値向上）の楽しさも自然と覚えていきました。

もちろん、「指定校推薦枠に入る方法」なんて一般書籍はもちろんマニュアルは存在しないので、すべてが手探り状態でした。「これでよい」と思えることは推薦枠1名に選ばれる時までなかったもので、精神的に楽ではありません。むしろ、精神が少しずつ削れていくように感じていました。まさに、暗闇の中をさまよい、自分だけを信じて小さな

光に向かって突き進む旅のようです。ゴールが見えないマラソンほど、精神的なプレッシャーは計り知れないものになります。

思い描いた目的を達成するため、友達と昼食を取ることや、感情の波が乱れる恋愛に割く時間はすべて捨てていました。本当に大学進学して一人暮らしするためだけに全力を注いでいました。それほど、僕にとって自由を得ることは最重要で、人生を切り拓く鍵だったのです。

「何かを手を得るためには、何かを犠牲にしなければならない」

このことが無意識に腑に落ちていました。「他人に優しく、自分には鬼の如く厳しく」をモットーに自分を自分で教育していったのです。

推薦枠を決める会議では、同等の成績を残したライバルである生徒と僕が天秤にかけられました。「あなたの推薦枠を決めることに一番時間がかかった」と担任の先生から言われたので、相当時間を費やすほど難しい審査になったのだらうと思います。僅差の結果、僕が校内で1名しかない希望の大学の「指定校推薦入試枠」に入ることができました。

実は結果が決まる前日、最後の賭けに出ていました。推薦してもらいたい志望校を2つ挙げて書類を提出するのですが、ライバルはきっと「偏差値があまり変わらない大学を第二志望にするはず」だと考えました。つまり、専修大学法学部と神奈川大学法学部はあまり偏差値が変わらないので、第一志望を専修大学に、第二志望を神奈川大学と志望してくるだろうと予想したわけです。何も考えなければ、第一志望に通らなかった保険として、誰でも偏差値の近い大学を並べるでしょう。

しかし、僕は最後の一手としてリスクある王手をかけました。それは、第一志望と第二志望の偏差値の幅をきかせることでした。つまり、「**第一志望に通らなかつたら偏差値の低い五流大学に推薦される**」というように書類を提出したわけです。先生たちは学力や部活動などの成績がほぼ同じの僕たちをどう考えるかを、真剣にシミュレーションした結果、この一手になりました。なぜならば、「2人とも偏差値がなるべく高い大学に進学してほしい」と先生たちは考えるであろうと踏み、この一手を打つことで「**第一志望の専修大学に入りたいので他の大学には興味がない**」と思ってもらうためでした。

結果、この戦略が通用して僕が第一希望の東京の神保町にある専修大学へ、ライバルは神奈川大学に入学することになったのです。ここの大学の指定校推薦入試は、「小論文

のみ」ということもありましたが、地方公務員の父親から受けた教育から「公務員は当然なるもの」というように思っていたので、軽い気持ちで法学部に決めていました。

「春から念願の大学生だ。そして、やっと自由になれる！」

そう歓喜して、ベッドに倒れ込みました。当時17才の僕は、普通の高校生では経験できないほど研ぎ澄まされて削られた精神を回復するかのように、安心感に包まれながら目を閉じました。2年間ずっと戦ってきた戦士に、ようやく休息が与えられたのです。

<ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・誰も見ていないところでゴミ拾いをする
- ・時間厳守を徹底する
- ・勉強の努力は人に見せない
- ・トライ&エラーで成果を出す
- ・親世代の視点で物事を考えてみる
- ・何かを得るために率先して犠牲を払う

<響いた言葉とその解釈>

「入れる大学があるなら行きなさい」

…落ちこぼれ高校生だった僕へ発した母親からの言葉。

ある意味、発破をかけられた僕は「絶対、認められる大学に行ってやる」と強く決意しました。この情熱が夢への原動力となり、指定校推薦枠を取得する鍵となったので今では感謝しています。

「成功した者は皆、すべからく努力しておる。地道な努力こそが、最大の近道と知れ」

…中学生からずっと読んでいた漫画の中の言葉。

座右の銘ともなっています。「愚直な努力こそが、天才を超えるための最大の武器」と言えるように行動で証明していきました。

2. 最大の弱点は武器になる

2-1 人生を180度変える影響力

高校時代のすべてを費やして、念願の大学生になりました。法律を学ぶために講義に出席する毎日。高校時代に多くの犠牲を払って手に入れたキャンパスライフ。サークルやアルバイトも楽しんで、一人暮らしを満喫するつもりでした。

しかし、必須科目である一番重要な法律を学ぶようになって「非常につまらない」ということを実感していました。そして、「一般的な人生」の未来が見えてしまい、大学そのものに興味がなくなってしまったのです。

僕が考える「一般的な人生」とは、このような人生の流れを指します。まず、大学生活を自由に満喫して、大学3年の終わり頃から就職活動をし始めて企業に就職します。そして、毎朝満員電車で通勤して帰宅してはストレスを発散するために酒を飲んで床に就きます。結婚後、子どもができて住宅ローンを組んでマイホームを建てます。白髪が増えても家族を養うために不健康な食事やストレスによって病気になりながらも会社へ向かいます。年金がもらえれば救われますが、どうなるだろうかと不安を抱えながら生きていきます。還暦を過ぎてから孫の顔を見ながら、老後の趣味を楽しんでこの世を去っていきます。

これらを想像しただけで、非常に恐ろしくなりました。というのも、親戚を含め、僕の周りにいる大人たちはほぼ皆、このような人生の流れだったからです。周囲の大人の人生を見ても魅力的な人間は存在しておらず、模倣したいと心底思える理想像がありませんでした。なので、僕は違う道を歩もうと考えたのです。

「一般的で刺激の少ない人生を送るくらいなら、少数派で冒険的な道を歩んで人生を楽しもう！」

ラーメン屋のアルバイトをしていた19才の僕は、こう決意したのでした。しかし、「人生を心から楽しんで生きている大人」は身近にいないことに悩み始めました。世の中では「成功者」と言われている人は少数なのだから仕方がないのですが学生はもちろん、キラキラと輝くような魅力的な大人がいれば教えを請おうとします。

「救世主とも思えるような、人生の成功者に会いたい」

そんな想いを抱きながら高校時代と同じように、今度は「どんな社会人になりたいのか？」と自問を繰り返しました。理想の人間像を明確にすることからスタートしたのです。あらゆる本を買ってきては読破して、新しい自分を創る材料にしていきました。食費や生活費を最低限に抑えて、自己投資するためにお金と時間を費やしたのです。さすがに水とお菓子（カントリーマアム1個）だけで1日過ごすのは、今思うと節約しすぎになりますが、自己成長意欲が盛んだった当時はそれでも平気でした。むしろ、それくらいストイックでなければならなかったのです。なぜなら18才までの僕は、あまりにもコミュニケーション能力の低い凡人な学生だったからです。

「人と1回もコミュニケーションを取らなくても給料がもらえる仕事ないかな……」

そう真剣に考えるほど、対人関係が苦手で仕方がなかったのです。人脈を広げられるチャンスがある大学にいても、それを活かさない自分が孤立していました。アルバイト募集中のお店に電話することすら緊張してできない僕は、お金を自分で稼ぐこともできないとっていました。何度かけ直したか分かりません。さすがに電話すらできないのは話にならないので、履歴書を持って実際にお店に足を運んでみることにしました。その時に「アルバイト募集」の貼り紙がしてあったお店が、大学の近くにある小さなラーメン屋でした。

「アルバイトしたいんですけど……」

緊張しながら発した言葉を、ラーメン屋の店長はすぐ汲み取ってくれました。履歴書を最初から持って行ったこともあり、その場の面接で採用してくれることになったのです。なので、すぐに働くことになったのですが、なにせ都会での初めてのアルバイトは緊張と失敗の連続でした。

このラーメン屋は神奈川県では三店舗しかない小さなお店です。しかし、テレビや雑誌などのメディア取材は一切断って、リピーターを中心に美味しいラーメンを提供し続ける社長の信念が素晴らしいと思います。働き始めてすぐに「経営者」という職業に魅力を感じたことでもあります。しかも、年末には社員だけでなくアルバイトにまでボーナスを与える社長の姿を見て、人生で初めて雇用者とは違う思考と行動を学んだ瞬間でした。一体、アルバイトにまでボーナスを支給する経営者は日本にどのくらい存在するのでしょうか。

ラーメン屋のホールスタッフとしてアルバイトを始めた僕の仕事は最初、水とお絞りタオルをお客様の座るイスに持って行くことでした。そして、食券をもらいながら「麺の濃さ」「味の濃さ」「油の多さ」の三点を「大中小」の三段階からお客様に聞くことからスタートします。この接客行為が、会話下手な僕にとってものすごく苦痛でした。そんなぎこちない僕の接客を見て、店長は怒ったりはしなかったことが当時は不思議でした。怒る代わりに、わざわざ別の店舗に僕を連れて行ってきて、ホールスタッフの接客対応を客観的に見せてくれました。今振り返ると、自分の休みを犠牲にしてまで新米アルバイトの僕を育ててくれた店長には頭が下がる気持ちでいっぱいです。この日から僕の中で何かが変わっていききました。以前から自分を変えるべきだと思っていたので、脳科学や心理学、発声法についても勉強し始めました。

「いらっしやいませ〜！」

大きな声で挨拶することから意識していくことで、店長含め、他のスタッフの方々も「あいつは変わった」と言ってくれるようになりました。挨拶を元気よくすると、あまり緊張しなくなることも体感していったのです。すると、お客様にお好みを聞くことにも慣れてきて、少しずつサブメニューを作ったり、社員のみが作れる本格的なラーメンを作らせてもらったりと、コミュニケーションしながら働くことが楽しくなっていました。しかし、その頃にふと頭によぎることがありました。

「大学を卒業してからもこのように雇われてお金を稼いでいくのだろうか……」

雇用者と経営者で仕事のスタイルも思考も行動も180度違うことを、ラーメンを作りながら冷静に考える自分がいたのです。

「誰かに使われる道しか知らないとずっと働きっぱなしになる」

「時間や場所に制限されずに自分らしく思い切り楽しんで自由に生きる道はないのだろうか」

そう強く思いました。それから理想と現実のギャップに直面しながらも、どの職業・仕事が一番自分に合っているのか調べては自問自答する日々を送る大学生になっていました。大学での講義が終わってラーメン屋に向かう途中、中学時代の友人から久しぶりにメールが届いたのです。長いメールの文中に一筋の光が見えたような気がしました。

「大学時代は長い人生を謳歌するための猶予期間だと思う」

確かにそう書かれてあるメールを読みながら、同年代にしては大人な考え方だと驚きました。大勢の一般学生のようにキャンパスライフを楽しむのではなく、「社会人になる前に自分を探求して確立しておこう」という意味も含まれるこの文章は、僕の人間的改革のキッカケになったのです。その友人と再会して話すと、圧倒的に内面が磨かれていることを感じました。それは、一般の大学生にはない「ビジネススキル」を身に付けていたからです。スーツの着こなしからボールペンの使い方、ビジネスマナー、プレゼンテーションなど、社会人が普通にやっていることを大学時代にやっていたことに驚きを隠せませんでした。

「大学時代は人生の猶予期間」と教えてくれた友人の行動と思考を目の当たりにした僕は、約2年間もの自由な時間を使える大学生活の中でやるべきことは「**自己探求**」と「**人間的成長**」だと悟りました。そして、社会で必要になるであろうスキルを大学時代に身に付けると、社会人になってからのスタートが速いことも理解できました。

「理想像を明確にするために人生の成功者に会いたい」

そう願っていた僕はビジネススキルを上げていた友人に紹介してもらい、ある成功者に会ったのです。大勢の前で論理的なプレゼンテーションを堂々を行い、視聴者たちに刺激を与えられる人に魅力を感じていました。その成功者を師と仰ぎ、ビジネススキルを磨きつつ学んでいったのです。同時に書籍への自己投資は怠らず、幅広いジャンルから知識を吸収しては身に付けていった僕は、少しずつ「普通じゃない大学生」に変化していきました。

初対面の人との自己紹介、個人対個人でのビジネスマナーとトーク、個人対団体でのプレゼンテーション、メモの取り方、ビジネスマンとしてのスーツの着方など、社会人が身に付けることの多くの基礎を大学時代に身に付けていきました。新米サラリーマンのようにスーツに着られているのではなく、数年は社会人をやっているように思われるほどの雰囲気と論理的思考能力を持つ大学生は非常に稀だと思います。

「時間のある学生のうちに遊べるだけ遊んでおいた方がいいよ。社会人になったら遊ぶ時間なんてないからね」

年が近い従兄弟を含め、そうアドバイスする社会人の方が多数だったが、彼らは例外なくサラリーマンでした。それも当然のことです。「人生の猶予期間」である大学時代を、後々に残らないただの遊びに多くを費やしていたからにほかなりません。自分の特性を

見極めたり、同志と夜通しで語ったり、社会人に必要なビジネススキルを磨いたりしていればそんなことは言えるはずがありません。

「時間的に自由な学生のうちに、本当の自分を探し出して、人生を楽しめるライフワークを見つけることに時間もお金も費やした方がいいよ！」

大学時代を濃密な時間を過ごしてきた僕は、現に学生たちにこうアドバイスさせていただいています。むしろ、自由に動ける学生時代に自己探求しておかないと生涯、惰性で過ごすことにもなりかねないとも思います。仕事に人間関係に多忙な社会人になってからは、自己探求への時間をなかなか割くことができないことも事実です。つまり、「人生のロングバケーション」とも言える大学時代を「浪費」したか「投資」したかで、雲泥の差が生まれるということです。

普通にすべての講義に真面目に出席していて、遊びに使うお金を稼ぐためにアルバイトしている大学生を4年間ずっとしていたら、間違いなく誰かに敷かれたレールの上に行くことは分かっていました。だから、僕は多数派のアドバイスを無視して、真逆のキャンパスライフを送ることになったのです。サークルに参加して仲間と遊ぶこと、アルバイトでお金を稼ぐこと、真面目に講義を受けることなど、大学生という守られた枠の中でキャンパスライフを謳歌することも楽しいのは間違いありません。しかし、それを理解した上で、何を犠牲にして、何を取得するのが重要なのでしょうか。

「若い時の苦勞は買ってでもしろ」

この格言は、大学生にこそ当てはまると僕は思います。未来の自分のために成長させる「経験」を得ることができるなら、「時間」と「お金」は惜しみません。このことは僕が今でも深く指針となっているモットーでもあります。自己啓発書、ビジネス本、ノウハウ本、小説、絵本、漫画などジャンルにこだわらず興味のあるものはすべて購読しました。自己投資は、本、CD、DVD、セミナーなど教材となるものすべてを指しています。「コミュニケーション能力が低いなら、他の能力で挽回しなければならない」という思いから、周りがやらないようなことをストイックにやっていました。それは知識、行動力、想像力など明らかに劣っていること以外の能力をなんとか伸ばして最悪、「平均して同レベルにしなければならない」という気持ちでした。

僕は大学生のうちにビジネススキルをある程度身に付けたおかげで、今では大勢の前で論理的にプレゼンテーションできるようになりましたし、絵を描く過程を見せることもできるようになりました。お金で買えないこの経験は、現在の僕のパフォーマンスの原

点ともいえます。また、凡人だった19才の僕に光を見せてくれた先輩の結婚披露宴が、2014年の春に行われました。10分間の余興でスプレーアートパフォーマンスをして、その場で完成した絵を2枚プレゼントできたことが何よりも恩返しだと思っています。今でも応援してくれている彼には感謝しきれません。

大学2年の中盤からは、さらに大きな視野で社会人の輪に入ろうと考えました。常に現状に満足しなかった僕は、社会人として成功している人たちの生の声を聞いて、大学生のうちにさらに自分を磨きたいと思っていました。

「やっぱり直接、本人に合って聞くのが一番だ！」

今思うと非常に突発的な行動だが、様々な分野で成功している人に対面でインタビューすることにしました。そこには、人生を180度変える出会いがごろごろ潜んでいました。

まずはインターネットを活用して、自分が想像する成幸者に近い人へメールを送ることから始めてみました。メールにはイントネーションがないのでニュアンスが伝わりにくいのですが、「成功の秘訣を知りたい」という気持ちに乗せることで、多くの経営者が対面で会ってくれるようになったのです。

「君、大学生でこんなふうに関わりに来るなんて珍しいね」

多くの経営者は、自分の成功哲学を熱心に聞こうとする大学生を歓迎してくれました。また、インターネットで知り合うほか、講演会やセミナー、異業種交流会などリアルな場に足を運んで人脈を作っていくことも同時進行で行っていました。

「若手のIT起業家の方ですか？」

グレーのスーツを身にまとい、学生など皆無の社会人交流会に参加したこともあります。自分の思想や信念を話すと30代のビジネスマンだと間違われる時も少なくなかったです。1日20万円のセミナーに参加した時は当然、大学生はいないので「20代のサラリーマン」として参加したりもしていました。

社会人からすると所詮、大学生は大学生なのです。いくらビジネススキルを身に付けていようが学生証を持っている大学生である以上、社会的にも守られていて本当の意味でリスクがないことは間違いありません。なので、学生であることを最初から明かすと見

下されることが多かったので、インタビューする時も途中から社会人として接することにしました。

合計100人ほどのビジネスパーソンから直接話を聞くことができたおかげで、自分の中で理想の成幸者に必要な部分が明確になっていきました。

<ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・本は最もローコストでハイリターン自己投資
- ・最悪な状況を想像してそうならないためにどうすればいいのか考える
- ・感覚に素直に従って行動してみる
- ・生涯、進化し続ける
- ・勇気を持って新しい世界に飛び込む

<響いた言葉とその解釈>

「学生のうちに遊んでおきなよ。社会人になってから遊ぶ時間なんてないから」

…従兄弟から言われた言葉。

僕はこのアドバイスを避けて、真逆のことを実行し始めました。その結果、「学生時代にとことん自己探求すれば社会人になってからより楽しめる」ことを体現できました。年上で自分よりも先に社会を知っているからといって、すべての他人の人生に当てはまるとは限りません。

「ともかくうごこう！ 知覚動考」

…「知覚動考」の順で実践していくと成功につながるという言葉。

「ともかくうごこう」と読み、「知って覚えて動いて考える」ことを意味しています。考え込む前に行動することの大切さを言い聞かせる合言葉でもあります。

2-2 成幸者にインタビューする

魅力的な人間像を探すことにした僕は、なりたい理想像を紙に書き出して、それに必要な要素をピックアップしました。

例えば、自信満々に人前でスピーチができることが自分の理想像の要素であれば、「プレゼンテーションスキルを磨く」という課題ができます。「人前で話す」という行為が嫌いで、やりたくないことナンバーワンだった僕は、自信があって魅力的なトークをする経営者がキラキラして見えたのです。

成功者インタビューでは、「短所を補うこと」そして、「長所を活かすこと」を意識して、多くの成功者から吸収していきました。インタビューした成功者の中でも非常に印象的で、理想像にもっとも近い人は、下の図の価値観を持つ人になります。



心・経済・健康の3つ柱は、基本的には家庭と学校で学んだことがベースとなっています。

例えば、「牛乳はカルシウムがある飲み物で、背が伸びるからどんどん飲みましょう」

や「貯金箱にお金を定期的に入れましょう」など各家庭で親から教わるのが土台となり、現在の生活に反映されていると言えます。それが、「一般的な」教育と環境です。

しかし、この図で伝えたいことは、「一般的」ではなく「少数派の」教育と環境が土台にあると3つの柱が別次元に向上させられるということです。

例えば、「牛乳はアレルギーを引き起こす原因となるから飲まないようにしましょう」や、「お金は貯金箱に入れるのではなく、お札と小銭入れを分けて綺麗に財布にしまいましょう」など一般的に教えないような特殊な常識が土台となっているからこそ、幸せに好きなことで成功する成幸者である、と言えます。

帝王学ともいえるこれらは、「社長の子は社長」になりやすいように、幼少期から一般的な教育とは違う教育を受けています。

なので、特殊な教育と環境の上に特殊な心・経済・健康の知識が発現し、それらをバランスよく向上させるための実践が必要になってきます。

成幸者から学んだことを簡潔に解説します。

「人生の成功とは、真に幸せな状態を常に創ること」

「真に幸せな状態を常に創ること」というのは、「幸せはなるものではなく、感じるもの」という認識からきています。「結婚して幸せになろう」と「なるもの」だと普通にいわれていますが、幸せとは「幸福感に満たされる状態」を指します。なので、「幸せな状態」を意識的に創ることもできます。僕が出会った成幸者たちは、意図して幸福感を感じるよう環境を整えていました。

「それには、心の豊かさ、経済の豊かさ、健康の豊かさの3つがバランスよく、より高く維持されていることが必要不可欠である」

「周囲の人からの圧力」や「将来への不安」など、常に感じているのならば、やはり心が貧しいと言えます。それがストレスにつながり、直結している身体に影響が出て病気にもなりうるからです。ここでいう「心の豊かさ」とは、真に充実した日々を送ることからくる「余裕を持った心」でもあり、人生に対する内なる自信があるか否かということも関わってきます。

「そして、それらを上手く整えるには、ビジョンに見合った教育とビジョンを現実化するための環境が土台になる」

ここでの教育と環境についても、「少数派の特殊な」環境と教育になります。なので、目的に合った専門学校に通えばいいというわけではありません。例えば、美大に特化した予備校に通って美大の試験対策をすれば、合格する可能性は高くなります。しかし、ビジョンに合った特殊な教育と理想を現実化するための環境がないとアートで生きていくことは難しいとも言えます。これは、美容専門学校に行っても、髪を切るスタイリストになれず、一生、アシスタントを続けている美容師がいる例にもつながります。

才能があるなしに関わらず、僕はこれを「**特殊性の欠如**」と考えています。やはり、「特別な結果を出したいならば、特別な思考と行動をしなければならない」という成幸者の教えは間違っていないと思いました。

このようなシンプルで、奥深い定義をされていました。当時、自己探求をしていた大学生の僕には、非常に響く言葉・価値観であって、今でもそれが指針となっています。

家族や友人に恵まれた「心の豊かさ」も、使いたい時に使えて必要な時に入ってくる「お金の豊かさ」も、動きたいように自由に行動できる「健康の豊かさ」も、全部大事だということを教わりました。どれ一つとして欠けると豊かさのステージはバランスを崩し、不幸になってしまいます。

億万長者や年収1000万プレイヤーが成功者と見られる一方、上図にある3つの豊かさをバランス良く向上させた人生のステージで夢を叶え続ける「成幸者」の方が、僕は真の成功者だと確信しました。だから、「成功者」ではなく、幸せに人生を楽しんでいる「成幸者」という文字を使っています。

「心・経済・健康の3つであえて一番重要なのはどれ？」

こういった質問をたまにされますが、強いていうなら「健康」だと答えています。なぜなら、病気をして入院しては思い通りの行動ができないことは確実であり、それでは人生は楽しめないからだと考えからです。「健康」は人生で一番重要な土台であると思っています。

僕は幼少期から「アレルギー性鼻炎」になっていたのも、非常に呼吸が苦しい生活をしていました。ポケットティッシュでは量が足りなく、ティッシュボックスを学校に持っていかねばならないほど悪化していました。そして、鼻呼吸はまともにできないので勉強に集中することもできない悪循環に陥っていました。耳鼻科の病院で診察を受けて薬を服用しても、一時的に緩和されるだけで完治することはありません。そして、「手術しないと治らない」と言われるほどでした。

しかし、大学生になってからは「アレルギー性鼻炎を根本的に完治させたい」と強く思うようになりました。根本治療にならない病院や薬を使うことをやめ、自分の自然治癒力のみで治すことを決心したのです。なので、あらゆる健康法を研究して実践して行きました。すると、日々の食事が心身に影響を与えることを学んだことで、手術・薬に頼らずアレルギー性鼻炎は自然に改善されていくようになりました。後に、食事によって国民はコントロールされていることを知ることになりますが、ここまで健康オタクになったのは親戚の叔父の影響だと思えます。

バーベキューやキャンプ、海釣りなどアウトドアに連れて行ってくれた叔父は、タバコとアルコールは大量に摂取していました。そして、僕が高校生の時に、心筋梗塞になって入院にすることになったのです。入院して間もなく手術が決行されて、親と見舞いに行った時のことです。叔父の目はまるで死んだ魚のようになっていて、今まで感じていた魅力的な雰囲気が消えていました。酒とタバコのやり過ぎは健康と人間的魅力をも奪っていくことを、叔父の姿を見て理解することになりました。

結局、叔父は退院後にタバコはやめて酒の量は減らすことになりましたが、人間的魅力はそう簡単に戻りませんでした。健康体を維持することは事を成し遂げるために必須であり、そのための食事は最大の自己投資だと叔父の姿をみて痛感させられました。つまり、「病気になってから治す」治療医学ではなく、「病気になる前にならない体を創る」**予防医学**を自ら実践するようになったのです。

そうすることで、最大限のパフォーマンスが常に発揮できる状態を維持することができます。その上で、物理的に豊かになるために仕事をして「経済」のステージを上げ、精神的に豊かになるために自然から学んで「心」のステージを上げれば良いのです。どれか1つのステージが突出してバランスを崩すなら、3つのステージを調和させることの方が重要だと僕は考えています。

非常に謙虚で普通に屋台でもご飯を食べる大富豪や、ホームレスだけど学生に寿司をご馳走する人など、外見と内面にギャップのある人にも出会ってきたからこそ僕はこう思

います。

「人生はどれだけ思った通りに現実化させて、どれだけ楽しんだか」

その度合によって、その人の価値が決まるということです。仕事でも、健康でも、人間関係でも、どんなことでも当てはまります。

成功者インタビューを大学時代にやっていた僕は毎日スーツで登校していたので、大学2年生の頃から就職活動生のような感じだったと今では思います。着慣れない初々しいリクルートスーツの就活生ではなく、すでに社会人だとも思われるような落ち着きがあって、自分の意見を論理的に話せるビジネスマンになっていました。また、ワイシャツとネクタイの色で相手にどんな感情を与えるのかも考えていて、30本以上ネクタイは持っていました。カラーセラピーもセルフブランディングに活用していましたが、本格的にアートをやるとは思っていませんでした。

成功者インタビューや異業種交流会などでいろんな人に学ぶことで、徐々にビジョンが明確になっていくことに喜びを感じるようになっていました。一般的な大学生活に退屈していた僕にとって、社会人との交流は非常に楽しく有意義な時間でした。

ある日の就職活動の帰り道、渋谷の駅前の人通りの多い場所にホームレスの男性が座っていました。なぜ気になるのか不思議な気持ちになりながらも極寒の中、話しかけてみた時のことです。季節は真冬、仕事帰りのサラリーマンも学生も皆、コートを着て足早々と駅に向かっていました。

「ここ寒いですよね～」

ストライプスーツを着た22才の大学生は、路上に座っているボロボロの服装をした50代男性に声をかけました。当たり障りのない会話をしていたら、「どんな経緯でどんな考えでこの人はホームレスになったのか」を知りたくなっている自分がいました。

「僕、ビール買ってきますので続きは飲みながら話しましょう！」

まるで居酒屋で話す雰囲気になってきたので、お酒を買いにコンビニに向かおと立ちました。

「じゃあ、アサヒな！」

そう僕の背中に投げかけられました。ホームレス生活になっても飲み慣れているのでしょうか。

「おごられるのに銘柄を指定するのかい」

僕は内心そう思いながらも、350mlを2本ずつ買ってきたビールで乾杯しました。すると男性はビールを地面に置いて、ゴソゴソと何やら袋からスーパーで売っているようなパック詰め寿司を僕の目の前に差し出したのです。

「絶対、賞味期限、過ぎているでしょ…」

そう疑いながら、チラッと確認して見てみたところ大丈夫でした。

「これ今日、買ってきたんだよ」

男性のこの言葉で、「ホームレス＝衣食住なし」という僕の固定概念を軽く崩していきましました。僕らをゴミのように見下す人々の視線を感じながら、いつの間にか、4時間も路上に座って話をしていました。コンビニで買ってきたビールと寿司をつまんでいたら、終電の時間になっていたほど楽しかったです。そして、一番聞きたかった質問を投げかけてみました。

「なぜ、こんな人通りの多い駅前に座っているのですか？」

この質問には、頭をハンマーで殴られたかのような回答が返ってきました。同じ場所に座っていて、ゴミ同然に扱われやすいこの場に居続けることすら苦行だと感じている僕にとって、最大の疑問点だったのです。

「キミみたいに、私に話しかけてくる人がいるからだよ」

これを聞いた時は、「日給1万円」と会話の中に出たことは本当だと確信しました。月収50万円だった元スカウトマンなら、本気で試行錯誤すればそのくらいの収入は普通なのかもしれません。つまりこの男性は、「話しかけてきた人に食事やお金を無料で頂戴する」ということが仕事で、そのためには「話しかけてもらうこと」を真剣に考えて行動していたということです。

そしてそれが彼の本業であり、**生きるための戦略**ということになります。ゴミのように見下す人の視線など気にもしない男性は、生きるために無駄なプライドを捨てることのできるホームレスの中での成幸者でした。彼のその意思が、オーラというか雰囲気伝わってきていたのです。スピリチュアルな人のように僕はオーラの色まで見えませんが、人が醸し出す雰囲気によって僕は無意識で気になって話しかけたというわけです。この男性からすれば「想定内」といったところでしょう。この男性とは二度と会うことはありませんでしたが、きっとどこかで元気に座っているのだらうと思います。他のホームレスの男性とは異なる思考と行動が、僕の世界観を広げてくれたことに感謝しています。

また、まさしく「成金」という言葉が合う成功者にも渋谷のオフィスで出会いました。彼はスーツやビジネスバッグはもちろん、ベルトなど身に付けるものすべてが「ルイヴィトン」で揃えている男性でした。競馬をビジネスにしていたこの経営者は、僕が学生であることを明かすと非常に大きな態度に変わりました。

「で、この俺に何を聞きたいんだい？」

ソファの背もたれに両手を広げ、ビジッと決めたスーツで足を組むこの男性にはまったく魅力を感じませんでした。すぐに帰ることもできましたが失礼だと思ったので、ビジネスの話をして価値観を学びました。僕の親のことを少し話すと、近くの従業員まで反応し始めて空気が変わりました。おそらく違法に近いことをビジネスにしていたのだらうと僕は勘付きました。やっているビジネスも経営者も興味がそそられなかったので、ある程度メモしてから帰りました。

この経営者のようにインタビューでお話した中で、外見のみを着飾って成功者の仮面をまとう人は少なくありませんでした。むしろ、それをどう見抜くか見破るかというメカネで相手を見るようになったといえます。シンガポールで出会った大富豪のように、本当にずば抜けた成幸者は外見をごく一般人以下になるように意識していることも分かりました。例えば、缶コーヒーの BOSS ジャンパーを着たり、講演のスタッフのように素朴に見えるように T シャツと G パンを着たりしているということです。また、一般人ともフランクに接することができるように、「対等」を意識しているのだとも思います。

そのシンガポールに住む大富豪の紳士は、日本の経営者の友人ということもあり、パーティーに参加させていただきました。そのパーティーには、「**マーケティングの神様**」と呼ばれる成功者もスピーチしていて、「成功者の周りは成功者」という方程式を肌で感じました。一番の収穫は、成功者たちの独特な凛とした空気感の中に長時間いたことです。目の奥には揺るぎない信念の光が宿っていて、それが多く人の闇をも照らす源

になっているのだと思いました。日本の大学生である22才の僕は、シンガポールの大富豪パーティーの空気を吸うことで日本では得ることができない雰囲気味わっていたのです。

インタビューさせていただいた人の中で8割以上が僕の成功者像とかけ離れていましたが、本物だと思える人物とも出会いました。彼は一般人と比べて、**行動の自由度**が明らかに異なっていました。例えば、海外に行く場合、多くの方はざっくりでも旅行プランを立ててから行きます。しかし、彼は空港までノープランで向かい、その場で海外への行き先を決めて夫婦で旅行を楽しむ自由な60代の銀髪オールバックの紳士でした。この男性からは「**お金**」で「**時間**」を買えることを学びました。

薄いグレーのスーツを着こなすこの紳士ほど格好良い60代男性は未だかつて会ったことがありません。当時20才で大学生の僕は、千葉のファミレスでこの紳士と話していたことを思い出します。

「この前ドライブしてたらさ、急に割り込んでくる若者がいて、ブチキレちゃったよ。バカヤローって怒鳴ってさ。俺もまだまだだな」

僕に向かって何気なく話すこの会話を聞いて、「60代でここまで経済的に自由でも、人間性をまだまだ磨いているなんてすごいなあ」と思っていました。人とのコミュニケーションや子どもの教育理念についても、一般人の視点とはまったく違って奥深く、学びがいがある時間でした。他には、高級車の話題に興味がなく聞いていた時も気付かされたことがあります。

「え？ 車に興味がない？ 君さ、それは興味がないんじゃないかって、調べてないだけだよ。調べてもないのに、興味あるなし決めちゃダメだよ」

この話を聞いてから高級車について調べました。その結果、近い将来、白いベンツに乗ることに決めています。高級車の中でなぜベンツかというと、普通自動車免許を取得する時にベンツで高速道路を走った経験があるからです。教習所内で乗る国産車に乗り慣れた後にベンツに乗ると素人の僕でさえ、クオリティの違いが体感できました。ドライブシートの座り心地やハンドルのグリップ、アクセルの踏み具合などすべてがフィットしていて、その上、安全性も高いことも考慮しています。

大学生の時はもちろん、自分がアートを本格的にやることは思ってもいなかったのですが、今では「白いベンツをキャンバスにして、世界に一台だけの芸術的な車にしよう」

と思い描いています。そして、高級車に絵を描いていく過程を動画で撮影して、展示会でアートムービーを流すことも夢の一つになりました。

大学時代にいろんな人にインタビューしていく上で、理想像である成幸者とそうでない人の区別が付くようになっていました。最初は直感だったが、次第に確信に変わっていったのです。それは装飾品など目に見えるもので判断するのではなく、その人自身が醸し出す独特の雰囲気を感じることでした。おかげで今では話さなくてもある程度、感じることができるアンテナを身に付けたようになりました。

「この人は、只者ではないな」

そう思えるオーラを出している人はごく少数ですが、確実に存在しています。成幸者であり続ける彼らの共通点としては、凜としていると同時に穏やかな空気が流れていると表現できます。同じ空間にいると心地良く、教えを請うと何でも気持ちよく答えてくれる、そのような心が豊かな人に多いと僕は感じました。

100人以上の成功者インタビューを通して、ほぼ9割が偽物でわずか1割が本物だと僕は思いました。それほど僕の目指す理想像に近い人は少なく、遠い道のりだということも実感しました。しかし、偽物といえども一般的には「勝ち組」の部類に入ると思います。あくまで、地位や名誉などの表面的なステータスよりも、**いかに真の自分を開放して精神的にもより豊かな人生を送れるか**ということの方が僕は優先度が高いのです。なので、六本木ヒルズに住んでいようがBMWを乗り回していようが、人間性に魅力を感じなければ僕にとって成幸者ではありません。

僕が偽物という成功者は下記の2パターンに分かれます。まず1つめは「**お金**」に支配されているタイプです。月収100万円をクリアしたら次は年収5000万円、さらにその次は年収1億円、またさらに次は年収3億円というように、お金を追うことが目的となっている人です。高級料理店で高級料理を食したり、1本100万円のワインを飲んだり、ブランド品で全身を着飾ることに楽しみを感じる人がなりやすいタイプだといえます。また、人に尊敬されたい、認められたいという欲求が強く、お金で仲間や女性を集めるようになります。もちろん彼らは「お金」に惹きつけられているため、その成功者自身に惹きつけられているわけではありません。それを自覚していようがいまいが、いつまでも「お金」の奴隷になってしまうのです。

2つめは「**異性**」に支配されていることです。お金を持つとお金目当てに今まで振り向きもしなかった女性が寄ってくるので、それに舞い上がってしまうタイプです。また、

結婚していても奥さんが浮気をするようになったり愛人を作ったりと、大きなお金を持つようになると異性関係にひずみが生じてきます。そしてそれを対処しないと離婚に発展したり、子どもが病気になったりします。妻が隠れて家に恋人を呼んでいることを知っていながらも、何食わぬ顔で普通に過ごすなんて僕には到底できません。「お金」が「異性」を引き寄せ、どちらかが崩れるように何者かが仕組んでいるようにも思えます。つまり、何かが異常に突出すると何かでバランスを整えようとする働きが生まれるのです。それに気づかないで視野が狭くなっていると、いつの間にかすべてを失うことになってしまいます。このタイプの成功者は自尊心が強く、見栄っ張りな性格の人が多く感じました。

そして、少数しかいない本物の成功者には、陰陽の2種類が存在することが分かりました。太陽のように陽気で人に愛されながら幸せな人生を送るタイプと、月のようあまり喜怒哀楽を見せないで淡々と冷静に自分の世界で楽しく生きるタイプです。太陽タイプは、100人や1000人の前でも臆せず堂々と話すことができるセミナー講師やコンサルタントに多いように思えます。まさしく太陽のように光り輝く存在であって、言葉の一言がポジティブエネルギーの塊になっています。それらのエネルギーを受け取ることで元気になり、思考も前向きになることから「影響力のある成功者」と呼ばれます。月タイプは、自分一人の空間の中で集中できる状態から何かを生み出す能力を十分発揮できる画家や職人などに多いように思えます。月の光のように、静かに優しく人に影響を与えていきます。それは絵や詩、歌や漆器などの創造物を通して間接的に想いを伝えていることになるのです。

どちらが正解というわけではなく、どちらも自分の好きなことや能力を存分に発揮して人生を楽しんでいます。僕はこの2種類の成幸者たちから多くを学びました。パフォーマンスやセミナーなど人前に入る時は自分の中で「太陽」モードに切り替え、**全身の動きや言葉によって光を届ける**ようにしています。また、創作活動や一人になれる空間の時は「月」モードに切り替え、**心身を落ち着かせながら**静かに知識を蓄えたり自分のペースで絵を描いたりして間接的に光を照らします。

太陽モードの効果としては、体温が上昇して言動に「熱さ」を感じてもらえるようになることです。このモード中に ZONE に入ると、考えてもいなかったことが自然とクチから出るようになり、それが相手の心に刺さることにつながります。自分ではない何か自分のクチを通して語りかけるような、そんな状態になります。

次に月モードの効果としては、心が水のように静かになり、集中力が増すことです。このモード中に ZONE に入ると、自分の周りだけ別の時空間が発生して倍速で動けるよう

になりますが、はたから見ると迷いなくスピーディーに描いているとしか分からないようです。どちらもモードでもコンディションが極まると無音になり、**自分が創ったとは思えない創造物が完成**します。これはまさしく、アーティストの神様が降りたような感覚になり、客観的に観ても感動できる創造物が生み出せます。読書など知識のインプットの場合、脳に入り込む量と速度が増します。

当然、このモードに切り替えることも、ZONEに入ることも簡単ではありませんが、アーティスト・マーケティングを実践後に体得できた現在の状態です。ZONEにもステージがあり、意識してその効力を出す「神降ろし」、効力持続時間が無制限になる「大神降ろし」までは体力・気力がある限り発動可能になりました。

どんな職業であれ、様々な経験から人間的に面白く深みのある少数派の人生を歩む人間が魅力的で尊敬できます。まさに光をまとっていると形容できる真の成幸者が多くなれば、少しずつ日本は変わっていくと信じています。当時も今でも光を放つ人は好きですし、今後出会うであろう方々も楽しみにしています。

大学生の時の僕は「何かで光を伝えたい」「他人の人生にプラスの影響を与えられる人間になりたい」という衝動が駆られながらも、その手段と経験がありませんでした。そして、自信もない僕は漠然とした理想像から一つずつ逆算して行って、今やるべきことを淡々とこなしていったのです。それしか道がないと思っていました。

大学生活も終盤に近づいていた頃、成功者インタビューも一区切りしたこともあって、周りの友人が内定をもらい出した頃まで僕は、「起業」か「就職」かのどちらにするか考えていました。もうすでに大学4年生の春でしたが、将来の不安や焦りは特に感じませんでした。

インタビューで学んだ経験から、僕の理想像は「**好きなことを仕事にして人生を100%楽しむ人**」でしたので、これに一番近い職業は「経営者」なのかと思いました。なので、「大学卒業後に起業する」ということも考えましたが、「人の上に立って影響力を持った人間になるには、まずその立場にならなくてはいけない」と思い、サラリーマンになるべく一般的な就職活動を考え始めたのです。「急がば回れ」という思考も合わせ持つ真に幸せな成功者たちは皆、一度はサラリーマンを経験していることも参考になりました。

そして、大学4年目の6月から僕は一般的な就職活動をスタートしたのです。周りの大

学生からすれば、かなり遅いと思われると思います。しかし僕は、「ご縁ある企業と出逢えばどこでも入社できる」という自信がありました。ここでのゴールは「面白くて学べる会社」に出会うことでした。だから、社長や役員を目の前にしても、自信満々に自己主張できていたのだと思います。社長との最終面接中、ホワイトボードに図を書きながらアドリブでプレゼンテーションをしたことは自分でも驚きました。

就職先を決める一番の基準は、やはりトップである社長だと考えています。社長が変わった人だと面白い会社になるので、就職してからも学ぶべきものが多いことも知っていました。就職氷河期世代には考えられないかもしれません。しかし、二次面接に進んでも社長とフィーリングが合わずに、文化に共感できなかった企業には二度と行きませんでした。今の就活生は100社も200社も入社試験を受けるようですが、あまりに自分軸がないと僕は思います。なぜなら、視野が狭い学生時代に本当に働きたいと思える企業は、多くても片手で数える程度だと考えるからです。そして、そもそも迎合して入社した企業で毎日働くことで、人生を心から楽しめるのでしょうか。3年以内にほとんどの新卒社員が辞めている理由はそこにあるのだらうと思います。

僕は独自の戦略と実践を繰り返し、成功者インタビューで学んだことも活かした結果、就職活動をスタートして1ヶ月後に内定をいただくことができました。「人生の就職活動」とも言える行動を20才からやっている学生なんて非常に稀なので、「こいつはただの学生ではないな」と思って頂けたのだと思います。むしろ、そう思ってもらえるような特殊な就職活動をやっていたし、他の就活生との差別化を考えながら行動していました。そして、「早く大学卒業して早く社会人として働きたい！」と興奮しながら、バリバリ楽しく仕事をしている自分を想像していました。

毎週末、サークルのメンバーと安い居酒屋で酒を煽った後、カラオケで夜を明かし、日の出とともにチェーン店で牛丼を胃に流し込むことを4年間やってきた大学生は、「まだ自由な大学生でいたい」と思うことでしょう。そのように周囲に流されて怠惰な大学生活を送っているのは、人生を無駄にしていることと同じだと僕は考えていました。そして、そのような学生が多いキャンパスライフに飽き飽きしていたので、早く卒業したくてウズウズしていたのです。新社会人としての生活が楽しみで仕方がありませんでした。希望を胸に抱き、学生の中にさらにスキルを上げることを意識していったのです。

「今まで培ってきたものをすべて出して、会社の同期の中で1番になろう！」

そう意気込んで気合いが入った僕は、バリバリ仕事をこなすビジネスマンを想像していました。しかし入社早々、理不尽で理想像とかけ離れた人と出会うことも、精神的にも

身体的にもボロボロになることも、当然、この時はまだ知る由もなかったのです。

<ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・自分なりの「人生の成功」の定義を決める
- ・他人と比較しない
- ・何事もマイペースで取り組む
- ・常に少数派の生き方を意識する
- ・楽しい未来を想像する

<響いた言葉とその解釈>

「キミ、自分の人生ツイてると思う？」

…不動産のトップセールスマンにインタビューした際に投げかけられた質問。僕は即答で、「めっちゃツイてます！」と答えました。この質問は、パナソニック（松下電器）の創業者である松下幸之助氏が入社面接で問う判断材料だったようです。人生に対する姿勢がポジティブである人を採用した方が、会社が繁栄することは間違いありません。

「信じるな、疑うな、確かめろ。真実を見極める眼を養え」

…e ラーニングの会社経営者から言われた言葉。最初から何かを信じたり、疑っては、真実は見えません。どんなことでも自分で実践して体験することが重要です。実体験から生まれた経験を積み重ねることで、本物か偽物か真実を見極める眼を養うことができます。そして物体はもちろん、初対面で話す短い時間でどういった人間なのかを瞬時に理解することにつながっていきます。

2-3 非理想像の史上最悪な人物

無事、大学を卒業して晴れて新米サラリーマンとなりました。入社した会社は、銀座の一等地にある IT ベンチャー企業です。この会社の社長は高級外車をコロコロ変えて、当時はアルファロメオを乗り回していました。僕は高利益を叩き出す社員 100 人の会社の正社員になったのです。

入社早々、新人研修に参加するために福島の田舎へバスで向かいました。事前にマラソンをするということは聞いていましたが、楽しく同期と切磋琢磨できるのだろうと僕も含め同期も軽く考えていました。しかし、新人研修のプログラムは「断食」「トンカツとカレーどちらが美味いか議論会」「山頂 40 キロマラソン」「朝 4 時起き山手線暗唱テスト」「飛び込み営業で名刺集め」といった、**修行のような研修内容**でした。

僕ら同期は営業が専門ではないのですが、この研修を合同でやった会社が保険の営業が専門でした。ということで、「飛び込み営業」が福島に着いて早々にスタートしたのです。ひたすら知りもしない会社やお店に入っていく、名刺交換をして枚数を競う研修でした。これは慣れれば楽しくなるのでまだ余裕がありました。しかし、その次の「40 キロマラソン」は肉体的にも精神的にも厳しいものでした。山頂にある宿泊コテージからスパリゾート・ハワイアンズまで走っていき一旦、温水プールに入って休み、そこからさらにコテージまで登り走って行きます。温泉入浴直後のマラソンはここまで体が重いとは思いませんでしたが雨の中、全員汗だくになって走りきりました。

この新人研修は 5 人 1 組の 3 グループに分けられ、1 つの項目の順位で食事のレベルが決まるというゲームのようなシステムでした。1 位のグループが社長と一緒にイタリアンの店で食事できます。2 位のグループがコテージで自炊します。最下位である 3 位のグループがなんと食事なしでした。断食の日とかぶって 3 位になった女子 5 人は地獄だったと思います。

「トンカツとカレーどちらが美味いか議論会」は断食の日にやったので、何でもいからご飯を食べたくなりました。そして、あまりにも腹が空き過ぎて意識が朦朧としてくるのです。思考停止状態になっても議論の時間が終わるまで考えて発言しなければならぬ時間は、非常に苦痛に感じていました。

「朝 4 時起き山手線暗唱テスト」は眠気眼をこすりながら、東京駅から時計回りに各駅を暗記して、山の頂上から叫ぶというものです。

「とうきょう～、ゆうらくちょう～、しんばし～、はままつちょう～」

大声を出すほど暗記した駅名が消えてしまいそうになります。しかも、連続で5人全員暗唱できなければ、また1人目から叫ばなければいけないというルールがありました。チーム力の向上が目的なのでしょう。「山頂の中心で駅名を叫ぶ」、新卒社員は逃げも隠れもできない隔離された場所で、与えられたプログラムをこなしていくしかありませんでした。「セカチュー」ではなく「サンチュー」が、他の企業で行われているのかは定かではありません。これらメンタルの鍛錬を目的とした新人研修中に、実際に倒れて寝込む人もいました。社長はなんとも思わないのか特に気にかけてません。僕たちは断食中で何も食べられない時、隣でカップラーメンとチョコレートを普通に食べている社長は楽しそうに僕らを観察していました。

やっとのことで地獄の三泊四日の新人研修は終わり、本社へ戻ることになりました。僕が配属された仕事場は、誰でも知っているメガバンクのサーバー構築の設計書作成の部署でした。いわゆる銀行のATMの暗証番号や情報処理など見えない部分を構築していく仕事です。

「メガバンク」「IT」「日本橋支店」なんてキーワードだけではエリートのような感じだと思われがちですが、内部は至って泥臭い作業ばかりです。当然、新米の僕はコピー取りから雑用もやるようになりました。そこで僕の直属の上司になったMさんは、40代前半の体育会系で人にまったく好かれないタイプの人でした。会社側は、僕のメンタルの強さからMさんの下に配属したと後から知ったのですが、ものすごく理不尽かつ人間として尊敬できない人だったので毎日が修行のようでした。

毎日8時半～23時までMさんの隣で仕事をしているだけで精神が削られていきます。「自分のミスは部下のミス」と平気で責任転嫁してくるので、「なぜここで僕は仕事しているの？」とさえ思えてきたほどです。もう少しで「ノイローゼ」、いや、マイナス思考に陥っているからすでに「うつ病」になりかけだったと思います。この環境には、入社した会社の先輩や同期は誰一人いなかったのが相談できる相手は皆無でした。完全にアウトローの状態なので、虎の巣に一匹だけ兎が飛び込んだ感じでした。

自分の失態は部下の責任にして自己中な行動をするも、毎日マイナス的な発言を僕に浴びせてきます。年功序列から課長の位置にいただけで偉そうにしていることにも、この組織社会の理不尽さ自体にも、僕は強い怒りを感じるようになっていたのです。「この野郎、いつかぶっ飛ばしてやる！」と拳を握りながら、愚痴・不平・不満を吐かず、耐

えていた頃が懐かしく思えます。

ある日、新人である僕の歓迎会にはこのMさんは出席しませんでした。あとから理由を聞くと、「子ども3人いて、カネないんだよね～」と言ってきた時はさすがに「一応、お前の部下だろうが！」と怒鳴りそうになりました。そのように毎回Mさんに感情を乱されるのもバカバカしく思うようになり、社内では喜怒哀楽を消して**精神を整える**ように訓練し始めました。Mさんが出席した飲み場で「腕相撲大会」があった時に、僕の怒りは合理的に爆発しました。Mさんと手を合わせることに嫌だったのですが、剣道で鍛えたこの腕で開始直後、思い切り机に叩きつけたことで今までの怒りを静めました。

結局、人事異動で僕はこの上司から離れることになりました。社会の理不尽さを同期で一番早く身を持って経験できたことはある意味、幸せなことだったのだろうと思います。また、同じフロアで毎日毎日単調な仕事を繰り返すことに時間の感覚が鈍り、大昔のドラマのように色褪せる自分に恐怖を感じていました。

そして、別の部署に移ったと思えば、そこは激務のプロジェクトが進行中でした。月に250時間以上働いても残業代ゼロ、手取り18万円という超過酷労働が待っていたのです。労働基準法を違反していることは理解できたので、アルバイトをやる方が合理的な数字だと分かっていました。しかし、一旦就職した会社をそう簡単に脱サラできるものでもありません。会社で寝泊まりすることも常識でしたので、骨が相当ゆがんでいたらしく、左足が動かなくなってしまうほどストレスを抱えるようになっていました。また、この会社は時間厳守が絶対のルールでした。「遅刻するなら30分早く家を出ろ！」「それでも遅刻するなら会社に泊まれ！」と言われ、会議に5分遅刻するのも許されなかったのです。

ストレスを溜めながらも終電で会社から帰ってきては、整体院で骨の歪みを調整してまた明日会社へ行く、という繰り返しの毎日でした。果て無きラットレースだといえます。気晴らしになるのは、自宅でヤキトリ片手にビールを飲むことしかありませんでした。自分を客観的に視て、まったく魅力的な人間ではないことは確実でした。非成功者であり、完全に人生の負け組だということに落胆していました。大学生時代にあれだけ理想像を明確にしていたにも関わらず、そのビジョンから遠く離れていることが悔しくて仕方がなかったのです。

「ずっとここで働いていたら確実に体は壊れるか、精神が崩壊するな…」

そう確信していました。なぜなら、自己主張が苦手な優しい先輩が本当に「うつ病」に

なっていて、いつの間にかに自主退社していたからです。その先輩とは二度と会うことはありませんでした。

SE（システムエンジニア）として働く IT 企業では、人との会話よりもパソコンに向かって無言状態の時間の方が長くなります。ですので、コミュニケーションする時間が少なくて精神が弱い人はノイローゼになるのは当然だともいえます。しかも、このベンチャー企業は退職金など出さず、捨てゴマのように社員を使い倒すことを繰り返していました。これがブラック企業の実態なのでしょう。けれども実際に社内で働かない限り、この悪質さは分からないようにカモフラージュされています。高そうな壺が置いてある畳の客間や、何種類もあるお酒が常備してあるダーツバーが設置されてある会社がブラック企業だと誰が思うのでしょうか。

この配属先は、メガバンクの日本橋支店でした。ATM を利用する際には、カードか通帳を入れて暗証番号を押した後、「しばらくお待ちください」と数秒間表示されると思います。その間、瞬時に暗証番号や本人確認がされています。その目に見えないシステムを作る部署でした。その部署では、そのシステムを設計する設計者とシステムを構築するプログラマーに分かれます。僕は設計者側でして、その部隊の隊長的な存在が M さんだったというわけです。年功序列で課長というポジションだったため、反抗する人はいませんでした。

IT 系の仕事は、看板となる会社と本社は違うという業界です。僕が就職したブラック企業は株式会社 B。しかし配属されたのは、メガバンク M。はたから見ると、メガバンク M の社員に見えますが、その内部では、他会社が多数集まって構成されています。メガバンク M の中の IT 事業部の中に、H、HSB などが他会社の社員が存在しています。M さんは HSB の課長でした。その M さんの下に僕が派遣されたような感じです。

別会社で働くことを「常駐」といい、就職した本社での仕事は「請負」といいます。大抵の場合、常駐の仕事をする場合、就職した本社の先輩社員が複数います。新人社員が一人で行くことは滅多にありません。しかし、新人研修で目立っていたせいか、僕だけ一人で常駐先へ配属されていました。他の同期は全員、本社の先輩社員の下で働いていました。

入社する時は「**サラリーマンを3年で辞める**」つもりでした。それはあくまで入社する会社が「ブラック企業ではない」ことが前提でした。

「残業はあっても残業代は出るだろう」

「いくら IT 系といえども週二日は休みだろう」

「アフター 5 を独立のために有効活用しよう」

ホワイトよりの会社だと思っていたところ、まさかのブラック企業。

メガバンク M の正社員のように、勤務時間が 9～17 時だったら 3 年ゆっくり準備していましたが、そんなに現実はずるくはなかったわけです。しかも、ブラック企業はブラック企業でも、配属先は「この人に合う人はいない」と噂される M さんの直下でした。ちなみに、M さんの直下で続く人はいません。途中で精神的に病むか、バックレるかです。苦しんでいた頃、M さんの上司に直接伝えてもバーに連れて行かれ、気晴らしさせられた感じで現状は変わらずだったので、「**自分を変えるしかない**」と腹をくくったわけです。本社の先輩が 1 人でもいればよかったのですが、僕は相談相手がいない新人でした。

入社する前から、独立するタイミングは「**金なし、コネなし、才能なし**」をクリアする機会を見計らってからだと考えていました。起業するための独立資金を貯めること、独立後にスタートダッシュするための人脈を作ること、独立しても食っていける才能を開花、またはスキルを身に付けることです。

「独立の準備をサラリーマン生活中にする」というよくあるスタンダードな思考で独立しようと、3 年計画で考えていました。しかし、サービス残業の嵐でそんな時間はありません。なので、**睡眠時間を削って**スキルを身に付けるほか、通勤時間を活用していました。

具体的には、自宅から会社まで無意識に通勤できるように訓練して、「**歩きながら本を読む**」スキルを身に付けました。その他、iPod でセミナー音声を聞くことも同時にやっていました。通勤ラッシュでスシ詰め状態になっていたので、両手を折りたたみながら、耳から音声教材を、目からは書籍から学んでいました。なぜなら、「**独立の準備に 3 年もかけてられない**」状況だったから 3 倍速で準備をせざるを得なかったからです。

入社前は「おもしろい社長だから楽しく学べればいいな」という軽い感じでしたが、入社後は「ブラック企業では悠長にやっている暇はない」と思い知らされました。肉体的にボロボロになるか、精神的にボロボロになるか、僕はどちらか一つだと確信しました。心身どちらかが壊れるまで働く意味があるとは思えないこの会社で僕は、「**脱サラする**

「ための道」を真剣に考えるようになったのです。ようやく、本当の自分を解き放つタイミングがきたのです。

<ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・他人の言葉に一喜一憂しない
- ・社会の理不尽さを壊す信念を持つ
- ・限界に挑戦して自分のボーダーラインを知る
- ・安全の道と冒険の道のどちらを歩みたいのか自問自答する
- ・自分を奮起させる言葉を書いた付箋をデスク周りに貼る

<響いた言葉とその解釈>

「これが組織社会だよ」

…理不尽さについて相談した時に本社の部長に言われた言葉。
無理やり M さんへの詫言状を書かされた時の葛藤で、精神的におかしくなりそうでした。この時の気持ちが、脱サラへの原動力にもなりました。

「人生をコントロールしたければ、感情をコントロールしろ」

…あるセミナーで知り合った経営者からの言葉。
感情ですべてを左右される人は、人生を思い通りに進ませることは難しくなります。特に、マイナスな言葉をまともに受けたり、社交辞令で一喜一憂しては、人生のゴールになかなか辿り着けないものだと思います。他人軸から自分軸で生きることを決めて、心がブレないように統一すること。それが真に自分の人生を生きるということなのだろうと考えています。

2-4 夢を幻想で終わらせない

頑張っていれば、いつか報われる。持ち続ければ、夢は叶う。

そんなものは、幻想だ。
たいてい正義は勝てやしない。
たいてい夢は叶わない。

…けれど、それがどうした。
新しいことをやれば、必ずしくじる。
負けてたまるか!!
スタートはそこからだ。

~~~~~

これは、近所の居酒屋さんの壁に書いてあった言葉です。

「なんで思い通りにならないんだ！」

そう思っているうちは、夢は現実化されない。つまりは、夢が実現される可能性を、どれだけ高められるかに集約されるわけです。それは天才でも凡人でも、「努力」のみ。自分を信じる意志のパワーと、道を突き進む行動のパワーを融合させて人生を切り拓く真の覚悟を持てるかどうかにかかっています。答えはいつも、シンプルです。しかし、やれるか否かは自分次第なのです。

## 2-5 生命という原液

何かをカタチにすることは、自分の本質、「人生の原液」を絞り出すということです。その原液が濃ければ濃いほど、人に影響を与えることになります。

例えば、「作家」として文章を書いて本を出版するのであるならば、蓄えた知識や経験を文にすることがその行為になります。これまで培ってきた原液をそのまま抽出するのか、それとも原液を薄めて出すので変わってきます。

実年齢よりも濃い原液を持っている人は、言葉や文章が鋭利な刃物のようになっている場合が多いです。あまりにも強烈でナイフのように刺さる文章を書き出すと多くの人には届かないことはもちろん、受けた人は人生が一変してしまう可能性すらあります。

出版の業界でいうと、自分で執筆・編集して製本まですべて自費で行う「自費出版」なら、内容関係なく本として世に出すことはできます。その場合、当然、本屋に並ぶことはほぼ皆無であり、販売も自分自身でやらねばなりません。しかし、費用はもちろん出版社がバックについて、表紙や帯、写真、目次構成などサポートしてくれる「商業出版」は、そう簡単ではないのです。

多くの作家の卵がこの「商業出版」を目指して、小説や絵本など執筆していますが、これを実現できる人はごく稀です。それは、「商業出版が決まる確率は0.3%」という統計があるからです。本を出したい人が100人いても1人決まったら万々歳というわけです。無名作家が出版社から本を出す具体的な方法はまたの機会にしますがいづれにせよ、作家の原液が最重要なことは間違いありません。

作家の生命とも言える「原液」をどの割合でどんなカタチで出すのかによって、人生は変わっていきます。誰もが経験していることだらけの人生は、「原液が薄い」とも言えます。薄いならば、時間と労力を費やして濃くしていけば良いのですが、その努力ができるか否かはその人次第になります。

逆に、原液が濃い人は様々な料理の仕方があります。炒め物、鍋、蒸し物、ソースなどバリエーションが増えるわけです。しかし当然ながら、原液ごと飲んでも濃すぎて吐き出してしまうことでしょう。原液が濃いならば、薄めるしかありません。原液を薄めることで、万人受けする創造物を抽出することができます。しかし、「薄め過ぎたジュースはおいしくない」と感じるように、適度な調整が必要です。出版でいう「中身が薄い本」というのは、作家の人生の原液を水でかなり薄めたようなものです。けれど、濃ければ良いというわけではないことは前述したとおりです。

そして重要なことは、原液は出せば無くなっていくということです。濃い原液を出せば出すほど、中身はどんどん減っていくわけです。中身がカラになれば、補充する

か、他人の原液を出すしかありません。だから原液は大切に、適度に希釈して世に出すことが重要になっていきます。

お笑いの世界でも、アートの世界でも同様である。「一発屋」と言われるお笑い芸人は、自分の貴重な原液を100%一芸に費やしてしまい、カラになることに気づくころには使い果たしているわけです。「後の祭り」ということですが、そうなる前に気づかなければなりません。アートの場合は、「一発屋」のその一発すら発射することができず、生涯を終える芸術家は少なくありません。非常にシビアな世界です。だからこそ、原液を大事にしなければなりません。いずれにしても、原液はその人の人生そのものであり、思っている以上に価値があるのです。

### 3. 背水の陣で発揮される本能

#### 3-1 人生逆転ホームランを打つ直前

「人生を広い視野でみて、本当に好きなこと、やりたいことはなんだろう？」

そう自問し続け、過去を振り返ってみました。じっくり時間をかけて一年ずつ過去をさかのぼり、興味があったことや好きだったことを紙に書き出していったのです。すると、「9才の時に絵を描くことに夢中だった」ことを再認識できました。アートについてアンテナを張って生活するようになったのです。具体的には、本屋でアート技法を学んだり、デッサン教室を覗いてみたり、インターネットで様々なアートを探したりと様々な行動をしていました。いろんな場所に行って今までにない刺激を求めて、新しい発見を意識して探していたのです。

その最中、「さすがに今更、油絵とか始めても熟練者に到底追いつけそうにないなあ」と思っていました。なので、既存の絵画技法に手を付けることはしませんでした。水彩画、水墨画、日本画、鉛筆画など多種多様な絵画技法が日本にはありますが、すでに存在するアートなら僕がやる必要がないとも思っていました。「誰も知らない」「短時間で描ける」「完成品の質が高い」この三拍子揃った新しいアートを始めたかったのです。

すると、衝撃的なアートを発見しました。2009年4月29日、絶対に忘れません。

それはインターネット上での動画でした。アメリカ人がスプレー缶を両手に持ち、ほんの数分で幻想的でインパクトのある絵を描いてしまう「スプレーアート」に出合った瞬間です。まさに、「体に電撃が走る」とはこのことだと体感しました。「これだ！」と直感するとともに、「やるべきことを見つけた！自分にはできる！」と**根拠のない自信**が溢れました。スプレーアートの可能性を感じて、やるべきことが明確になっていったのです。

そして、この動画の投稿主の英語のホームページを全部読むことから始めました。中学生レベルの英語力でニュアンスだけ読み取り、その翌日、適当に必要なと思うスプレー缶などの道具類を買ってきて実際に描いてみたのです。すると、予想外の絵が完成しました。それはまるで赤ちゃんが描いた落書きのような作品でした。絵とも言えない絵ができあがったのです。しかし、根拠のない自信を持っていた僕は、「絶対に動画で観たような絵を描けるようになりたい！」と意気込み、何度も何度も描き続けました。それが**脱サラする唯一の希望の光**だと信じていたのです。

動画の投稿主にメールでアドバイスを受けて、常に何度も制作過程をイメージし続けました。英語でのメールのやりとりは簡単ではなかったのですが、ニュアンスで読解して行動に移していきました。考えてから動くのではなく動きながら考えるようにすることで、加速的に知識が入ってはそれを活かす実践ができるようになりました。

### 3-2 魔法の道具はスプレー缶

スプレー缶のキャップをはずしながら封を切ります。ビニールの包装が取れると、「やっと僕の色の出番だね！」と手に取ったスプレー缶から言われているように思えました。スプレー缶の中には丸い鉄球が1つ入っています。上下に振ると、カシャカシャと音をたてながら缶内の液体が混ざっていくことを感じます。その音を聞きながら、これからどんな絵を描くのかをイメージしていきました。目を閉じてスプレー缶を上下に振りながら、何の制限もない自由の世界へと入没していく様は、本当の自分を探す旅のようなものです。

真っ白なキャンバスを目の前にして、心の中にあるキャンバスを見つめます。一面の白は、「何もない」と同時に「**すべてが満たされている**」ともいえます。それは、究極の完成形そのものだとは僕は考えているからです。絵を描き始める時は、先に「**心のキャン**

バス」に好きなように色とりどりの絵を描いていきます。心の中では何度もでもやり直しが効きます。下書きをしないで描く僕にとって、そのシミュレーションが下書きになるわけです。

すべての準備が終わり、両手にスプレー缶をフィットさせるように握ります。すると、全身の血肉が湧き踊る感じがするのです。どう表現するのが適しているのでしょうか。体内の奥にある灼熱の溶岩がグラグラと沸騰して、それが外に溢れ出そうとします。マッチの火のように消えそうだった僕の心に、良く燃える木と溶岩がプラスされ、大きな炎となって全身に駆け巡っていきます。体温も上昇して、根拠の無い自信で満ち溢れるようになったのです。あとは、動画の投稿主のメールを参考にしてはイメージを繰り返し、スプレー缶を持って描き続けるのみになります。想像した様々なことを、現実の世界へ描くことで創造できます。アートとは、想いを絵画によって実現できる行為だといえましょう。

僕はスプレーアートをやる前に、木の板を土台として準備をします。そして、最適なキャンバスにスプレー缶を吹き付けていくのです。好きな色をただ吹き付けるという行為だけでも、僕の心に溜まったホコリは少しずつ取れていったことを感じていました。ストレス社会が当然になっている現在、特にブラック企業ではいろんなホコリが固まって溜まっていました。それをどうにか取るか軽減するかしないと、どんどん溜まっていく一方です。そしてそれが、自分の未来を輝かせる可能性を低めていってしまうことも理解していました。

スプレーアートは、僕にとって心のホコリを払う「光のホウキ」になったのです。描けば描くほど、内面がクリアになるように綺麗に掃除されていきました。そして、食事や睡眠よりも絵を描くことに夢中になる自分に、心底満足できるようになっていたのです。まるで、純粋に全力でエネルギーを費やす子どものようだと思いました。

このスプレーアートによって僕は、「将来の夢：画家」と文章化するほど夢想していた9才の自分にタイムスリップしていくように感じました。「空想したものを目に見える絵画として具現化する」という行為を、純粋に楽しんでいたあの頃です。目をつぶれば、画用紙いっぱいにくじらを描いていた時を思い出せます。いろんなものを大きなクチから吸い込むくじらを一頭描いていました。「あ！しまった！」と画用紙の縦いっぱいにクチを描いてしまっただけでも、「やり直しできないしこのまま描くしかないな」と我に返って描き上げたくじらの絵が大作になって賞をもらえたことは、今でも鮮明に覚えています。この経験から僕は「将来は画家になろう」と本気で思うようになりました。しかし、くじらの絵を描いて学校から評価された小学4年生の文集にその夢を書いた時か

ら夢を壊されることになったのです。

「画家なんてご飯を食べていけないのよ！」

「絵は趣味でやることなの！」

「それよりも国語とかの勉強をやりなさい！」

絵を描くことで自由な空間を得ていた僕の夢は、一瞬にして叩き潰されました。そして同時に、職業にならないことを大勢の人が読む文集に書いてしまったことを恥じました。「何か夢中になれることを見つけましょう」といわれたその「何か」が、僕にとっては絵を描くことだったのです。否定されるということはそれを奪われることにつながります。そして「絵を描いても意味がないのか」と素直に捉えるようになり、心の奥に封印するしかありませんでした。なので、家で絵を描く姿は見せないようになり、学校の授業のみがアートに接することができる唯一の時間になりました。その短い時間だけ、自由に好きなように想像したことを絵にできたのです。

アートを封印してからずっとそれを表に出ないように堪える自分もいました。中学生になっても、授業中だけ能力を発揮するので美術の成績は常にトップでした。しかし、国語・数学・英語・理科・社会の5科目が高校受験に必要なことで、体育・音楽・美術などは関係ないと見なされていました。なので、美術で好評価を得ることは僕にとって結局、**すぐに消え去る至福の一時**でしかなかったのです。その気持ちは高校に進学してからも変わりませんでした。

書道・音楽・美術の3科目から選択する高校一年時の美術の授業でもタイムスリップしていました。自画像を描く時はその頃に読んでいた剣道漫画を読み返して、竹刀を持った道着姿の自分をイメージすることが始めます。素振りをする時に構える自分を想像して、竹刀を頭上で握る姿を正面から描きました。

切り絵の授業もあっという間に感じて楽しかったです。それは1枚の黒い画用紙をカッターで切り取って絵にして、様々な箇所の色を塗った白い画用紙にそれを貼って完成させるものでした。僕は「シアター」という作品名で映画を見ている客たちを正面から見た切り絵を制作しました。ポップコーンを頬張る人もいれば、寝ている人もアクビをしている人も登場させていたので、人間観察が自然にできていたのかと思います。他の人は苦痛かもしれませんが、黒い画用紙を丁寧に細かくカッターで切り取っていく作業は僕にとって至福の時でした。画用紙の繊維が見えるほど凝視しながら、一切り一切りし

ていった16才のあの頃が懐かしいです。この作品が完成した後、カラーコピーしたものを記念に担任の先生へプレゼントしたところ、大変喜んでいただきました。

水彩画の作品「王子と王女、朱雀と青龍」を描き上げた時も最高の時空間を体験しました。作品のテーマも生徒自身が決める授業だったので、僕だけ最初の1時間はずっと下書きも書かずに空想していました。どんな絵を描こうか、どんな珍しい登場人物を描くか、自由に発想していても時間は短く感じたのです。それだけ僕にとってアートとの触れ合いは、心を100%解放させることであって、本当に自由になれる時空間なのです。

作品はその時空間の中で集中的に制作するからこそ、納得のいく創造物を生み出すことができます。「着手する前ですべてが決まる」「準備8割、行動2割」といった意味が今ではしっかり理解できます。しかし、何も知らない当時は、作品の完成イメージがフツと上から降りてくるまでひたすら待ち続けることも制作の一部だと実感していました。早く着手したい気持ちはありますが、決まっていない時に描いても迷走するだけだということも分かっていました。なので、イメージが固まるまで内なる自分と向き合い続けるのです。それが何分何時間であろうとも、決して焦ってはいけないと思っています。

この時に描いた作品の背景は、確か淡い黄緑色でした。それはなぜか、絵の具で塗った上から塩を振りかけていたことを覚えています。塩は浄化効果があることや絵に融合させる手法を、16才の僕は知るわけがないので勝手に我流でやっていたのだと思います。この絵は真ん中を境界線として、2つの別の世界から聖獣を1匹ずつ連れた王子と王女が出会う瞬間を絵にしたものでした。聖獣は中国の四神（東の青竜・南の朱雀・西の白虎・北の玄武）と言われるが、絵に描いた朱雀と青龍をどこから引用してきたのかは覚えていません。インターネットが普及していなかったあの頃、辞書で調べたのか、誰かに聞いたのでしょうか。それとも、アートの神様がモチーフを与えてくれたのを待っていたからなのでしょうか。当時は究極精神領域である「ZONE」の状態を意識的に出せることは知る由もなかったのですが、無意識にそれをやっていたのだと思います。

高校の美術の授業では友達とおしゃべりしても自習も制作も、先生は口出しせず勝手に自由な方針を取っていたことが今振り返って最大の利点だったといえます。制作中に勝手に指摘してくるようでは、制作者である生徒はアートの世界に入り込めないからです。土足で生徒の庭に入ってくることをしなかった先生だったからこそ、当時の僕は自由に発想して自由に創造できたのでしょう。そして、成績はどの作品も最高評価「A」なのですが、評価よりも制作している時間が何よりも貴重なものだと感じていました。「もっとその集中できる環境が揃った貴重な時間を味わわせてほしい」、そう言わんばかりにアートの世界に没頭することを欲していたのです。

アートに関わる時間は、すべてあっという間に過ぎ去っていきました。授業開始のチャイムが鳴るとすぐに終わりのチャイムが鳴ると錯覚してしまうほど、アートの世界に移り住んで1つの行為に集中していたのです。このあっという間に自分の周りの空間だけ倍速になる感覚は、言葉に出来ないほど気持ちが良いです。「無我夢中」「童心に帰る」とはまさしくこのことだろうと思います。実際の時の流れも異常に早く感じます。この感覚は後に体得する究極精神領域「ZONE」につながっていきます。

1日の活動エネルギーをすべて消費して夕方にはすぐ眠りについていた子どものように夢中になっていた自分が、妙に誇らしげに思っていました。充実感に満たされてベッドに沈み込みながら1日を振り返り、幸福感を感じながら眠りに入るなんて最高の時間だと思います。

溜め込んでいたものが一気に開放されたように、描けば描くほど上達できる自分がいました。9才の時に叩き潰された「絵の才能の種」を封印した時を振り返り、少しずつ種を大事に育てていくことにしたのです。スプレー缶を持つ角度、吹き付ける力の加減、針の穴から天を覗くような視点など、新しい感覚がどんどん備わっていくことにワクワクしていました。最速でレベルアップしていくゲームの主人公のような感覚を一度味わうと、絵を描きたくて会社を早く出たいと思うようになりました。スプレーアートの魅力、それによって子供心を取り戻している時流、未来を想像している楽しさに包まれながら、今までにない幸福を感じていました。

スプレーアートに出合わなかった頃の僕は、生きがいになる行動、爆発しそうな「何か」がありませんでした。それを見つけるべく、「どんなジャンルが向いているのだろうか?」「どんなスタイルが合うのだろうか?」などと模索して、少しでも興味があるジャンルを手当たり次第どんどんチャレンジしていきました。それが無駄ではなかったと今ではいえませし、本当に自分とマッチする「何か」という不確かなものはそう簡単に手にできるものではありません。むしろ、その「何か」を発見するための時間が人生なのかもしれないと僕は思います。

夢中になってスプレーアートを素早く描いていると、液体が肌に付く時があります。お湯でこすれば落ちるのだが、「アートの軌跡」として落とさずに会社に行っていました。

「爪、マニキュアしてるの?」

会社で同じフロアの女性社員から言われたこともあります。

「そうそう。アートやっていて自然に付いたんだ」

爪や腕にスプレーの色がどこ付いてどう思われようが構わなかったのです。むしろ、「絵描きの手」になって格好良いのではないのでしょうか。子どものように描く楽しさを再体感した僕は、アートをやっていることに自信と誇りを持つようになっていきました。誰もが知らないスプレーアートの世界に没頭することができて、僕は本当に運が良いと思います。運が良いのは自然と運が良いではなく、自分を自分で運が良くなるように追い込んでいくことも重要だと考えています。

この時の僕は、本社で「請負」の仕事をする超過密スケジュールを進行するプロジェクトにいて、土日休みとか有給消化とかゴールデンウィークとか休みの概念はありませんでした。このプロジェクトが終わったらどんな仕事をしたいのかなどステップアップの道や、年収・家族・趣味を含め将来どうなっていきたいのか、ヒアリングのような1対1の面談がキッカケでした。こういった面談は1年経って初めてのことでした。しかし、仕事ができる年収一千万プレイヤーの上司はもちろん、社内に理想となる人間がいなかったのではどの選択肢を選んでも魅力的に思えませんでした。その面談中、「脱サラ宣言しようかしないか」「バカにされるだろうけど、アートの話をするかしないか」迷っていたところ、「I Believe」のオルゴールが流れ始めたのです。

「会社、辞めます」と会議室で脱サラ宣言をしました。まだ絵は1枚も売れていないのに、そう決断してしまったことに背筋が凍りました。しかも、「スプレーアート」という日本にない絵画技法を知ってからたった数日後にだということには変わりありません。固定給や社会的地位を一瞬で捨ててしまったことに恐れがないわけではないのです。「会社、辞めます」と言った瞬間、「ああ、言ってしまった。もう後には戻れない」と自分で自分を崖に突き落とした感覚になりました。これから本当に生きていけるのだろうか、という不安も拭い切れないまま時は過ぎていきます。所詮、僕も鬼の子ではありません。むしろ、羊の子のように弱く、脆いのです。

人生を大きく方向転換するためには、崖から飛び降りるような覚悟と最初の一步が必要です。しかし、それと共に「責任」が重くのしかかってくるのです。この時なぜか、ミュージシャンの絢香さんの曲「I Believe」がオルゴールで流れていて、「自分を信じて前に進め！」と背中を押してもらったような気もしました。振り返ると自分のことを怖いもの知らずだと思いますが、当時の思い切った決断があるからこそ今があることは間違いありません。

同時期に入社した社員の中で、「精神的疲労がものすごいから」という理由で退社して実家に帰った人もいました。しかしそれは非常に楽でしょう。なぜなら、辛いという理由で苦痛から逃げ出すのは誰にだってできるからです。そういった考えの僕は入社前から、「仕事が嫌い、精神的に辛い、人間関係が煩わしいから辞める」などと、退社後にすることを決めないで会社を去ることは絶対にしないと決めていました。辛い状況の中で人生を楽しむ「ライフワーク」を見つけることはそう簡単ではありません。しかし、それを見つけたら会社でやってきたことに深い意味を見出だせると思っていました。

のしかかる不安と拭い切れない恐怖を抱えながら、「スプレーアート」というライフワークを希望の光だと確信した僕は、妙に清々しい気持ちで満たされていました。

### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・興味のある関連キーワードを覚えておく
- ・やったことがないことに一度チャレンジしてみる
- ・他人の評価を気にしないで自分の感覚を信じる
- ・無意識だった習慣を見直す
- ・幼少期に好きだったことを思い出せ
- ・朝晩10分、自問自答
- ・絶対なりたくない人はキミの鏡
- ・キミの理想像を明確にせよ
- ・未来のキャンパスに制約はない
- ・ライフワークの原石は夢への武器

### <響いた言葉とその解釈>

「アーティストなんて食っていけないよ！」

…上司や同僚からの言葉。

10人中9人は同じように批判するが1人は違います。会社内や友人や家族から批判されても、己の内から湧き出る声に従えばいいのです。それが直感を信じることであり、人生でやるべきことなのだと僕は考えています。

「I believe myself. 信じることですべてが始まるの」

…ミュージシャンの綾香さんの歌詞の一部。

すべては自分を信じることからスタートします。この歌のオルゴールがなぜか、脱サラ宣言直前に会社内で流れていました。未来を自分で切り拓くことへの不安と恐怖に押し潰されそうな時、まるで僕の背中を押してくれるように感じたのは気のせいでしょうか。

### 3-3 心に花を咲かせるアート

僕が描くスプレーアートは、下書きなしの一発勝負です。数分という短時間の間に、両手と五感を使って自由自在にスプレー缶を操って描いていきます。スプレーアートは絵が完成するまでの制作過程を観ることも醍醐味となる絵画手法で、人前でそれを見せることを「ライブペインティングパフォーマンス」といいます。ライブ感覚になってその場で、即興で描き上げる実演のことです。公園でスプレーアートを楽しんでいた僕は、思い切って都内の路上でライブパフォーマンスを試みました。「このスプレーアートは誰でも釘付けになるはずだ！」と思って興奮しながら路上でのパフォーマンスを用意する自分がいました。スーツケースにスプレー缶を数本詰めて、人通りが多い場所へ繰り出したのです。

「え…、まだ見てるの…？」

実際に路上で絵を描いてみると、心臓が飛び出るかと思うほど緊張しました。今思えば、当然のことです。学校でのホームルームさえ嫌で仕方がなかった僕にとって、人前で絵を描くなんて免疫がまったくないからです。しかも、1枚絵を描き終わるまで、僕を中心に円ができるように凝視されるため、ブルブルと手が小刻みに震えるのです。描き上げた絵を観ると、普段描いている絵の半分の実力程度しか発揮できていないことが分かりました。そして、後片付けをしながら落胆していました。前述した通り、僕は人前で何かすることが大の苦手だったから、急に話しかけてくる人には戸惑ってばかりでした。

「この絵、いくらで買えますか？」

「元々は美術系の大学とか行かれていたのですか？」

「どこでスプレーアートを習得したのですか？」

「最初から完成した絵をイメージできているのですか？」

慣れない質問や初めての対応にしどろもどろになっていました。そんな自分はダサいし恥ずかしくもなります。けれど、新鮮で楽しいという新しい感覚は、観客側では味わえない独特の無形創造物です。

パフォーマンスについてメリット・デメリットがあることは、経験をしたことでよく分かりました。前提として、路上での実演や音出しなどのパフォーマンスは「許可が下りない」ということです。路上パフォーマンスをやっている時に、「許可はもらっているの？」「場所代としていくら支払っているの？」などと聞かれることが多々ありました。しかし、警察に許可書を提出しても許可が下りることはまずありません。例外として、東京都から許可証を得る方法もあるが、「物理的な商品と金品の交換は不可」ということが条件になります。なので、ボランティア精神のある大道芸人しか当てはまりません。

よく路上で歌っているミュージシャンたちも許可なしにゲリラ的にスピーカーから音を出しているのです。路上で活動していて、警察官に止められるケースも当然あるでしょう。本人たちからすると、許可が下りないから NG だと分かっているにもかかわらず決行するしかないという考えを持っています。しかし、警察官に止められる時は、通行の妨げになっているか、騒音で周囲が迷惑しているかのどちらかです。パフォーマンスが高評価で周囲から認められている場合、通行の妨げとなって止められることはあります。または、スピーカーの音量が高過ぎて、店舗の宣伝や周囲の迷惑行為だとみなされると止められます。

つまり、大勢の人が集まるほどのパフォーマンスは止められる確率が高くなり、人が集まらないパフォーマーには誰も干渉しないという厳しい現実があるのです。同時に、路上で商売が成り立つ可能性が高いパフォーマーを削除することが目的でもあります。また、活動している路上がヤグザの縄張りだった場合、当然ヤグザから目をつけられることとなります。大都市で一日に数百人も行き来する場所には、必ずどこかの組の縄張りになっている可能性が高いです。ヤグザが表立って直接パフォーマーに話しかけてくることは稀ですが、基本的には警察官を通してパフォーマンスの中止を訴えてきます。なぜなら、ヤグザと警察官はつながっているからです。表があれば裏があるように、すべては陰陽が上手く重なって構成されているのです。

数回の路上パフォーマンスを止められるならまだいいのですが、警察官に顔を覚えられるようになっては危険だといえます。パフォーマンスをしているその場で名前と住所を控えられて、警察署に連行される可能性もあるからです。そうならないようにするために、僕がやっていたことは「通行の妨げにならない」「大きく目立たない」「商売を表立ってしない」の3点に絞られます。

僕の場合、パフォーマンス中は自分を中心として円ができるほど数十人から百人は集まっていた。なので、車の通行の妨げにならないように足を止める観客にも気を配ることでそれを回避したのです。また、1回のパフォーマンスを短時間で終わらせることで、観客の集結と分散を速くしました。そして、商売の雰囲気を出さないようにするために、絵に値札を付けることをしませんでした。そうして僕は路上パフォーマンスをすることで、「好きなことをやって生み出した創造物の対価としてお金を得る」ということを実現させていきました。

裏のルートでヤグザに場所代を支払って、堂々と路上でパフォーマンスしたり商売したりする人もいました。しかし、僕はできるだけ関わりたくなかったのです。それは親が公務員だということが常に脳裏にあるからにはかなりません。そして、場所代を払ってまで路上でパフォーマンスをしたいとは思いませんでした。

絵の販売についてですが僕の場合、最初はどうか販売すればいいのかわからず路上で描いた絵は基本的に「言い値」にしていました。しかし、それだと遠慮して買わない人が多いことを知ったので、1枚3000円で販売することをベースと決めたのです。そうすると1時間に10回のパフォーマンスをして、10枚描いたうちの8枚が売れば2万4千円が売上になります。そこから必要経費を引いても、粗利率は8割を超えます。主にスプレー缶とキャンバスがランニングコストとなりますが、基本的に他の道具はコストゼロで仕入れられるのでビジネスにもなります。

ダンサーやミュージシャンなど目に見えない無形創造物を生むパフォーマンスは、パフォーマーであるアーティスト自身の体力や精神力も商品の価格に入ってきます。例えば、表現がパフォーマンスに直結するダンサーは、髪型や体型、衣装などにお金や時間を費やすことは当然となります。最初の第一印象はもちろん、外見で好印象だと感じてもらうことはそのダンサーのパフォーマンスの質に直結します。その上でパフォーマンスを鑑賞してお金を払ってまで感動する価値のある内容であった場合、クチコミが発生します。そうするとファンやリピーターも増えていきます。

ダンスの中でもパントマイムショーやジャグリングショーなど物体が残らないパフォ

パフォーマンスの場合、アーティストとしての成功は非常に難しいと思います。物体が残らないということは、対価交換ができないということだからです。つまり、パフォーマンスする時間に対して得られるお金が比例しないことになります。そうなるとアーティスト生命は短くなることは必然となり、本業にすることやメディアアーティストになる可能性は極めて低くなってしまいます。いくらパフォーマンスが楽しくて人前で披露することが好きでも、副業レベルにまでならないのではボランティアになってしまうでしょう。それでもやり続けている人たちが、パフォーマンス後に観客から小銭を投げってもらう「大道芸人」と呼ばれる献身的なパフォーマーたちです。

路上で演奏するミュージシャンの場合は、曲が入ったシングルCDやアルバムCDが商品となります。そして、次のライブチケットがバックエンド商品となります。なので、フロントエンドである路上パフォーマンスが成功しなければ、CDを買ってもらうこともライブイベントに来てもらうこともなくなってしまいます。そう考えると、路上パフォーマンスは成功アーティストになるためには通らなければならない登竜門的なイベントだといえるでしょう。

もちろん路上でのパフォーマンスを経なくても、人脈やインターネットを通して一気に成功まで辿り着けるアーティストもいます。しかし、お金も人脈も才能もない無名アーティストが成功を望むのなら、実力が客観的に見てとれる路上でのパフォーマンスは最適な披露環境だといえます。そのようなパフォーマンスが成り立つアーティスト活動の中でも、制作過程を実演で見せて絵として物体が残るスプレーアートは、ビジネス面でも相性が良いです。

即興で描いた絵が10枚中8枚を路上で売れるということは、最低でも10人中5人は「お金を出しても買いたい」と思ってくれていることになります。そして、多くの人に受け入れられる絵であると同時に、街歩く見知らぬ人の足を止めるほどの「感動」を先に与えなくては成り立たないのです。例え、展示会のように額に入れて絵を路上に展示していただいただけでは大抵売れることはないと思います。一流の画家が路上で作品を並べて展示したとしても、打率8割はそう簡単ではないことは想像できるでしょう。

だからといって、路上パフォーマンスがすべてではありません。路上アーティストは「誰でも会える」ことから価値を自ら落としていることになり、CDや絵などの商品は安価になってしまうのです。なので、いつまでも路上で活動ばかりしてはアーティストとしてのステージは上がりません。薄利多売のビジネスモデルになってしまい、アーティストとしての成功確率は低くなってしまいます。

逆に、メディア出演している有名アーティストは、「簡単に会えない」ことがアーティストや商品の価値を高めています。メディアアーティストはアーティスト自身がブランドになっているので、商品は高値で売買されることになります。当然、路上はもちろんイベントでパフォーマンスしたらものすごい反響を得ることは言うまでもありません。

それら路上パフォーマンスについて総合的にみると、パフォーマーであるアーティスト本人の実力が試せる最適な環境であるといえます。ましてやアシスタントなどの味方がいなく、たった一人で実力を出さねばならない場所に立たされて初めて、人に与える影響力の度合いを知ることができるのです。

ふと過去を振り返ると、サラリーマン時代に路上で座りながら絵を描いているアーティストに出会ったことがあります。確かあれば、新宿の夜でデートの待ち合わせをした時に人集りを発見した時でした。外国人女性が真剣に日本人相手にパフォーマンスを披露していたことを覚えています。一瞬見入ったのですが、我に返って予約したレストランへ向かっていました。当時は自分が路上で絵を描くなんて思いもよらなかったです。

人とのコミュニケーションを苦手としていた僕は、ありのままの本質を軸とした生き方に変わった瞬間、「コミュニケーションが好き」になっていました。それは、路上で絵を描いていると、今まで出会わなかったいろんな人と会うようになったからだと思います。仕事帰りのサラリーマン、買い物でぶらりと歩いている主婦、他愛のない話で盛り上がる学生、ブランド品で全身を飾る出勤前のキャバ嬢、ダンボールの家から出てきたホームレスたちと出会うことができました。スプレーアートを披露している僕を見る彼らの目は、確実に感動の色をしていたことを覚えています。

また、描いた絵を並べて地べたに座りながら、彼らと談笑することは楽しい時間でした。10代20代とは不思議と親戚に近い感覚でお互いの人生観を話し合えたからです。路上で歌うミュージシャンの卵と仲良くなって夢を語り合い、一緒にライブパフォーマンスもやったりもしました。どれも思い出の1ページになっています。

路上パフォーマンスでは、描いた絵を地面に置いていたこともあり、通行人に思い切り踏まれたこともあります。けれど、感動の場面に出会えた時には「路上パフォーマンスやっていて本当によかった」と思えます。僕のブログをよく読んでくれる女子高生が、離婚して会えなくなったお母さんとの再会の場になったことは特に嬉しかったです。

このように、スプレーアートを路上で描いて見せることはマイナスなこともプラスなこともありました。無料で絵を渡したこともあれば、1枚500円で材料費だけ頂いたこ

ともありました。まだ路上に出始めた頃は当然、アートのサラリーマンの収入に達するとは到底思えませんでした。

けれど、脱サラ宣言してしまった僕には後がありません。決断したこの道で突き進むしかないのです。そういう気持ちを胸に、少しずつ一步一步、軌道修正して前進していきましました。来月で正式に退社しなければならない恐怖と戦いながら、一人孤独の道を歩いていったのです。

### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・自分をいかに信じられるか問い続ける
- ・考えて立ち止まるくらいならやってしまう
- ・見切り発車すればスタートダッシュできる
- ・弱点をあぶり出して真っ向から見つめる
- ・はじめの一步を踏み出せば、世界が変わる
- ・自分を自分で育児せよ
- ・今から、ここから、自分からスタートせよ
- ・雑用はさっさと終わらせよ
- ・8スタンバイ、2アクション
- ・ハッターリ上手になれ
- ・見切り発車しないから、スタートできない
- ・短所は最小限に、長所は最大限に

### <響いた言葉とその解釈>

「わぁ～すごいキレイだね！ここにお月さまがあるといいね！」

…公園でスプレーアートをやっていた時に話しかけてきた小学生からの言葉。純粋な子ども心から生まれる固定概念のない一言に、絵の精度を上げるヒントをもらえました。無我夢中になっていると、内なる自分と向き合っていることを実感しました。子どもたちにスプレーアートを教えることで、技術以上に感性を磨いてほしいためでもあります。

「独学でここまで描けるなんてすごい才能ですね！美大生だったとか絵画教室に行っていましたよね？」

…路上パフォーマンス中に足を止めてくれた鑑賞者から言われた言葉。  
僕は美術の学校を卒業したわけでも、絵画教室で習っていたわけでもありません。スプレーアートは僕の人生を大きく変えたアートです。よく「天才」だとか「才能」だという言葉で片付けられますが、「絵の才能はない」と親から洗脳させられ続けていたことなど彼らは知る由もありません。

### 3-4 脱サラという見切り発車で壁を壊す

まったく準備もなく脱サラしたわけではありません。脱サラ直後のテーマは、「料理」と「IT」と「スプレーアート」でした。

僕は料理をまったくしない父親を見て育ったためか、「料理のできる男」でありたいとずっと思っていました。なので、料理教室で優しく教えてもらうのではなく、実際のレストランシェフに弟子入りして基礎から教わったのです。職人用の包丁を購入して砥石の使い方から、薬物や肉魚の切り方、さばき方を隣で丁寧に伝授してくれたことに感謝しています。僕に料理のイロハを教えてくれた料理長は、睡眠時間4時間で仕事と家庭を両立しています。バランス良く組織社会でトップを維持して部下をマネジメントする料理長には、是非ともご自身のお店を出す夢を叶えていただきたいと願っています。

料理のスキルを身に付けた僕は、アーティストの心身の健康をマネジメントする「ヘルスマネジメント」を徹底的に体系化して、独自の成功法則に追加していきました。忙しくなったアーティストが食事を疎かにして活動ができなくなるパターンが多いことは周知の事実であります。僕はというと病気はもちろん、風邪など絶対に引きません。アンバランスな生活リズムだった大学時代の頃以来、強く自己治癒力の高い健康体を保っています。自己パフォーマンスを最大限発揮できる心と身体を創り上げて維持することは、プロとして活躍するためには必須だと考えます。すべての人にとって、健康は人生の土台になります。地味なことですが、毎日のルーティーンワークを徹底しているアーティストこそ長く強く活動できているのです。

そして、ブラック企業とはいえ、パソコンとインターネットを使う会社に入社したのも何かの縁だと思っています。キーボードを見ないでタイピングするブラインドタッチやワード、エクセル、パワーポイントなどビジネスで使う基礎的な能力はあつという間に上がっていきました。起業したらホームページ制作や画像加工などの IT スキルは絶対必要だと思っていましたので、脱サラする前から独学で制作していったのです。現在のホームページや動画もすべて自分で制作したものです。

会社、整骨院、自宅を行き来する毎日の繰り返しだったので、時間を作るなら睡眠時間を削るしかありません。なので、毎朝4時に起きて独学で勉強して構築し続けた結果、今のホームページが出来上がったのです。そして、自作のホームページに作品画像や動画を少しずつ掲載していき、インターネットを通して、自分が伝えたいメッセージを発信していきました。アートの他に影響を与えるような文章も書きためていたし、それを考えることも楽しいことです。すると、応援してくれる人や地方に招待してくれる人まで現れるようになりました。脱サラしてから不思議と僕の夢を叶えるための協力者が現れ始めたのです。

最初の出来事でもっとも奇跡なことは、スプレーアートをスタートしてから沖縄に招待されたことです。しかも、7日間も滞在できました。

「あなたの美的感性を磨くために沖縄にいらっしやいませんか？交通費や食費、宿泊費などすべてこちらで負担します。10日間まででしたら招待できます」

というメッセージがブログを通して届いたのです。その人のブログを読んでも、どうやら沖縄のある島に住んでいることが分かりました。といっても、実際に会ったことがない人に招待されるなんて普通に考えてありえません。

「マグロ漁船に乗せられて、死ぬまで働かされるよ」

そう友人から言われるほど危険だと思いましたが、もし本当だったら非常に魅力的なオファーだと思いました。というのも、貼り絵の放浪画家で有名な山下清画伯のように「旅しながら絵を描く」という自由でアーティスト的なライフスタイルを夢見ていたからです。彼の人生をドラマ化した「裸の大將放浪記」を小学生の時に夢中になって観ていたことを思い出します。いろんな意見はあつたが結局、「沖縄行きは流れに任せよう」と決めました。相手のオファー通り、必要道具と衣類のみスーツケースに準備していると、前日に飛行機のチケットが届いたのです。

「これで東京から石垣島にいらしてください。そこで僕の友人が待っていますので合流してください」

最初に会う相手がオファーしてくれた人ではなく、その友人に会ってくれという流れでした。「沖縄は行ったことないし、これを機に行く！」と決めていた僕は、そのチケットで石垣島に飛びました。飛行機からでもはっきりと見える、エメラルドグリーンと藍色のグラデーションに染まる海は圧巻でした。言葉にできない素晴らしい自然芸術を観ることができただけでも、僕は沖縄に行ってよかったと思いました。石垣空港に到着し、オファーしてくれた相手の友人と合流できました。その後、オファー相手と沖縄の名産を一緒に食べました。ホテルもすでに予約されていたことに驚きながら、7日間も沖縄を満喫させていただきました。

このオファー相手は沖縄県の政治家で、「若いアーティストを育てよう」と無償で支援している素晴らしい紳士でした。年齢的には僕の父親より上で、この沖縄に招待してくれたことで「スプレーアートアーティスト YOSHI の父」という表現がマッチするようになったのです。

依頼主の紹介で7日間、一緒に旅をすることになった4人は家族のように仲良くなったことも良い思い出です。綺麗な自然と美味しい食事を楽しむ中、ただ沖縄で遊ばせてもらっただけではありません。石垣島の他、西表島でスキューバダイビングを体験して珊瑚の花畑を間近で見たり、竹富島でスプレーアートをやったりと、沖縄本来の魅力がある離島を旅させてもらいました。まさしく、感性の右脳を磨くために必要なことです。この経験は僕のアーティスト人生を彩る「最高の絵の具」になったと思います。

また、沖縄を旅したメンバーの一人にキューバへ移住した60代女性の方がいました。不動産経営者だった彼女は昔、子宮筋腫になってそれを**出術しないで完治させた**話を聞かせてくれました。成功者インタビューに続き、健康者インタビューです。ガンになった人、そして、ガンを手術しないで完治させた人に話を聞きにいきました。何人くらい聞いたのは覚えていませんが早めに共通点・法則性が分かったので、100人はいかずにインタビューが終了しました。現在も人生を謳歌しているキューバ居住者の成幸者の健康論をベースに肉付けしたことを実践しました。そこで僕は究極的な健康論の仮説を立てたのです。

「ガンにならない食事や生活方法は、風邪すらひかない超健康体を維持できるのではないだろうか？」

この仮説を実証するために自分で実験し始めました。この仮説は現在、病気・風邪知らずの健康体を維持していることで確信へと変わったのです。また、「発熱や風邪でフルパフォーマンスを出せない」アーティストにとって、健康体はまず何よりも大事だと思っていたからこそここまで追求できたと思います。現在では僕の家族含め、健康に興味のある生徒さんにも教え、みんな健康体を維持しています。

沖縄から東京に戻って3ヶ月後、有名な週刊雑誌の編集者の方から雑誌取材をされて、「日本の画家7名」の1名に選ばれることになりました。メディアから取材されるアーティストになるなんて夢にも思っていませんでしたが、インタビューでは僕の人生哲学を思い切り話させてもらいました。その内容をそのまま動画にしてインターネットで公開することで、より多くの人に僕のメッセージを伝えることができるようになりました。インターネットという誰でも世に発信できるツールがある時代に、好きな活動ができることは幸せだと思います。

外見も長髪にパーマをしてアーティスト風にすることなど、ブランディングを考えながら客観的にいろんなことをチャレンジしていきました。「何か」というゴールに向かって突き進んでいる時間は非常に楽しくて寝食を忘れます。

他には、ダーツバーや居酒屋の壁画制作を依頼されることによって、アーティストとしての活動の幅が広がってよりライフワークを楽しみました。壁へのスプレーアートは平面で描く場合よりも格段に難しいといえます。スプレーの液が垂れてくる可能性も考慮しながら、上手くイメージを具現化していかなければなりません。

また、大学の文化祭や全国のイベントでスプレーアートパフォーマンスを依頼されることもあります。招待された付近を自由に旅することも、そこで出会った人との交流もワクワクします。「この文化祭の思い出のTシャツにスプレーアートを描いてくれませんか？」と学生たちに言われて、1枚ずつ丁寧に描いたことが昨日のように思えます。

9才の時に思い描いた「全国各地を旅しながら絵を描く」という夢が、社会に必要とされながらもこうして現実になっていました。なんて幸せなことなのでしょう。そしてそれと同時にアーティストとしての道から派生して、教育の道も考えるようになりました。

「スプレーアートをもっと広めたい」という気持ちもあり、誰でもスプレーアートを楽しめる教材があればと想像しました。どうやって作ればいいのかやり方が分からなかったので試行錯誤しながら、自らビデオ撮影してパソコンで編集してDVDや冊子を作ってみ

ました。その教材のおかげもあって、北海道から沖縄まで全国各地に6～68才まで500人以上、スプレーアートを楽しむ人が増えたことを嬉しく思います。いつの間にか、人前でまったく話せなかった僕は、今では絵画を教える「先生」とも呼ばれる立場になっていました。スプレーアートを教えていて、当時の僕のように「おお！スゴイ！」と感動する生徒を見ていると嬉しくなります。

### 3-5 6つの顔を持つ芸術起業家

いつの間にか、絵を描く「アーティスト」だけでなく、体系化したテクニックをレッスンで上達させる「ティーチャー」、WEBマーケティングを駆使する「マーケッター」、ホームページや動画などWEBコンテンツを制作する「クリエイター」、メディアへ押し上げる「プロデューサー」、健康管理からスケジュール管理する「マネージャー」と、6つ顔を持つようになっていました。

正直、肩書きなんて関係ないと思っています。僕自身、なんて呼ばれようが構いません。ただ、次世代を創造していく10～30代にもっとも影響を与えられる職業が「アーティスト」だと思うので、メインで名乗らせていただいています。本当に大事なことは、地位や名誉や金やモノが消えて裸一つになった時に、「何を語り、何ができて、どう生きることができるか」が重要だと僕は思います。

「アーティストなんて食べていけない職業だよ！」

「絵を描くために脱サラする？バカじゃないの!？」

「安全で安定収入のある人生が一番幸せだよ。」

夢を潰しにかかる言葉を散々受けながらも、自分を信じて行動するしかありませんでした。そんな一般的な正論は、十分承知している上での結論なのです。そして、信念をどう貫き通すか、どんな結果を出すかが、すべてを物語っていると思います。

学生のうちは勉強を頑張って高い点数を取れば、当然「結果」は認められます。もし、高い点数ではなくても「徹夜して頑張った」という「過程」を見て、ある程度は認められるでしょう。しかし、社会人になってからは学生のように甘くはありません。数字や

契約の取得でしか判断されない会社は多く存在します。

特に世間一般でいう「夢追い人」を、他人は「結果」でしか見ないのです。「過程」でどれだけ苦労しようが関係ありません。「成果を出したか出していないか」という二極でしか判断しないのが事実です。なので、「否定してきた人がもっとも納得せざるを得ないことは何か？」という問いにも真剣に考えるようになりました。見知らぬ他人でさえ、「この人はスゴイ！」と思われる存在とはどんな人なのでしょう。芸能人のように一言の影響がある人に、どうすればなれるのでしょうか。

一番誰でも分かりやすい媒体は「テレビ」です。インターネットが普及した現在でも、様々なメディア媒体の中で一斉に全国各地に発信されるテレビの影響力は並ではありません。一回でもテレビに出ただけで有名人だと思われると同時に、最高のブランディングになります。そして、老若男女問わず、多くの人々が認める存在となると考えました。

その存在を目指して僕は、ホームページやブログなどの IT 技術をフル活用して独自のメッセージを発信していったのです。メディア関係者から依頼されるように導線を作っていく、すべてホームページを経由しないと連絡が取れないようにしていきました。そのようなシステム構築も上手くいき、テレビ出演も実現して誰でも知る芸能人と一緒に仕事をすることも可能になりました。視聴者側では絶対知ることができないことや、テレビのスタジオでは裏側を間近で知れたことは貴重な経験です。

これらが後に、アーティスト成功独自ノウハウ「アーティスト・マーケティング」というくくりの WEB ブランディングの原形となっていきます。

### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・皆が考えるであろうことの真逆をやってみる
- ・脳内で一度シミュレーションしてみる
- ・心から楽しんでいる自分を想像してから寝る
- ・不可能を可能にできると信じ込むことからスタートする
- ・夢は大きく、逆算は小さく
- ・客観的に夢を凝視せよ
- ・迷ったらキミの心に聞いてみる
- ・夢を分解して一つずつ順番にパズルをはめていく
- ・度胸試しで本気度を知れ

- ・自由に羽ばたくために「翼」を持つ

### <響いた言葉とその解釈>

「アートなんて、趣味でやることでしょ！」

…親から言われ続けた言葉。

「好きなことを仕事にする」ライフワークで生きることを決めていた僕は、断固として決意がブレることはありませんでした。

「あなたに出会えて人生が変わった！」

…40代の男性から言われた言葉。

うつ病から社会復帰するキッカケになったという彼は、自分の内側からの声に真剣に耳を傾け、少しずつ強く優しくなっていました。一回り年が離れている彼から言われたことは、「人生にプラスの影響を与える成幸者」を目指している僕にとって非常に嬉しい言葉です。使命達成のモチベーションになったと同時に、多くの人に光を与え続けられる人でありたいと思っています。

## 4. 目に見えない最上の喜び

### 4-1 芸術起業の神様

「芸能事務所など入らずに、たった一人で成功してみせる！」

独立願望が強く、有能なプロデューサーにも出会わなかった僕はセルフプロデュースに力を注ぎました。そして、自分一人で「無名アーティストをメディアで活躍できるアーティスト」に進化させることをやり遂げることに成功しました。自分を唯一無二の商品にブランディングしていきながら、様々なマーケティングを駆使して圧倒的な結果を出していけるように全力を尽くしました。オンリーワンのアーティストになるよう自分を構築していった結果、壁画を自由に描いて5日間で50万円も稼ぎ、15分で描いた絵が1枚3万円で売れるようにもなっていました。月収100万円を超えた時には、金銭的自由を初めて感じました。特に物欲がある方でない僕は、欲しいものは何でも手に入る状態でした。そして、本当に欲していたものは「縛られない自由な時間」だと体感しました。

「ああ、金銭的に自由になると本当に解放されて、ここまで心に余裕が生まれるものなのか」

そう自由を満喫しながらの散歩は、本当に優雅で幸せな時間です。そしてそれは、アーティストにとって必要不可欠な「ゆとり」になります。

どんなことでも自分なら不可能を可能にさせる気概がありました。ゼロから何でも生み出せる、まさに無敵の状態だと信じていました。そして、さらにアーティストの才能を開花させようと、見えない力を取り入れようと考えたのです。というのも、ZONE（ゾーン）という究極精神領域に以前から興味がありました。それに入ると、自分でも驚くほどの作品を描けるようになるからです。一流のスポーツ選手がよくこの状態になると言われますが、心身ともに最高のパフォーマンスを発揮できるようになることは科学的にも証明されています。ZONEに入ることは、至福の時間を味わうことと同じです。しかし、そう簡単に入れるものではないことも事実です。緊張感や期待、焦り、楽しさ、プレッシャーなど様々な必須要素がすべて揃わないとその状態になることができません。

僕がZONEを初めて経験したのは、中学2年生の剣道の試合の時でした。絶対に勝てな

いであろう相手と試合することになった僕は、思い切りの良さや負ける恐怖が半々くらい持っていたと思います。試合が始まり、竹刀を交えた瞬間から、「無」になりました。音そのものが消えたというのか、今まであった歓声が一切聞こえなくなったのです。それ以上に、体が勝手に動いてあっという間に勝利してしまったことに驚きました。まさに、「**剣道の神様**」が僕に乗り移ったような感覚だったことを覚えています。そのような感覚は、高校生2年生の時にもありました。弱小剣道部が県大会に出場できるか否かが、僕の試合で決まってしまう大会の時のことです。後輩や先生からの大きな期待、そして、負けたら初の県大会出場権を失う恐怖を感じていました。この相反する2つの感情が人の精神に影響するのです。そしてこれらが上手く融合された時に、ZONE に入ることができます。

剣道だけでなく、別の分野でも同じことがいえます。スプレーアートも感情のプラスマイナスが精神に現れ、絵の構図やクオリティに影響するのです。人間の見えない力は非常に奥が深くて底が見えません。学生時代に「**剣道の神様**」が降りたように、「**アートの神様**」も降りた時は驚きました。そこでも無音になり、自分の周りだけ特別な空間ができて、時間が止まったかのような感覚になりました。それでいて、何者かに自動操縦されているように脳も両腕も勝手に動いていました。そして、出来上がった作品をみると、自分でも驚嘆するほど神がかり的な絵になっていました。このような実力や限界を超える創造物を完成できることに感動して、そして自然にこう考えるようになったのです。

「これを無意識ではなく、ON・OFFできるスイッチのように意識化できないだろうか？」

まるで非現実的な仙人のように、神技が意図的に繰り出せるのではないかと期待を膨らませながら仮説を立てていきました。

## 4 - 2 究極精神の先にある空なる領域

超人的な能力を発揮する究極精神領域 ZONE (ゾーン) ZONE とは、人間が没入できる究極の精神領域の境目のことです。そして、「ZONE」とはどんな現象かという、一時的に能力が急上昇する、または限界を超えることを指します。

例えば野球でならば、ピッチャーが投げるボールの縫い目が見えるほどスローに感じた

り、まだバットを振ってもいないのに決めた方向にホームランを打てる確信を持てたりする現象です。イチロー選手のような一流のスポーツ選手は、意識して ZONE に入って最高のプレーをされています。しかし、プロのスポーツ選手でなくとも、マグレでその状態に入れる時があります。

意識的にしろ無意識的にしろ、自己の精神状態が上手い具合で振り子のように左右し、そのバランスを保ち続けながら、己が消えたような感覚になります。耳に入る音が遮断されて、自分の周りだけ特別な時空間ができ上がります。その時空間内では、スピードの遅速はもちろん、パワーの強弱、五感の鋭さにも上限はなくなるわけです。

「本当にこれは自分がやったことなのか？」

通常状態に戻った瞬間、ZONE に入った本人すら驚く不思議な感覚に陥ります。当然、このような経験をもとにした文章を読んだからといって、すぐこの境地に入れるわけではありません。

そして、運良く ZONE に入るマグレがある以上、さらに奥先の領域が存在します。それを僕は、「空（くう）の領域」、「神が降りる場所」、「真空状態」などと呼んでいます。29才で物質的財産をすべて捨てて出家したゴータマ・シッダールタ王子：仏陀（お釈迦様）が、35才で菩提樹の木の下で悟った境地がまさにこれです。

「心を空（くう）の状態にすべし」

「この世の悩みを消そうと遮二無二動くのではなく、まず我を無くせ」

「弦は緩みすぎても張りすぎても、綺麗で美しい音は奏でられない」

そう悟るまでに、身体を痛める修行をしたり食事を断ったり瞑想したりと、様々な修行をこなしていったわけです。その内容を知ると、かなり厳しくて誰もができることではありません。よって脱落者は多く、悟りの境地に達する覚者は、必然的に少数になります。

ちなみに、仏教・キリスト教・イスラム教・ヒンドゥー教・ゾロアスター教など世界には多くの宗教があるが、僕は10代の頃からどの宗教・政党・流派にも属しないと決めています。それはなぜかというと、真理へ到達する（悟る）までの道のりが最速ではな

く、遠回りになることを深く理解しているからです。そして、最速で進める一つの道が存在することを確信しているからです。

また、言及するならば、究極精神領域 ZONE は空の領域に入れる第一の扉のようなものです。サッカーやバスケットボール、バレーボールなどメジャーなスポーツはもちろん、日本古来の武道の同様にそれらの領域は存在しています。そう言い切れるのは僕自身が、剣道でそれを体感しているからにほかなりません。柔道・合気道など身体の動きがある武道を「動の武道」と称するならば、作法など最低限の動きだけがある茶道・華道などは「静の武道」と称することができます。そして、その「静の武道」にも、究極精神領域はあると断言できます。静の武道の中でも、もっとも心が映し出され、かつ他人でも良し悪しの判断つくものは、『茶道』です。(緑茶・紅茶・中国茶・ジャスミン茶などお茶全般) なぜなら、同じ茶葉と同じ水を使ったお茶でも、淹れた人によって味や香りが変わるからです。さらには、飲み終わった後の効果・効能までもが変わっていきます。

「Aさんが淹れたお茶は、フルーティーな香りがして優しい味がする」

「Bさんが淹れたお茶は、体内に着火されたような燃える感じがする」

「Cさんが淹れたお茶は、雲に浮いたような感覚になる」

不思議だと理解できない人もいるが、こういう現象が実際に起こるわけです。ではなぜ、同じ茶葉・水を使ったとしても、まったく違う感覚のお茶に仕上がるのでしょうか。量も正確に同量にしても、なぜ、味も香りも余韻も変化してくるのでしょうか。それは、心・精神の状態が人によって違うからです。心とは目に見えない非現実的なものだが、確実に存在しています。心がなければ喜怒哀楽などの感情をとどめておけません。

「お湯を沸かして、茶葉のグラムをはかって、茶器にお湯を注ぎ、陶器にお茶を点てる」

この誰でもできるであろう一連の流れで、心は現象化するわけです。それはほんの、たった数分のことです。そのうちに、一杯のお茶として淹れた人の心が鏡のごとく反映されます。「生命エネルギーが液体に入る」とも表現できるでしょう。それは、淹れる人のエネルギーが良くも悪くもお茶に映し出されるわけです。自信があろうがなかろうが、語らずも見抜かれるものです。

単に「おいしい」という味覚だけの満足ではなく、飲み終わってからの人生がプラスに変化していくような液体へ変容させることまで可能になります。そのような、雲を突き

抜ける勢いのあるお茶を今後も飲み続け、また、必要としている人に淹れ飲ませたいものです。それには、意識的に ZONE に入り、それを突き抜けて超え、空の領域に入りとどまる強固で柔軟な精神と赤ちゃんのような純粋無垢な心に回帰することが必須であると言えるでしょう。

#### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・体と心は常にリンクしていることを理解する
- ・夢中になることにとことん夢中になる
- ・成功しやすい習慣を決めて毎日やり続ける

### 4-3 呼ばれないと行けない国

アートの能力の幅を広げようと、インドにも足を運んでみました。「インドは呼ばれないと行けない」といいますが、僕は呼ばれたので行くことになりました。というのも、友人の紹介でインドの孤児院を支援している人と出会い、スプレーアートを現地で披露することになったからです。インドを案内してもらうことと、スプレーアートパフォーマンスをすることの等価交換になりました。

2011年8月21日、成田空港からマレーシアのクアラルンプール空港行きの飛行機に乗りました。「インド、楽しみだな～」と思いながら、過去を振り返ってみました。高校生の時に中国、大学生の時にシンガポールと2ヶ国行きましたが、どちらも複数・団体での旅行だったので、一人で海外に行くことは人生初となります。パスポートに付いている顔写真は大学3年生の時の僕だったので、インドビザ付きのパスポートを提示し、出国審査を受けました。

飛行機内で入国する際に必要な「入国カード」の記入を求められます。高校で英語（文法）の成績は良かったものの、入国カードに記入しなければならない内容を把握することができませんでした。実社会で使わない学問を教える学校教育は結局、勝つか負けるかの競争心を芽生えさせる「工場」にしか過ぎないのだと思います。そう考えても入国できなければ仕方がないので、なんとか記入欄を埋めようとしていたところに助け船がきた。

隣に座っていたインド人の女性が親切に教えてくれました。「ここは記入しなくていい」「ここはホテルの電話番号ね」など分かりやすく丁寧に教えてくれたので、無事、入国することができました。その他にも、機内食で出たパンとヨーグルトを僕にくれる優しい方でした。代わりにチョコをあげようとしたが断固と拒否したので、僕の英語の名刺と iPod でスプレーアートの動画を見てもらいました。「帰国したらホームページを見るよ」と言ってくれるように、スプレーアートの**英語版のホームページ**を作ってあってよかったと思いました。

チェンナイ空港に着いたのが、日本時間でいうと深夜2時でした。丸1日以上、移動に時間がかかることとなります。まず、旅中で使うであろう日本円をインドのお金「ルピー」に換金しました。そんなにまとめて換金する人はあまりないらしく、「ここに渡せるお金がないから取ってくる。待っている」と言われました。

外に出て手配してあるタクシーの運転手を探そうとすると多くの人がタクシーを使うため、空港前には数十人の運転手がプラカードを持って待っていたのです。「こんなに多くて見つかるのか？」と不安だったのですが、1つずつ自分の名前があるかチェックしながら歩きました。

「Mr. YOSHI JAPAN」

そう書いてあるプラカードを見つけ無事、手配していたドライバーと会えました。そこからドライバーの車でホテルまで直行することになったのです。南インドの道路は日本のように綺麗にコンクリートで平坦ではありません。デコボコしている道路を走中、座席で横になりながら、「バウンドしまくりで眠れない。早くホテルに着かないかな…」と思っていたら急に車が止まりました。そこはホテルではなく、休憩所である売店だったので。

運転手「飲み物はコーヒー？」

YOSHI「水ちょうだい」

運転手「水はないよ。とりあえずきなよ」

目をこすりながら車を降りると、熱くて甘いチャイ（インドの紅茶）を飲ませてくれました。今思うと、そのチャイに睡眠薬が入っていたら確実に帰国できません。何も疑わ

ずにそのまま飲んでいた当時の僕はあまりにも無知だと思います。チャイを飲んで休憩後、またデコボコの道路を90キロ以上の速さで車は走っていきました。

「もう事故らなければどれだけ速くてもいいよ…」

そう思いながらまた横になりました。サイドミラーを閉じてレーシングゲームのように車を走らせるドライバーと話しながら、「インド人は8割がB型」ということを思い出しました。チェンナイ空港から約6時間、やっとホテルに着きました。タクシー代として5000ルピー（約1万円）を支払い、チップで200ルピー（約200円）と機内でもらったパンを1つ運転手にあげると運転手は喜んで帰っていきました。インドのタクシーは、迎えにくる分のガソリンも支払わなくてははいけないのです。そして、あまりに遠い場所へ迎えに行く場合、運転手は車内で何泊かしながら目的地に向かわなくてははいけません。

#### 4-4 異国の地でアートを披露する

ホテルに着いて一安心しました。現地で一緒に旅をする日本人Nさんの携帯にかけても繋がらなかったのも、「ここで一泊して明日の朝かければいいのか」と気楽に思いながらチェックインするべくフロントに向かいました。フロントでは「こんばんは！」と元気な挨拶はなく、2人のボーイが気だるそうに半寝状態で立っていました。「新規の部屋をお願いします」と言い、前金で1000ルピー（約2000円）を支払って部屋のキーをもらいました。部屋に入った途端、僕の顔めがけて虫が羽ばたいてきました。一瞬驚いだが、かなり眠かったのでそんなことはどうでもよくなり、シャワーを浴びてすぐベッドへ倒れ込みました。旅の疲れで心身の電源がOFFになろうとする時、合流する予定のNさんがこのホテルに泊まっていないことを知る由もありませんでした。

朝、インドにいるとは思えない感覚になりながら再度、Nさんの携帯にかけたが繋がりません。現地携帯番号も繋がらないし、メールの送受信もできませんでした。僕の携帯がダメなのかと思い、フロントからかけてもらうように頼んでみるもののそれでもダメでした。

「合流できなければスケジュールを消化することなく1週間過ごすのか…」

そう不安と恐怖を感じながら、なんとかNさんと電話が繋がることを願いました。少しホテルを出て歩いてみると、あまりにもインドの活気ある街に飲み込まれそうで道に迷わないうちにホテルに戻りました。「もしかしたらホテルが間違っているのか？」と思い、日本でホテルの住所をメールに転送しておいた文章を見せながら聞いてみたのです。

YOSHI「このホテルはこの住所？」

フロント「いや違う。」

YOSHI「え！違うの？」

フロント「このホテルはここじゃなくて隣のホテルの住所だよ。」

YOSHI「なに～～！！」

フロントに頼んで一緒に隣のホテルに行き、事情を話してもらおうとすぐ「116へどうぞ」と言われ、階段を駆け上がるとNさんはそこにいました。

「会えてよかった…」

緊張から解放され、どっと疲れが出ました。本当に僕の人生は、「0か100」か「裏か表か」の二極的な出来事が多いのです。すぐに間違っってチェックインしたホテルで荷物をまとめ、インドの旅の準備をしました。

インドに来た目的は、海外初のスプレーアートのライブペインティングパフォーマンスです。まずは、マイソールという地区にある孤児院でスプレーアートを披露することになっていました。同行しているNさんが支援している孤児院内でフリーミール（食の施し）をすることは直接的なボランティアにもなります。その後、孤児院暮らす子どもたちとスタッフに会い、小さな小屋も見学させてもらいました。皆でカレーを一緒に食べた後、庭でスプレーアートを披露させていただきました。

インドのスプレーを使うことは当然始めてのことでしたが、テクニックも通常通り上手くできたので安心しました。日本製のものよりも水っぽくて垂れやすいと思いましたが、何よりも子供たちのキラキラした屈託のない笑顔を見ることができて嬉しかったです。こういう瞬間に、「スプレーアートをやっていてよかった！」と心底思います。パフォーマンスを終わろうと思って通訳をお願いしたら、子どもたちが「フラワー、フラワ

ー！！」と叫びだしました。どうやら「花の絵を描いてほしい」とのことでした。予定していなかったがその場でイメージして、「ひまわり」を即興で描くことにしました。気温が40度以上もある日光の下でのパフォーマンスは、体力の消耗が激しいのでスピーディーに完成させました。「ジャパニーズ・フラワー、ヒマワリ！」と言うと、子どもたちはまた大盛り上がりで喜んでくれました。

#### 4-5 スーパースターも批判される

3回のパフォーマンスが終わった後、僕は子供たちの前でスピーチをして現地語で翻訳して伝えてもらいました。なぜ日本からインドに来たのか、スプレーアートをやっている理由など話した後、僕が学生の頃に聞いたメッセージを伝えました。

それは、バスケットボール界のスーパーstarであるマジック・ジョンソンから子どもたちへの言葉から始まります。

～～～ここから～～～

「お前は無理だよ」と言う人の言うことを聞いてはいけない。

もし自分で何かを成し遂げたかったら、できなかった時に、他人のせいにならずに**自分のせい**になさい。

多くの人が僕にもお前にも「無理だよ」と言った。なぜなら、彼らは成功できなかったから。途中で諦めてしまったから。

だから君にもその夢を諦めてほしいんだ。不幸な人は不幸な人を友達にしたいんだよ。

決して諦めてはダメだ。自分の周りをエネルギーに溢れ、しっかりした考えを持っている人で固めなさい。自分の周りを野心で溢れ、プラス思考の人で固めなさい。近くに誰か憧れる人がいたら、その人にアドバイスを求めなさい。

君の人生を考えることができるのは、**君**だけだ。君の**夢**が何であれ、それに向かっていくんだ。

なぜなら君は、**幸せになるために**生まれてきたのだから。

-NBA バスケットボール界のスーパースター マジック・ジョンソンから子どもたちへの言葉-

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

僕はこのメッセージを21才の時にある経営者から聞くことができ、夢へのパワーが溢れたことを覚えています。そして、自分の中でこう言い聞かせています。

周りと違うことをやろうとすると、親しい人ほど「やめた方がいい」「無理だ」「失敗する」などと言ってきます。「自分の人生の責任は自分でとる覚悟」があるなら、否定的な言葉を肯定的な言葉で捉える必要があります。マイナスな言葉は、飛行機が飛ぶために必要な「追い風」だと思えばいいのです。そして、否定的な言葉を言うてくる人ほど、結果を出した姿を見てコロッと褒め称えてくることを知っておくことです。彼らは勇気を持って夢を諦めた人間だから、夢を叶える人間が羨ましいのです。だからこそ、失敗することに恐れず、自分を信じて、人生を創造していくことに全力を注ぐことが大事です。

親に捨てられ、餓死寸前だった壮絶な過去を持つ彼らには、「**絶対夢を叶えてほしい!**」と心底願いました。孤児院で暮らす彼らこそ、幸せになる権利があるのだとも思えます。インドの大人は例外なく、子どもっぽいところがまた楽しくさせます。孤児院のスタッフである大人たちも白い歯を見せながら、スプレーアートをワクワクしながら誰もが釘付けになっていました。孤児院で暮らす子どもたちは、スプレーアートを実際にみて「将来アーティストになる!」と言っていたことが、灼熱のインドでの疲れを吹き飛ばすほど嬉しかったです。

孤児院を後にして次は、バンガロールという地区にあるカウンセリングセンター（後天的な精神病を持つ人が改善するために住む場所）に向かいました。ここでは、社会復帰を目標に老若男女問わず、30人ほどこの施設で暮らしています。スプレーアートのパフォーマンスで最初は3枚ほど自由に描いてみせると、「これはなんていう名前のアートなの?」「私は何をやればいいの?」「僕もやりたい」などの積極的なアプローチがありました。スプレーアートのパフォーマンスもレッスンも有意義な時間になりました。日本で育ったことを心から幸福だと思え、アートは国境を超えることも体感できました。ここでもパフォーマンス後、皆の前でスピーチをさせていただきました。そこで

は孤児院で話したことと同じように、「**アートをやる理由**」と、「**夢を叶えるために必要なこと**」を話しました。僕が英語でスピーチができないので日本語で話し、それをNさんがまとめ、施設のスタッフが代弁してくれました。

ここには、自己中心的すぎて他人を考えられない人がたくさんいて、皆、自分と向き合って成長していっていることが見学して分かりました。彼らの幼少期に出来上がったトラウマや内的なキズを、少しずつ改善していくスタッフの力は計り知れません。「ある程度、人生をコントロールできる立場」にいることは、ものすごく幸せなことであって、それを活かせるような何かをやるべきだと深く考えさせられました。

スピーチは通訳合わせて約20分で話し終わり、帰国のためバンガロール空港に向かいました。バンガロール空港からクアラルンプール空港へ、そして成田空港へ到着しました。僕は慣れない飛行機に酔いながらも無事、日本に帰って来ることができたことに安心しました。あっという間の1週間だったが、普通の人では体験できないようなことも含め、ものすごい経験になりました。インドに行く目的である「**スプレーアート**」と「**ボランティア**」は、かなりのレベルで達成されたことを実感しています。

「絶対インド行った方がいいよ!」「もう二度と行かない!」と、インドを旅した人は二極化するようです。当然、僕は前者だし、またインドの独特の空気を吸いたいと思っています。そして、また言葉の通じない子どもたちへアートを見てもらいに行きたいです。

### <ともかくうごこう! 知覚動考>

- ・ 修行僧を経験してみる
- ・ 海外ガイドブック「地球の歩き方」で行きたい国の本を読む
- ・ 言葉が通じない海外に行ってみる
- ・ サバイバル能力を向上させる
- ・ 子どもが魅力的に感じる大人になる
- ・ 欲に支配されるなら逆に支配してしまおう
- ・ 活動のエネルギーを倍増させる
- ・ 食事を根本的に見直す
- ・ 病気にならない健康体を創る
- ・ ジャンクフードとファミレスには行くな
- ・ 調味料に注意せよ

- ・自転車と車は夢を遠のかせる乗り物
- ・朝は金のフルーツを食べろ
- ・日本人は和食が一番
- ・良い気を循環させると場と心身がクリアになる

### <響いた言葉とその解釈>

「すべては陰と陽で構成されている。表裏一体で成り立つ地球の法則には決して逆らえない」

…古書から学んだ言葉。

男がいれば女がいる。太陽があれば月がある。黒があれば白がある。つまり表裏一体で存在していることです。地球の真理を理解して実生活に活かすことは、人生を豊かにすることとリンクすると思います。

## 5. 人生はジェットコースター

### 5-1 地獄の釜の底

インドから帰国してからは、横浜を拠点として活動することにしました。6才から68才まで幅広くスプレーアートのレッスンをしたり、大学でアーティスト独立論を講義したりと、教育の分野でも僕のメッセージを発信できるようにもなりました。

金銭的にも時間的にも自由を感じていた時、僕の人生はこのまま上昇してアーティストとしてなに不自由なく楽しめるものだと信じ込んでいました。「アーティストとして完璧。無敵。成功者」だと天狗のようにすべてを見下ろすようになっていました。そして当時の僕は、それを自覚できなかったのです。アートが自由にできることへの感謝の気持ちを忘れ、謙虚さもなくなっていました。無意識に傲慢な態度や言葉が全面に現れるようになり、必要としてくれる誰かの存在を含めてすべてが当たり前のことだと勘違いしていたのです。理想像に近づくように人間的成長を意識していたことが脳裏から離れ、多くの影の存在があって照らされる光が自分の中心となって舞い上がっていたのでしよう。

そして、好きなものを制限なく買ったり、引っ越ししたり、絵の勉強のためにネパールに行ったりしていた時から、何かが狂い始めました。交際していた彼女とも上手くいかなくなり、引っ越し先の大家さんからはなぜか嫌われ、アートの仕事も停滞していったのです。何もかも悪循環になっていきました。そして、それは何が原因かも分からないまま、負のスパイラルに巻き込まれていったのです。

「これは相当ヤバイ…」

気づけば食パン1つ買うのにも困るほどお金がありませんでした。断食7日間の経験があったから、「最低7日は食べなくても生きていけるな」とは思っていました。しかし、アートの神様はお金以外の部分も奪っていったのです。

それは、人間関係です。彼女からは一方的に別れを告げられ、いつの間にか、僕を応援してくれる人は誰一人身近にいませんでした。アーティストとしての僕を一番応援してくれていたと思っていた彼女との別れは、精神的に大きなダメージを与えました。人間関係の次は、住処です。数十万円を費やしてせっかく引っ越してきたものの、感情

の起伏が激しい大家さんから「出て行きなさい！」となぜか怒鳴られていました。そして毎朝、大家さんの愛犬の鳴き声で起こされ、ロクに睡眠も取れないことから精神的に参っていく自分がいました。

結局、引っ越し代の数十万をドブに捨て、たった1日で物件を決めることになりました。無理やり引っ越すことで精神的なダメージを回避するとともに、一人で静観できる場所を選んだのです。全財産をかき集めて引っ越し代につき込んだ僕の生活レベルは、過去最低となりました。衣食住、すべてがこれまでで最低レベルまで落ちたのです。

掛け布団がなく、寒くて震えながらもなんとか眠りに入る睡眠環境でした。特別物が多いわけではないのですが、前回の大家さんに「物を捨てろ！」と連呼されていました。なので、毛布や掛け布団などはなく、タオルケット2枚重ねて冬を過ごすことは非常に辛いものでした。やはり、浅い眠りでは睡眠の質が落ちてしまうのです。

## 5-2 不幸の度合いは幸福の度合いに比例する

もっとも食費を抑えるには、自炊か食パンだという結論に達します。炊飯ジャーを持っていなかった僕は、空腹を満たすために食パンをスーパーから購入していました。そして、オーブンで1分間焼いただけでマーガリンもジャムも付けずにそのまま頬張っていました。噛まずに飲み込む一瞬の食事は、本当に味気ないものです。噛めば噛むほど消化が良くなってまた空腹になる時間が早くなるので、噛まずに喉を通すことで食費を切り詰めていました。栄養のことや健康の知識を活かすほど食費にお金を当てることができなかつたのです。98円の食パンを買う時ですら、財布を開いて躊躇する自分自身が悲しくなり、何度目に涙を溜めたことでしょうか。

また、誰も自分を応援する人はいなくなって少し広く感じるワンルームが、孤独感を倍増させます。まさに、僕は魂が抜けたような虚脱状態になっていました。寝ても覚めてもボーと天井を見つめる毎日でした。なんとか生きる体と気力は微量ながらありましたが、アートの仕事もすべて止まっていました。脱サラしてスプレーアートを純粋に楽しんでいたあの頃が、非常に懐かしく思えました。

いつまでも無気力な状態を維持しては何も前に進みません。なので、プライドを捨て、畑違いの工事現場で日雇いとして日銭を稼いでいました。固くて重い荷物を運ぶ

肉体労働で、アザやキズを付けながら時間をお金に換える時間を体験しました。トラックで運ばれたものを背負って指示された場所へと運ぶ仕事は、思考能力を一切必要としません。論理的な左脳で仕事をしたり、想像して無から有を創り出すことをずっとやってきた僕にとって、真逆のこの肉体的な仕事に慣れることはありませんでした。それ以上に苦痛だったのは、本当に奴隷のように働いたことです。

### 5-3 社会のゴミをかき分けながら

それは、ヘルメットとマスクと軍手を身に付けて、ベルトコンベアーから流れてくるゴミを手で直接、分別する作業の仕事です。現場ではどこの国か分からない低賃金で雇われている外国人の方から片言の日本語で指示をされ、その通りに動くだけの肉体労働です。ネジや石など両手で掴んでは、指定された数個のポリバケツへと移します。まるで漫画で描かれる奴隷のように朝早くからひたすら同じ分別作業をやり続け、昼食で1時間休憩してから夕方まで仕事場であくせく働く日々でした。昼食は皆、弁当と自動販売機で飲み物を買っていましたが、僕は持参したおにぎり2つと水だけでした。炎天下の下、汗だくで働かねばならない環境だったので何度も自動販売機のボタンを押しそうになりました。しかし、120円の炭酸飲料水を買ってその一瞬は癒やされたとしても、今日の給料から120円が引かれるだけだと言い聞かせて我慢していました。 unnecessary物を仕分ける仕事をする僕の両腕はいつしか、右から左へと単純移動させるだけの**ロボットのアーム**のようになっていました。

「ゴミをつかむための手だったのか？」

誰もが感動する絵を創造することで活躍していたアーティストの両手は、いつの間にか、ひたすらゴミを掴むだけに存在していたのです。「泣きたくても泣けない」とはこのことでした。涙を流すことで誰から手助けしてくれたり、現実が一瞬で変わるわけではないのです。そして、本当に夢をすべて諦め、実家に帰って再就職した方が幸せだとも思いました。寒くも暑くもない場所で、肉体的にも精神的にも苦痛ではないが、それなりの社会的な職に就いて、寝る前の酒に酔って1日を終える日々を送る方が良いのだろうと言い聞かせたこともありました。大学生の時に想像した、「一般的な人生」の方が僕には幸せなのかと思うと同時に、この地獄にいるような状態が悔しくなりました。そして、才能もお金も人脈も何もないただの凡人な自分自身をゴミのように思えてきたのです。ホコリが舞う中、ひたすらゴミの分別する自分は刑務所の囚人のようでした。バスで帰

宅する途中、何度も何度も心が折れそうになりました。

### 「ここで夢を諦めたら、すべてが無意味になる」

脱サラして今までやってきたこと、批判されながらもアーティストとして活躍できたこと、独自のメッセージを伝えて他人の人生にプラスの影響を与えること。今まで築いてきた夢の土台であるこれらを捨てたくはありませんでした。肉体的にも精神的にもダメージを受けても、常に心の中には小さい火がまだ灯っていたのです。

泥を味わおうが、体にムチを打とうが、心をズタズタにされようが、夢を諦めたら僕の人生は終わりだと思いました。足を引きずってでも、前に進むしかありません。だから、夢を叶えるために不必要なプライドはすべて捨てることにしました。とにかく、アーティストとしての復帰に全力を注ぐしか道はなかったのです。そう思っていた時、友人のイベントで一人の女性アーティストに出会いました。彼女は初めて会った僕に気兼ねなく自分の芸術論を話してくれました。僕を自分と似た感性の持ち主だと感じたのかもしれない。

### 「紅茶を飲んだらイメージが膨らんで、こんな絵を描けるようになったの～！」

そう不思議なことを言いながら、描いている作品を見せてくれました。幾何学的模様の絵を見せられ、半信半疑でしたが「紅茶でインスピレーションが湧き出ることが本当なら飲みに行こう」と思いました。お店を紹介してもらおうとその紅茶専門店は大阪にあるらしく、東京に住む僕からすれば交通費だけでも厳しい状態でした。けれど、その紅茶を飲みながら紅茶を淹れるマスターと話すことで、現状が少しでも好転するならその店に行きたいと願いました。

それから数ヶ月後、ホームページから久しぶりに問い合わせがきたのです。なんと内容は三重県の教育委員会からの依頼で、小学校でスプレーアートの授業をしてほしいとのことでした。出張で関西に行くことすら珍しく、その仕事の後には必ず紅茶を飲み到大阪へ行こうと決めたのです。

人生を少しでも好転させるために、心にあるたった一つの小さい火を消さないように一步一步前進していきました。

## <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・どんな状況でも自分だけは味方であること
- ・困難な暗い道に迷っても、己が信じた選択をする
- ・活動資金は切らさない
- ・天狗になるといつかは鼻が折れる
- ・常に応援してくれる人に感謝する
- ・一つの道具がどういう過程で完成されるのかを考える
- ・夢を捨てることは人生を捨てること

## 5-4 キラリと輝く一筋の光明

無事、三重県の小学校で開催されたスプレーアートの授業を終えることができました。そして伊勢神宮での参拝後、初めて紹介された紅茶専門店に一人で行って見たのです。僕はマスターと話したかったのでカウンター席に座りました。これまで紅茶もコーヒーも飲まない僕にとって、カフェすら異空間のように思えました。なので、紅茶の味を楽しむ感覚ではなく、紅茶によってどう自分が変わるのかに興味があったのです。「春摘みと夏摘みどちらですか？」と聞かれても紅茶の知識は皆無なので、「とりあえず、覚醒するやつで」と恥かしながら答えていました。

一杯目の紅茶を飲んでいたら、このお店のマスターが登場していろんな話をしてくれました。マスターはご縁ある方からの紹介でしか、深いアドバイスはしないことを後から知りました。いろいろと悩みがあってドン底から這い上がろうとしていた僕に救いの手を差し伸べるかのように言葉を投げかけてくれたのです。閉店時間を過ぎて夜11時まで隣の席で僕の人生について話し合ってくれたことに感謝しきれません。一つ一つの質問に対して全力で的確な回答を頂けたことに感動して、絶対に現状を打破する決意を持たせてもらいました。自我が強い僕に「自分に素直になること」「自己欲望の我を削ぎ落とすこと」「君が目指す世界は実際に存在すること」など、不思議と心に刺さるアドバイスを多くいただきました。

「マスターの教えの通り、素直に実行していこう！」

そう思いながら、深夜バスで大阪から東京へ戻りました。マスターがオススメの紅茶を

自宅で淹れて飲んでみたり、なるべくオーガニックの食事を摂るようにもしていきまし  
た。そして、精神面での鍛錬も意識し始めました。

具体的には、「アーティストとして活躍して世の中で目立ちたい」という我欲を意識的  
に減らしました。そして、「必要とされれば絵を描いたりメディアなどの表舞台に出て  
いき、すべては自然な流れに任せる」というスタンスに自ら変化させていったのです。  
というのも、マスターに言われたアドバイスの中のこの一言が、一番心にすんなりと入  
っていったからです。

「川名氏が描きたくて描くアートなんてどうでもええねん。誰かに必要とされるアート  
を描くことが必要やねん」

「誰かのために描くアート」を心掛けがけながら生活していると、自然とスプレーア  
ートの仕事依頼が増えていきました。直接お金にならないことでも「必要とされているな  
ら」無償で引き受けたりもしました。そして、感謝されるように全力を注いだことで逆  
に感謝する気持ちが芽生えていきました。そうこうしているうちに、「自分が描きたい」  
ではなく、「他人に望まれるから描く」というスタイルが自然に身に付いていったので  
す。そして、ドン底に落ちてから約半年後、突然、メディアから依頼が来ることになり  
ました。

日本テレビのスタッフから「スプレーアートアーティスト YOSHI」としての出演依頼が  
きた時は、ドン底から這い上がったことを確信しました。金曜の夜のゴールデンタイム  
に全国各地に一斉にテレビ放送されることは、多くの人にスプレーアートを知ってもら  
う最高のチャンスです。日本の文化を発信することがテーマな日本テレビでは、プロデ  
ューサーの要望もあり「富士山」「桜」をモチーフとしたスプレーアート作品を描くこ  
とになりました。日テレのスタジオで大物芸能人の前でスプレーアートを披露しなけれ  
ばならないことはもちろん、5分以内で風景画を描くという時間制限付きでした。

「チャンスの神様は前髪しかない」といいますが、チャンスを一回目で掴まないと二度  
と現れることはないと以前から確信しています。無理難題だとしても、なんとかやりき  
らなくてはいけない状況でした。「頼まれ事は、試され事」なのです。自分に自らプレ  
ッシャーをかけて追い込み、100%を出し切れるようにしないとチャンスを失ってし  
まいます。

テレビ収録の本番では、誰もが知っている芸能人が普通に目の前にいます。パフォー  
ンスが終えるまで、笑顔でこちらを見ているのです。本番後にはゲストたちのスケジュ

ールがあるため、一発勝負となるので絶対にミスすることはできません。このチャンス  
を逃したら、二度とチャンスの神様は来ないかもしれないというプレッシャーを抱えな  
がら、リハーサル通りに完璧に一心不乱に仕上げました。収録が終わり、やりきった後  
は達成感でいっぱいでした。まるで部活動で完全燃焼した高校時代のような感じです。

日テレ収録の後日、今度はフジテレビでの依頼が入りました。僕が芸能人5人にスプレ  
ーアートを教えて、3分でスプレーアート作品を完成させるという企画でした。たった  
15分で彼らに教えて、ぶっつけ本番で描いてもらうという無茶ぶりの依頼でしたが、  
これもせつかくのチャンスなので事前に何度もテクニックを披露して、わかりやすくシ  
ンプルにコツを伝えていきました。なんとか彼らだけで3分間以内にスプレーアート作  
品を完成させることができたの良かったです。

僕はこの上向きになりつつある人生の波に乗って、完全にドン底から這い上がりたい気  
持ちでいっぱいでした。いや、這い上がらなければいけないのです。地獄を存分に味わ  
った経験は、苦しみを活かして成果を出した時点で初めて報われるからです。食パンを  
噛まずに飲み込んでいた時のジリ貧時代には、絶対に戻りたくはありません。底辺から  
上昇気流に乗って行くその過程で、僕は本当に果たすべき使命を深く考えさせられたの  
でした。

地獄のどん底状態にいた僕に光を与えてくださった紅茶専門店のマスターには非常に  
感謝しています。半年ほど一緒に働くことができ、マスターの紅茶への想いや空間と  
の調和、対人関係についてなど直接多くを学ばせていただきました。

### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・初心を忘れてはいけない
- ・教えることで教わる
- ・ドン底でも光は必ずある
- ・喜怒哀楽を俯瞰せよ
- ・浪費と消費を抑え、投資に注ぐ
- ・チャンスの神様の前髪は必ず引っぱれ
- ・天才を超える瞬間は誰にでもある
- ・地位や名誉は夢の過程で手に入る
- ・いつでも100を出せる訓練こそ近道

- ・口角を上げて礼儀礼節を重んじる
- ・情熱は夢に必要な最良のガソリン
- ・ライバルは今の自分

### <響いた言葉とその解釈>

「ほんまのインスピレーションを降ろすには、自分の心も体もピュアにならんとあかんねん」

…紅茶専門店のマスターから教わった言葉。

本質を開花させるためにも、ピュアな米・水・塩を取り入れる必要があることを学びました。心身に本当に良い食事を取るようになって、ZONEに入りやすくなったことは間違いありません。現在では自分であらゆるものを調合して全細胞を活性化させられるようになりました。

## 5-5 お金で買えない財産

「他人からの批判は気にしないこと」

そう昔から言い聞かせているのは、それを真に受けても意味がないからです。そして、目に見える結果を出せば批判は自然と消えて、賞賛が増えていくことを体験しているからです。だからこそ、「結果」にシビアになる必要があります。

例えば、自分でホームページを創ったことがないのに、「誰でも簡単に創れる」なんて言えないわけです。メルマガもブログも動画も、新聞も雑誌もラジオも講演もテレビも本も講演も、料理も陶芸も盆栽も絵も脱サラも起業も、ぜんぶ一緒です。やったこともないことを、ああだこうだ言えるはずがありません。

結果にシビアな人ならば、結果を出すことに成幸している人の意志をリスペクトしています。だから僕はただただ、結果を出すようにやってきたわけです。だからこそ人は、経験で「成長」すると言えます。

「日テレ、テレ朝、フジテレビなど大手のほか多数テレビ局があるけど、日テレが一番質が高い」

こういうことも実際に経験したから言えることであって、実績がない人の「机上の空論」はやはり説得力がないので話にならないわけです。「経験値＝説得力」なので、実現可能レベルの度合いを客観視できないと、ただのクチだけ人間になってしまうのです。

「言うは易し、行うは難し」ということわざの通りです。

世界平和とか人類救済とかビッグマウスを叩きたかったら、難易度が高い課題をクリアする「ビックアクション」が当然必須になります。

「経験と未来を比較してこう行動すれば実現可能性が高い」

少なからずそう思えること以外、僕はクチに出さないようにしています。言動不一致のクチだけ人間は、やはりダサく、魅力が欠けるからです。やらずに言う「非成幸者」にはなりたくはないからです。

だからまずはアクションが大事です。その次に、目に見える結果が大事です。だから今後も、結果を出す経験値を積んでいくわけです。それが「人生＝芸術」となる芸術起業家のやるべきことだからです。

## 6. 芸術で起業するメリットとデメリット

### 6-1 未来を想像して創造していく楽しさ

テクニカルなことは、独自の「アーティスト・マーケティング」を使ってメディアや一般の人たちとつながる導線を作ることでした。メンタルなことは、紅茶専門店のマスターから教わった「礼儀礼節・真善美・感謝」を実践していき、最速で現在の位置まで上がっていきました。

今では森羅万象、すべてに感謝できています。感謝の心を常に持って生活すると、幸福感がこれだけ持続するものなのかとしみじみ思います。スプレーアートがやれる環境、必要としてくれる人とのご縁、最適な道具類、そして、フルパフォーマンスできる世界でたった一人しかいない自分の心身が揃っていることは幸せなことです。どれ一つとして必要不可欠であって、宝物だといえるでしょう。

紆余曲折で歩んできた波乱万丈な僕の人生は、これからも**冒険的で刺激的なアーティストライフ**になるであろうと思います。単調な作業の繰り返しで退屈な日々に比べれば、**ジェットコースターのような人生**です。しかし、今後もし一文無しになろうとも、最悪の環境になろうとも、どんな精神状態になろうとも、常に前進できる自信があります。今の僕には、決して諦めない意思と自分を信じ抜ける**信念とサバイバル能力**が備わっているからです。社会的ステータスや肩書きを含め、車や家など目に見える一般的な財産よりも、**内面に潜む目に見えない精神的な強さが真の財産**だと理解できました。

そして、これから日本を創っていく10～30代の世代に、光り輝く未来を魅せていきたいと強く思うようになりました。その光に魅力を感じ、同じ道を行く人へアドバイスができれば幸いです。肉体的にも精神的にもボロボロになって、脱サラするか否か悩んだ過去の僕のように、「**人生をプラスに変えたい!**」と願っている人がたくさんいると思います。僕は彼らに伝えたいことがあります。それは、「夢を現実にさせるのは、自分の意識次第」だということです。そして、「**冒険を楽しむようにチャレンジし続けよう**」ということです。シンプルなことですがそう簡単ではないことが、人生では価値があると深く思います。

現状を変えたいならば、今すぐ習慣を変えてみましょう。お金と時間の浪費があるなら、未来の自分のために自己投資をしていきましょう。他人を嫉妬したり陰口を叩いたりマイナスな発言をしているなら、理想の未来を語ったり、感謝したりとプラスで楽しい言葉を使いましょう。そして、今、生きていることに感謝しましょう。

その気持ちを持って、「明日、死ぬと決まっていたら何をするか？」という問いに答え、行動に移してみましょう。それが、あなたの果たすべき使命だからです。使命を果たすために突き進もうと決めた瞬間から、人生はおもしろいほど好転していくのです。眠っている勇気と行動と知恵を総動員させて、人生という名の航海を楽しんでいきましょう。

なぜなら、あなたも幸せな人生を送るためにこの地球に、日本に生まれてきたからです。

#### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・過去に縛られずに今を真っ直ぐに生きる
- ・簡単に諦められることならすぐにやめる
- ・新しいことに常にチャレンジしていく
- ・本やセミナーで学んだ知識を行動によって「知恵」に変える
- ・自己投資し続けて自分をレベルアップさせる
- ・尊敬できる人にアドバイスを求める
- ・生涯をかけて才能を発掘する
- ・その才能を発揮して社会に貢献する

#### <響いた言葉とその解釈>

「もし明日死ぬとしたら、今日、何をする？」

…愛読している本の言葉。

人間の肉体はいつか朽ち果てるが、皆、いつも明日があると過信して生きています。しかし、人生は有限なのです。無限にあると思って過ごしていると、急に死が目の前

に来ることになると思います。人生を怠惰で生きることをやめて、一瞬一瞬を意義ある行動に命を使いましょう。

## 6-2 成幸の正体

「自分の価値観を出すほど、お金は入ってきて、人との交流も良くなって、人生を楽しむことができる」

今の僕は、以前に成幸者たちから聞いたことを肌で実感できるようになりました。これらすべて、偶然ではなく必然だということも腑に落ちています。なるべくしてなっていて、起こるべくして起こっているのです。これは決して、運命論や宗教的な話ではなく、人間の脳の90パーセント以上は潜在意識、つまり、眠っている状態だということです。エリートや天才と呼ばれる人でも、脳の数パーセントしか使っていないと言われてい

しかし誰でも脳をフル活用して、未来を明確に想像し、目標を設定して行動すれば、必然的に「理想が現実化」することは間違いありません。その「未来創造能力」を皆、持っているにも関わらず、それを開花させる方法や使い方を教えてくれる人や場所がないのです。だから、ほとんどの人が人生に悩んでいるのではないのでしょうか。「お金が足りない」「時間が足りない」「人脈ない」「モテない」「才能がない」など、ないことにフォーカスしてはいつまでも満ちることはないと思います。そこから脱するためには、年収や身体能力、車や家などの物質や表面的なステータスは関係ないことを理解する必要があります。

## 6-3 学歴・性別・年齢・才能は関係ない

あなたは高学歴で、才能があり、心身ともに充実して人生を楽しんでいるのでしょうか。そういう人は極稀に存在しますが、実際に幸せかどうかは分かりません。

僕はすべてがゼロからスタートしました。金なし人脈なし才能なし、ましてや美大卒業でもありません。ただの脱サラ無名アーティストが、このようなサクセスストーリーを創れたのも理由があります。それは、「生まれ持った才能よりも、後から身につけた能力で人生が変わる」ということを信じていたからです。

僕が企画・監修した日本初のスプレーアート教材 DVD の案内書に「学歴・性別・年齢など一切関係なくスプレーアートを楽しめます」と書いていますが、これは「才能よりもセンスを高めれば、才能を上回ることができる」ことを指しているのです。

「あの人は才能あるよな」「センスがないから絵は描けないよ」など、よく「才能」や「センス」という言葉を使っていると思います。言っている本人は、目に見えない能力を「才能」や「センス」でひとまとまりに片付けているが、才能とセンスはまったく別物なのです。そして、「**才能とセンスの違い**」を知ること、自分の強みの活かし方と夢の叶え方がスムーズに見えていきます。

## 6-4 無名の夢追い人の未来

何かに向かうエネルギーは他人を感動させます。本気で夢をかなえたい人のなかで強いコンプレックスがある人は、自分の内なるマイナス部分を有効活用していることが多いです。しかしながら、自分の見たくない部分というものは、自分の心に聞くしかないわけですが、確実にそれは誰でもあるものです。

僕はある程度、夢をカタチにしてから公開したことに「他人の前で主張することに抵抗があった」人でした。だからこそ、あえてそのやりたくないことをやっていったわけです。その世界に足を踏み入れることは確かに、「恐怖」を感じます。けれども、本当の苦勞なくして、未知なる世界は創れるはずがありません。

無名の夢追い人こそ、どんどん恐怖に打ち勝っていかないと前進できなくなってきました。自分だけを成功させることはそう難しいことではなくなった現在、そう断言できます。「アメ：ムチ＝1：9」で自分という人間をスパルタ教育に育て上げれば、自分が成幸者になる確率は高まるからです。しかし、そんなムチばかりで耐えられる人は圧倒的に少ないですし、何よりも自らイバラの道を進むことは心身に痛みを感じます。

「何が何でも、意地でも実現させる」

そういった強い意志を持つ人は確かに、夢をゴリ押しでかなえられています。それに比べて、怠惰な人間はかなり多いように見受けられます。

「お菓子食べながらテレビ観たいし」

「朝弱いから二度寝したいし」

「ケーキ食べながら漫画読みたいし」

こういう人は言うまでもなく、意地でも実現させる強い意志を持つ人にはかなうはずがありません。けれども、「それでもいい」とも思います。なぜなら、進化も退化も、自分自身で『選択』しているからです。これが会社の上司や親や友人などに『強制』させられているなら脱しないといけないことですが、結局のところ、自分の人生は自分の責任でしかないわけです。

## 6-5 批判は成幸へのバネになる

「メディアに露出したときのデメリットを教えてください！」

夢追い人からこういった質問をされることもあります。

「好き嫌いは別として、何かで目立つ人間は必ず批判される」という法則がある以上、それをまずは受け入れる必要があります。つまり、何かを成した人物は、成していない人にとって自然と羨望の目で見られ、陰口やら不評やらを叩かれるということです。しかしながら、人は「他人に嫌われたくない」がために他人に迎合したり、環境のせいにするのが一般的なので、突出する言動にブレーキがかかってしまうことも事実です。その結果、思ったことを実現できないようにこの世界は精密に構成されています。僕も100%ではないですが、真理を言動へフル活用している人はどれだけいるのでしょうか。

実は、夢でも目標でも、想像したとおりに実現できる人は、その負の言動を出すとあらゆることが下がることを自覚しているため、批判や愚痴などめったに吐かない代わりに、「批判してくれて、ありがとう」と心で思っているわけです。なぜかという、賞賛も批判も所詮、人間の価値観であって、それらは表裏一体。

「何も反応がない」

「無関心」

「存在しているかすら不明」

フィードバックが無である方が、よほど恐怖であると腑に落ちているからです。だから、どんな反応であるにせよ、感謝しかないわけです。むしろ、他人の負の言動さえも吸収して正の生命エネルギーに変換できる人にとっては、予備タンクに自動給油されるくらい心底ありがたいことなのです。受験、脱サラ、アート、起業、路上ライブ、メディア出演、出版、新規事業など……、僕は節目に必ず批判の雨を受けてきました。けれど、それがあって今があるのです。なので、これまでいろんな言動をくれた、友人、知人、親、元同僚、元先輩、ネットの住民、名前を知らない他人、わざわざ偽名まで使ってくる人、夢追い人の方々に心底、感謝しています。なぜなら、「**賞賛も批判も好きになると夢は最加速していく**」という成幸法則が体験できたのですから。

## 7. 自分を革命していく

### 7-1 人生は才能だけで決まらない理由

まず、「才能」とは先天的能力のことを指します。つまり、「生まれ持った能力・資質」になります。そして、「センス」とは後天的能力のことを指します。これは、「意識的に身につけようと思って身についた能力」のことです。宝石に例えると、「才能＝原石」「センス＝研磨」といえるでしょう。

「結局、才能ないとダメなの？」と思われる人もいるかもしれないが安心してください。何かしらの才能・強みである資質を、誰でも必ず持っているからです。「自分の強みなんて知らないし、自覚すらしていない」という人は、この書籍がオススメになります。

一般書籍:「さあ、才能(じぶん)に目覚めよう—あなたの5つの強みを見出し、活かす」

この本では、莫大なデータベースから本質を34個にまとめ、あなたの本質を5個に絞り出すことができます。僕は大学生の時から自己探求をしていたので、いつの間にかこの本を使って本質を5個出していました。目標思考・未来志向・最上思考・指令性・運命思考、この5個が僕の原石となる資質であることが分かりました。

再度一つずつの特徴を読んでいくと、「この資質がなければ自分の夢は叶えられないな」と非常に納得がいくようになりました。成功している人は、確実に自分の資質を深く理解しています。だからこそ、その資質を活かし、社会に影響を与えているというわけです。なので、これを機にあなたも自分の資質となる原石を探してみてくださいはどうか。

実際にやることは、本に書かれてあるコードを公式サイトにアクセスして打ち込み、インターネット上で簡単な質問に答えていくだけです。注意してほしいことは、コードは1冊1コードなので、中古本だとすでにコードが使われている可能性が高いことです。なので、必ずコード付いた新品で購入することを薦めます。

---

<川名慶彦の5つの強み> ※特徴を簡潔に抜粋

- 目標志向→目標を達成するためにとっても合理的に行動できる。仕事は早い。目的に優先順位をつけられる。
- 最上志向→自分の得意分野がわかっていて、日々鍛えていることが多い。やりたいことならば飽きずにどこまでも突き詰めることができる。
- 未来志向→明確なビジョンを持ち、日々成長する。ビジョンを人にも伝播させ、組織を牽引する。常識に囚われず、ビジョンを達成できる。
- 指令性→裏表がないため、真摯に働いていれば信頼され人がついてくる。思ったことを我慢せず口に出すので会議で意思決定やアイデア出しを促進できる。はっきり主張できるので情報発信やディベートが得意。
- 運命思考→前例がない事例であっても、完全な否定材料がなければ「実現できるかもしれない」と信じてプロジェクトを進められる。どんな考えもどんな社員も否定しない。落ち着きがあり頼りがいがある。

-----

以上、この5つが「強み発掘ツール」で出した僕の本質です。上から順番に資質の割合が大きいことも、このシステムの面白いところです。総合的にかなりの的を射ているし、これを読んでいるあなたには本質を見つけてほしいと思っています。

## 7-2 芸術起業で失敗する人

「ミュージシャンとして活躍したい」「プロのダンサーになりたい」「アトリエを持つ画家になりたい」「海外で評価されるアーティストになりたい」など、アーティストの卵はいつも夢を膨らませています。

いつの時代でも、成功したアーティストは非常に魅力的で夢があります。自己表現ができて、それが評価されれば尊敬されるようになり、好きなことを存分にやって生きることが可能になるからです。しかし、残念なことに9割以上のアーティストの卵が夢を諦め、消えていきます。そして、1割以下のアーティストの卵が何かしら結果を出し、成功の道を歩むのです。また、その1割のアーティストの中のごく少数が、国内外で活躍するトップアーティストになっていきます。

なぜでしょうか。なぜ、ほとんどのアーティストが世に出ることもなく消え、ごく少数の人が評価されるのでしょうか。僕はこれを「才能ある人しか成功できないから」と思い込んでいました。確かに、幼い頃から恵まれた環境があって、アーティストとなる能力を磨く教育を受けることができているならば成功する確率はかなり高いでしょう。その反面、趣味でやってきたことを本気で取り組むことによって開花させたり、まったくの未知のジャンルをやって成功するケースもあります。この違いはどこからきているのだろうかと考えました。

僕はこの成功アーティストと失敗アーティストの分岐点を常に念頭に置いて試行錯誤してきた結果、成功確率の高いであろうことを続けていきました。どうすれば思い通りの成果が出しやすいのかを徹底的に分析してみたのです。すると、思考パターンや行動パターンはもちろん、生活習慣や環境に原因があることが分かっていきました。

まずは、確実に失敗アーティストになるタイプから解説していきます。これは避けるべきタイプなので、これを読んでいるあなたは絶対ならないほしいと思います。

### <なっちはいけないタイプ>

- ① 経済依存型ニートタイプ
- ② コミュニティ依存型フリータータイプ
- ③ 異性依存型サラリーマンタイプ
- ④ 自己満足型クリエイタータイプ

それでは上のタイプから1つずつ解説していきます。まず1つめの「経済依存型ニートタイプ」は、お金を稼ぐことをせず、親の経済力に頼って生きながら夢を追うタイプです。このタイプのメリットは、自分の労力をさほど使わずに「衣食住」が整っていることです。しかし、その反面、「別に成果がでなくても生きていられるし、まあいいか」という甘えの気持ちが出てきます。これでは「夢はまた夢」で終わってしまい、いつまでも現実化することなく時間だけが過ぎてしまいます。

次に2つめの「コミュニティ依存型フリータータイプ」は、アルバイト先での仲間と大学のサークルのような感じで仲良くなって依存してしまうタイプのことです。「夢を叶えるための資金稼ぎ」が目的で働くようになったのですが、「仲良くなった友だちと遊ぶ時間」が多くなって依存してしまうと、簡単にそのコミュニティから抜け出せなくな

ります。また、自分と同じ夢追い人が近くにいるなら、キズの舐め合いにならないように注意が必要になっていきます。本気で「夢を叶えるための資金稼ぎ」として時間を費やしているなら、人付き合いはほどほどにして、厳しく割りきって夢を追うことに全力を注ぐことです。

3つめに「異性依存型サラリーマンタイプ」だが、簡潔に言えば「恋愛に没頭して現状維持したい人」がなるタイプです。これは恋人や妻がいるケースが多く、「自分の夢が叶わなくても、恋人（妻）と一緒にいる時間があれば別にいいかなあ」という気持ちが大きくなって、夢を諦めるサラリーマンに当てはまりやすいです。特にサラリーマン・OLは会社に行けば、大抵問題なく固定給をいただけるので、家庭を築きやすい職業だといえます。なので、最愛の人がいて「夢を犠牲にしても、人生を共にしたいなあ」と本気で思えるのならこのタイプで良いと思います。しかし、「この人と一緒にいたせいで、夢を諦めて後悔している」ということにならないように、覚悟を持って決断してほしいです。言い換えれば、アーティストとは真逆のサラリーマンという職業で現状満足しているなら、アーティスト活動は趣味の範囲に留まるということになるでしょう。

4つめに、「自己満足型クリエイタータイプ」だが、これは完全に職人気質の人間ともいえます。何かを創り出すことに価値を見い出して、それのみに没頭できる人に限りません。このタイプは非常に少ないのです。なぜなら、利益うんぬん関係なしに、アーティスト活動によってお金を生まなくても継続できる性質を持っているからです。漆塗師などの田舎で働く職人さんたちはこのタイプに当てはまります。その創造的行為が好きで、最低限食べていければ良いと考えているのです。作品を創り出すことに満足を得るので、あまり他人に認められて高評価を得たり、社会的に成功することは興味がないのが特徴だといえるでしょう。

以上が成功できない4タイプになります。

### 7-3 芸術起業で成功する人

そして、成功アーティストのタイプは次の通りに分けられます。

<目指すべきアーティストタイプ>

- ① エリートアーティストタイプ
- ② 事務所所属型アーティストタイプ
- ③ パトロンアーティストタイプ
- ④ コンビ型アーティストタイプ
- ⑤ 独立起業アーティストタイプ

まずは、「エリートアーティストタイプ」についてです。これは生まれながらにしてアーティスト能力を磨く環境と教育が整って育った人のことを指します。例えば、家にグランドピアノがあって親が音楽家であれば、その近くで育った子どもは自然と音楽を覚えるでしょう。家系やその人の徳に関係するため、先天的な運でしかないといえます。

次に2つめの「事務所所属型アーティストタイプ」ですが、資金稼ぎとして会社勤めやアルバイトをやりながらアーティスト活動を続けていきます。その結果、事務所に所属できて売れるアーティストになることです。例えば、路上で歌っていて音楽事務所にスカウトされて、事務所に売りだしてもらって成功する流れになりますが、もちろん成功するのは一握りだということは言うまでもありません。これを目指すアーティストがほとんどですが、どこでどんな活動をしているかによって事務所関係の人と出会うかは運次第となります。なので、他のアーティストと比べて実力差をつけないと、「あのアーティストは成功する見込みがある」と目をつけられないわけです。正直なところ、コントロールしづらい活動であって成功確率は低いといえます。

3つめは、「パトロンアーティストタイプ」です。パトロンとは、経済的支援者という意味だが、これは諸刃の剣のようなものです。なぜかという、いろんな引き換え条件を提案してくるからです。例えば、アーティスト活動資金を完全に負担してもらう代わりに「定期的に食事に付き合うこと」「海外と一緒に連れていくこと」「肉体関係を持つこと」など、パトロンによって様々なことを要求してきます。その要求を承認する代わりに経済的にフリーになり、アーティストに専念するのがこのタイプで成功する流れになるのです。僕もパトロンをしてくれる人に出会ったのですが、やはり厳しい要求を出してくるので断りました。「成功してやる！」と意気込んでアーティスト活動をしている人ほど、パトロンと出会った時はかなり悩むことになるだろうと思います。実は、誰でも知っている有名な芸能人でも、このようにパトロンによって売れたケースも少なくありません。その要求と資金支援のバランスを見極めることが難しいので僕はオススメしていません。

4つめは、「コンビ型アーティストタイプ」になります。これは2人以上のアーティストがチームを組んで、それをユニットとして活動して売っていくタイプです。例えば、

ダンサーと歌手がチームを組むと、「歌が上手くてダンスでもパフォーマンスができるアーティスト集団」として売り出すことも可能になるということです。チームを組み、このタイプで成功するためのカギは、どれだけメンバーと感覚が合うかどうかにかかっています。お互いの金銭的感覚・時間的感覚・未来のイメージ像など、「昔ながらの親友のようにお互い意見をズバズバ言える」関係であれば、上手く成功できるでしょう。

## 7-4 人生という会社の社長になる

そして最後は、「独立起業アーティストタイプ」です。僕はこれに当てはまり、独自のノウハウを積み上げてきた結果、「このタイプが一番堅実で、成功しやすい」と思います。なので、これから成功アーティストを目指す人には一番オススメの方法になります。これは自分で何かの事業を起こして、資金面を自分の力である程度まで稼げるようにすることにもつながります。そして同時にアーティスト活動をやっていきます。いわば、「ビジネス活動」と「アーティスト活動」の両輪を回していく特殊なタイプです。

なぜこのタイプが成功しやすいのかというと、成功するための3つ能力がバランスよく高められるからです。その3つの能力とは、「アーティストスキル」「ビジネススキル」「マネジメントスキル」になります。特に、マネジメント（自己管理）をマネージャーなど他人に任すのではなく、自分でやることでモチベーション管理ができるようになります。「芸能界はマネージャーが付いて、スケジュール管理をしてくれて楽だ」と思う人も多いと思いますが、「マネージャーをお金で雇っている」という表現が正しいのが現実です。

なぜ、事務所に所属せず独立することをオススメしているのかというと、収入の幅が全然違うからです。何の知識もなく事務所関係のスタッフにスカウトされて契約したとしても、事務所側に利益が出るようなシステムにしているのがほとんどだといえます。もし所属するアーティストが売れても、マージン手数料として40～60%前後は確実に事務所側に持っていかれるようになります。だから事務所は多くの「売れそうなアーティスト」を抱え込んで、マネジメントするわけです。それは事務所側のリスクを低くすることにつながります。そういったビジネス上の交渉や業界の目上の人とのコミュニケーションの時に、上手くこちら側もメリットがあるようにしていかないと成功を逃してしまうのです。一つだけ事務所に所属するメリットを挙げるとすれば、事務所名が有名であるほどプロフィールの看板になることでしょう。もちろん実力がなければ無意味に

なります。

以上、これらを考えると、「アーティストスキル」「ビジネススキル」「マネジメントスキル」3つの能力を身につけた独立したアーティストになることがベストになるわけです。「アーティストとしての自分」「マネージャーとしての自分」「ビジネスマンとしての自分」を、一人の人間に融合させてバランスの良いアーティストを自分で創っていくのです。これがもっとも成功確率の高い独立起業アーティストタイプといえます。このタイプがもっともバランスが良く、自分の努力で成果を出せるアーティスト像なので、ぜひ理解を深めてほしいと思います。

## 7-5 夢のクリア化

「将来の自分をリアルにイメージできていますか？」

多くの人が、「売りたい」「テレビに出たい」「お金持ちになりたい」など、漠然としたビジョンを持って生活しているがどれくらい現実化しているのでしょうか。おそらく9割の人は、現実になっていないだろうと思います。なぜなら、ビジョンを明確にすればするほど、理想は現実になるからです。

「〇〇が出演している〇〇番組に出たい」「雑誌の特集ページに載るようになりたい」「月収〇〇万円になりたい」など、数字や内容が具体的であればあるほど、そのビジョンは目の前に降りてくるようになります。想像した後に行動することで創造できるわけです。なので、このビジョン自体がしっかりしていないと、行動も曖昧になってしまいます。

「紙に書きだして明確化する」と方法は普遍的に昔から存在していますが、実際にやらない人が多いのです。あなたは実際に紙に書いて、客観的にそれを見てほしいと思います。その紙を毎日眺めることに慣れてきたら、頭の中で言い聞かせるようにします。これが現実となる行動をステップ化して実践していけば、叶わない夢はないといえるでしょう。ビジョンを明確にした後、**アクションも明確に具体化**するほど、あっという間に現実化していることに気づくはずですよ。

## 8. 芸術起業を加速させる成幸マインド

### 8-1 投資脳を持つ

お金や時間は使い方によって、どんなことにも変化します。どんなことに一番お金と時間を使っているでしょうか。少し考えてみましょう。成功できる人とそうでない人の違いは、この2つの使い方が圧倒的に違うのです。それを理解して実生活に落としこむことで、爆発的な結果を生むことも可能になってきます。

お金・時間は、「浪費」「消費」「投資」の3パターン使い方があります。1つめの「浪費」は、一番生産性がなくムダだと思えることです。例えば、「自販機でコーヒーを買おうとしていたのにお茶を買ってしまって二度買いたした120円」とか、「電車で眠って降りる駅を過ぎてUターンした30分」とかです。これは分かりやすい例だが、意識していれば、浪費を防ぐことは可能になるのでぜひ振り返ってみましょう。

2つめの「消費」は、食費や家賃、睡眠時間、生活費など、生きる上で必要なことに使うお金・時間のことです。これは「節約」が可能で、やり方次第では「貯蓄」や「投資」に変えることができます。

最後に「投資」についてですが、これが一番重要なことになります。投資といっても、株式投資やFX投資などお金の運用方法ではなく、ここではあくまで「自己投資」を指しています。本やDVDやCDの教材、セミナーなど、他人の知識・経験を買うことが、簡単な自己投資になります。本屋で興味のある本を1300円で買う行為も、その本の著者から知識や情報を購入しているのです。書籍は「低コスト高リターン」が誰でも可能な自己投資法だといえます。また、言い換えると、「他人の人生の一部をお金で買う」ことで、自分の人生に取り入れて活かすことができるのです。自分の寿命は増やせないが、他人の経験を知識として吸収できるなら安い授業料だろうと僕は考えています。

成功する人はこの自己投資の額がかなり大きいので、多くの人の思考や経験をインプットする量も多いわけです。しかし、本などの教材は著者の思考を文章化したものなので、一般的に理解できるレベルで作られています。より深く詳しい情報を得るには、その著者に実際にお会いしたり、電話や録音した音声から学ぶことができます。対面で会うとコンサルティング料が発生する場合もあるが、実際に1対1で自分だけに時間を使ってくれるので希少性が高く、お金に代えられない価値ある自己投資になるでしょう。

現在の僕は年間500万円以上のお金を自己投資に使って知識や経験に変換させています。お金がない10代の頃は、飲み代や食費を削って節約してから自己投資していたから、意識次第で誰でもできるだろうと思います。影での努力は人に言いたくない成功者もいるので、あまり知らないかと思いますが「これだけやって結果が出ないわけがない！」と思えるくらい成功者は自己投資をしているのです。

以下、3つをまとめた結論になります。浪費・消費にお金や時間を使うならば、後々リターンがくる投資に費やしていきましょう。その量と質が高ければ高いほど、より多くの良いリターンが無駄なく入ってくることは間違いありません。こればかりは実体験しないと完全に理解できないと思います。なので、まったく投資をしていない場合は、少しずつでもいいので意識してやってみることをオススメします。

## 8-2 右脳と左脳を融合させる

「クリエイティブ」「イメージ」など感性は**右脳**が、「コミュニケーション」「マーケティング」など論理は**左脳**が司っています。アーティストは基本的に右脳型、つまり感性が豊かであって、創造するスキルを持っています。また、ビジネスマンは左脳型であって、コミュニケーション能力が高く、物を売るスキルを持っています。

僕はアーティストになる前はサラリーマンだったので、「アーティストこそ、ビジネススキルが必要だ！」と直感的に思いました。なぜなら、アーティストは作品を創造すれば売れると思いつく人が多く、それを人に伝える段階に行かないと売れるアーティストにはなれないからです。よって、最速で無名アーティストが有名アーティストになるためには、アーティストの右脳とビジネスマンの左脳を融合させることが必要不可欠になります。

「営業とか企画とかやったことないし、ビジネススキルなんてないです」

「周りに自営業やっている人がいません」

「もともと向いていません」

などと言う人もいます。しかし、本屋に行けば相当数のビジネス本があるので、ビジネススキルは誰でも学ぶことができますし、公平なスキルだと僕は思います。つまり、「アーティストだからこそビジネスについて学ぶ必要がある」ということです。

### 8-3 先駆者のみ受けられる最大恩恵

ビジネス上では、同業者がいない市場へ参入した者を「先行者」と呼びます。先行者は、その後続く誰よりも大きなリスクを背負って道を進んでいくのです。先に歩む者がいるならば、「では自分も続こう」と他人が渡った橋を安心して渡ることができます。

例えば、「プラスチック製の扇子」が出回っていない時、同業者はゼロになります。しかし、「和紙ではなく、プラスチック製にした方が壊れにくく、海外でも売れるかもしれない」と思ってビジネス展開した先行者がいます。その先行者の成果を見て、「そうか、それは私がやっても売れるな」と思った2番手、3番手が続々とその市場へ参入してくるわけです。

茶葉を煎じて飲むことに例えて「二番煎じ」「三番煎じ」とも言いますが、先行者に続く者は確かに甘い蜜を吸えるようになります。「先行者」が背負ったハイリスクはないし、慎重に真似していけば大きな失敗はしないからです。「それでは、先行者が不利で二番煎じが一番得をするのでは？」と思われるかもしれません。大手チェーン店のよう  
に他店でヒットしたものを真似して売り出せば、研究費を抑えられて高確率で利益を叩き出せることは間違いありません。そう考えると、二番煎じは「おいしい」と言えるでしょう。

しかし、先行者だけが得する「先行者利益」というものも存在するのです。それはその市場の標準値を設定できるという特権を与えられるからです。価格であったり、品質であったり、広告の打ち出し方であったりと、市場のベースを決めることができるのは先行者だけになります。実際の利益についても相当下手を打たない限り、二番煎じ以下に劣ることはないのです。そして、その市場の開拓者となる最大の特権は、他の市場から見れば「無から有を生んだ成功者」だと映ることです。先行者はその市場で生きている限り、ヒーローであり先駆者となります。

僕がスプレーアートを真剣にやろうと思った理由の一つに、「日本にはないアートジャ

「ンル」だったことが挙げられます。つまり、「市場がない」状態だったということです。スプレーアートを知った時はビジネスにつながるものだと考えていませんでした。ただ僕にとって希望の光であったスプレーアートを楽しむことだけだったのですが、「アーティスト」としてやっていくためにはビジネスも必要だと考えるようになったのです。

そして僕は、「スプレーアート」という未知の分野の先行者になろうと意図してなることができました。インターネットとマーケティング、コピーライティングとブランディングのスキルをフルに活用することによって、それを実現することになったのです。幼少期の夢が叶うことにもつながったことを嬉しく思います。僕がスプレーアートをインターネットやテレビなどのメディア媒体で拡散することで、不特定多数に認知されるようにもなりました。そして、少なくとも600名以上はスプレーアートを実際に体験しています。つまり、先駆者が雑誌やテレビや本、インターネットなどのメディア媒体を通して露出することで、それを知った人は真似できるという風潮があるわけです。ようするに、先駆者からすれば後続者は自分の『真似』の量産であり、自分が見本となるのです。

## 8-4 邪道か正道か

「納豆ダイエットがテレビで話題になれば、主婦たちは急いでスーパーへ納豆を買いあさりに行く」

「ヨガが美容健康にいい健康法だと世の中に広まれば、OLの職場の近くでヨガ教室が開かれる」

「スマートフォンのアプリがランキングに上がれば、自分もダウンロードしようと購買意欲が生まれる」

道無き道に、道を創る者がいて、その道を進む者が続くわけです。そして、どんな分野でも先駆者と後続者が1：9の割合で出現していきます。つまりは、誰かと同じことをやることで「仲間はずれになりたくない」という心理的不安を解消したい欲を人間は持っているからです。

小さな半紙に書く書道家にしたら、壁や大きな紙にパフォーマンスとして書く「書道ガ

ール」なぞ邪道だと考えるわけですが、これも先駆者が火を付ければ誰かが後を追ってくるのです。こうして市場（マーケット）ができ上がることで、後続者はつまづかないで走ることができるわけです。

しかしながら、市場を開拓する先駆者は「破壊と創造が自由にできる」「新しいルールを創ることができる」「未知なるものを発見できる」「開拓中にレベルアップできる」などたくさんのメリットがあります。

例えば、缶のスプレーで絵を描く「スプレーアート」ならば「壁や天井に描く」「車に直接描く」「夜光塗料で描く」「4K 高画質デジタルと融合する」「海外のスプレー缶を使う」これらを試行錯誤の末、可能にさせてきました。そしてこれらも当然、テレビやインターネットなどの媒体で発信するたびに真似されることになるのです。マーケティング思考がない人、または右脳思考の人は真似されることを極端に嫌いますが、認知度を上げるために様々なマーケティングを活用する開拓者にとっては、それをもプラスになるように構築していくことができます。

そして先駆者の最大のメリットは、過程が誰にも絶対見られないという点にあります。つまり、どのようにその道を開拓しているか直接教えられない限り、知りようがないということです。逆にデメリットは、いくら念入りに仮定しても実践しないと机上の空論になるという点です。ゴールが見えないまま走るランナーは自分の前にランナーがいないため、常に不安が付きまといまいます。

「この道で本当にいいのか？」

「誰かサポートしてくれる人はいないのか？」

「いつ後ろから追ってくるのだろうか？」

まるで、光のない洞窟の中をさまよっている感じです。当然、そのような場所は、積極的に進む人がいません。すると、そこでのトップランナーは精神的に強くないと続けられないわけです。並々ならぬ覚悟が必要だと言えるでしょう。だからこそ、道無き道を進んだトップランナーは、後続者からすると「ヒーロー」として見られるわけです。道を見据えて自分を教育していけば、唯一無二のヒーローになれる道が、芸術起業に存在するのです。

アーティストとして確立した僕の姿を見て、同じ道を辿ろうと後ろを着いてくる二番煎

じ三番煎じも誕生していったことも事実です。しかし、彼らは表面上しか真似することができず、いくら時間を費やしたところで僕のポジションに辿り着くことは不可能です。それは、表面的な外面ではなく、精神性や人間的魅力などの内面に相違があるからだといえます。本格的に弟子となり、僕と朝から晩まで時間を共有したことがあるならともかく、生活習慣から日々の思考パターンや行動パターンまで模倣しないと、彼らが望む成功は手にできないことは明白です。

## 8-5 想念の強さが道を切り拓く

所詮、絵画技法の細かなテクニックなど氷山の一角に過ぎません。目に見える一割の一角よりも、目に見えない海中に眠る残りの九割の部分の方が格段に重要になっているのです。それが理解できないと、「なぜ、いつまで経っても成功できないのだろう？」と負のスパイラルに陥ってしまいます。

僕と彼らとの違いは、素人には分からない圧倒的な「想念」の違いにあるともいえます。それは、スプレーアートに対する想いから始まり、独自の思考と日々の習慣から生まれるアートとビジネスを融合させた人生哲学にほかなりません。それが絵という物質に伝わり、鑑賞者の人生を変えていくように創造しています。例えば、登校拒否だった女子高生が登校するように、うつ病患者が社会復帰するように、年齢問わず無意識に人生を好転させることが可能となるのです。弟子入りしてくる人や毎月レッスンに来る熱心な生徒には、この想念の重要性について教えていますが、我流で表面上真似るだけの二番煎じ以下が想念のあるアートを生み出せるはずもありません。

アーティスト能力を最大限に高め、いつどんな時でもフルパフォーマンスできる状態を準備している人は、アーティストの業界の中でも稀です。スプレーアートという狭い世界では僕以外いません。それは、市場を開拓した者だけが得られる先行者の特権も絡んできますし、僕が異常なくらいストイックに鍛錬できる人間だからです。そして、市場の創造主でもある先行者は、誰も予想もしていないことも創造できます。

メディアへ進出するシステム構築も可能です。テレビはもちろんメディアに出演するためには、芸能界に入ることは必須だと言えます。しかし、芸能事務所に所属することが常識だと思われがちですが、必ずしも所属が必要だとは思えなかったのです。なぜなら、マネージャーや営業や交渉など事務所が大抵やる仕事は、アーティストである自分でも

できると確信していたからです。

現在に至るまで芸能事務所からスカウトされたことはありますが、僕は「芸能事務所にはあえて所属しない」ことを貫き通しています。不可能だと言われた「無名の一般人が芸能事務所を通さずにメディア進出する」ことを証明したかったですし、それが「凡人が天才を一気に追い抜かす方法」でもあるからです。

凡人が最短で天才を超え、非凡な結果を出すためには、先行者利益を獲得して独自の世界を創造し続けることで可能になることは間違いありません。

## 9. 芸術起業の必須スキル

### 9-1 自己管理は人生の土台

アーティストスキルとビジネススキルを抑えた上に、3つめのマネジメントスキルが必要になってきます。マネジメントスキルとは自己管理能力のことで、モチベーションを高めたり、ストレスを軽減させたり、病気にならない健康体を維持したりするスキルを指します。

芸能人など事務所に所属する人は、マネジメントをやってくれるマネージャーが付いていますが、お金を払って管理してもらいよりも自己管理して結果を出せるようになった方が絶対に良いと僕は思います。正直、そこまで自己管理は難しくないですし、売れるアーティストになってバンバン仕事が舞い込んできたり、自分だけではさばけない仕事のできた時に雇えばいい話です。

そうなるためにも最低限、フルパフォーマンスできる心身は維持しておきたいでしょう。そのために、ジャンクフードやコンビニ食品は避けて、できるだけオーガニックの食事を摂って健康体を創ることが近道となります。下記が現在の僕が意識している最低限の食生活です。

- ・牛乳を飲むなら豆乳を飲む
- ・ジャンクフードとコンビニ食品は食べない
- ・フルーツを意識的に摂取する
- ・肉より魚や野菜を選ぶ
- ・無農薬栽培米を炊く
- ・栄養ドリンクは飲まない
- ・コーヒーよりは紅茶を飲む
- ・タバコの煙がある場所に行かない
- ・アルコールは付き合い程度にする
- ・よく噛んでから飲み込む
- ・感謝して食べる

<ともかくうごこう！知覚動考>

- ・ひらめきを見える化せよ
- ・昼はアップテンポ、夜はヒーリングの音楽を聞け
- ・仕事道具を愛せ
- ・バイブルとなる本は宝物
- ・「とりあえずいる」モノを捨てろ
- ・知識は知恵にすぐ変えろ
- ・特殊能力は皆持っている

## 9-2 3つのマネジメントスキル

アーティストが必要なマネジメントは3つあります。1つめは、マネーマネジメントです。これはお金・時間の使い方でも説明したように、「投資」になるようなお金の管理術のことを指します。財布の使い方一つにしても、成幸者には特有の共通点があるのです。

例えば、折りたたみ式の財布ではなく、お札がまっすぐにしまえる長財布を使っていることです。エネルギーが入っているお金を丁寧に扱う人ほど、お金に好かれてさらにお金を呼んできてくれます。こうした考え方は直接お金の支払いを見なくても、いろんな本に載っているので興味があれば読んでみてほしいと思います。あと、僕がやっていることは、お札の向きを一方向に揃えることです。お札の裏表、人物を同じ向きで重ねます。そして、一番奥が一万円札にすることです。つまり、千円札・五千円札・一万円札の順に向きを揃えて長財布に入れておくことで、お金にとって家である財布でくつろいでもらうようにするのです。

2つめは、マインドマネジメントです。これは心の管理術で、モチベーションを下げないように上向きに保つことや、自分軸がブレないようにするマネジメント能力を指します。

例えば、雨の日に外に出なければいけない時も、「雨、嫌だなー」と思うのではなく、「交通機関が止まる可能性があるから、読みたかった本を一冊持って行こう」と思考を転換することです。そうすることで、同じ現象でも、未来の自分につながる行動ができるのです。現に、電車が止まったりすることはよくありますがこのような行動をしていれば、「本を読める時間をありがとう」と天候に感謝できることにもなります。これは

日々、自分の意識を客観視する癖を付けることが訓練となるので、どんな状況でどんな心境になるか、どんな言葉でモチベーションが上がり、どんな言葉でモチベーションが下がる人間なのかを知るところからスタートすると良いと思います。

3つめは、ヘルスマネジメントです。これは風邪や病気にならないための健康管理術で、食事や睡眠を含め、自分で健康体を作っていくマネジメント能力を指します。

例えば、自分の頭に合った枕を使うことや、安眠するために音楽をかけながら眠りにつくことなどです。僕はヒーリングミュージックをBGMとして睡眠をとったり、ヴァイオリンや好きなBGMを聞きながらモチベーションを上げたりしています。

食事は基本、オーガニックの食材しか口にしません。ジャンクフードやコンビニエンスストア、ファミリーレストラン、カレーや牛丼や居酒屋などの大手チェーン店では一切食べません。無農薬栽培の野菜や米の味を知り、「食こそが人生の土台となる」ことを深く理解すると、自分の体内に入れる食べ物の重要性が分かるようになります。しかし、最初から真の健康体を創る知識と環境があったわけではありません。

「人間の能力を最大限に発揮できるようにするためにはどうすればいいのか？」

この問いを繰り返すことで、辿り着いた実践方法の一つにすぎないのです。特に、アーティストの能力を開花させるためには、心身が鈍る食べ物を食してはまず無理な話です。心身をクリアに近づける日々の心掛けがあつてこそ、いざ本番という時に100%の実力を発揮できるようになるのです。タバコを吸うことも副流煙がある環境にいることも、もちろん心身にとっては良くありません。何よりも血液の流れが遅くなり、肌や髪がボロボロになることは言うまでもないでしょう。以上の具体的な方法以外にもたくさん実践方法はあるので、まずはすぐできることから始めてみましょう。

### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・プライドと我欲はいらない
- ・天才は一流、凡人は超一流
- ・身震いするほどのドキドキに従え
- ・他人の目を気にするより自分の心を見よ
- ・本質の声に耳を澄ませろ
- ・出過ぎた杭は打たれない

- ・ 静と動のギャップを激しくしろ
- ・ 見栄は夢を視えなくする
- ・ 神を感じる瞬間を持つ

### 9-3 芸術起業の心構え

言うまでもありませんが、「覚悟を持つ」という気持ちは絶対に必要になります。なぜならアーティストは、事務所に所属する有名アーティストを除いて、誰かに雇われているわけではないので固定給はないからです。そして、ただ闇雲に動いては収入を得られないのがアーティストという職業ですし、他のアーティストがやらないことをできるアーティストが莫大な収入を得ることも事実であります。

長期的にビジョンを明確にして、覚悟を持つこと、そして、親・友人など含め、他人からの否定的な言葉を真に受けないことも大切だと思います。これらが非常に大事な心構えになるのです。というのも、人は少なからず周囲の環境に順応する性質を持つからです。周りに夢を叶えている人がいれば、あなたも夢は叶いやすくなるということです。

例えば、借金をしている友人が多ければ、現時点では借金をしていなくてもあなたも借金をする可能性が高いということにもなります。つまり、「朱に交われれば赤くなる」ことは、経済面・精神面・思想面までもまったく同じことが言えるわけです。余談ですがあなたの夢を否定する人は、心の奥では尊敬・嫉妬の念を抱いています。羨ましい気持ちをさらけ出せないでいるのです。彼らはあなたが結果を出した瞬間、必ず認めるようになります。なので、最初は理解されなくても結果を見せていけば大きく褒め称えられることでしょう。

#### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・ 夢を叶えたいならばテレビは録画してから観る
- ・ 先に価値を出せば後からお金も人もついてくる
- ・ 睡眠は明日フル活動するためのバッテリー補充
- ・ 成功はルーティーンワークから生まれる
- ・ 一流の成功者に共通点する真善美を身に付けろ

- ・情報のアンテナを常に張れ
- ・どんなに批判の雨を受けても自分だけは味方であること

## 9-4 芸術起業の戦略

大学やセミナーでは、芸術起業論【アーティスト・マーケティング】という科目で数字や具体的な実践方法も含め、無名アーティストがメディア出演して活躍できるアーティストになる方法を公開しています。メインとなる10項目は下記の通りです。

### 0, 概要

- 1, 参入ジャンルとマッチング (才能の発掘と開花)
- 2, ITブランディング (HP、Blog、SNS etc の活用方法)
- 3, コピーライティング (心を動かす文章の書き方)
- 4, スパイラルマーケティング (協力者や観客を呼ぶ方法)
- 5, 師弟制度構築 (弟子の増やし方と伝授)
- 6, メディア出演 (TV・新聞・雑誌への掲載方法)
- 7, マネジメント (心・身体・お金の管理術)
- 8, マインドセット (折れない心の創り方)
- 9, 気のコントロール (情熱を倍増させる上昇術)
- 10, 神降ろし (神がかり的な結果を最速で出す秘訣)

これらすべてが、独自で編み出したアーティスト独立成功ノウハウ「アーティスト・マーケティング」の全体像となります。アートとビジネスを融合させた芸術起業論の講義は日本では皆無なので、僕の講義を受講した大学生やアーティストの卵はそれを知らない人と比べてかなり差が出てくると思います。「アーティスト・マーケティング」を事細かに書いていくと相当なボリュームになるので簡潔に説明していきます。

### <アーティスト・マーケティング項目解説>

#### 1, 参入ジャンルとマッチング (才能の発掘と開花)

まず、眠っている才能を発掘します。あなたにはどんな性質で、どんな能力があるのか、

あらゆるツールで特性を見極めることができます。人は生まれた瞬間、その人だけに与えられた能力の種（先天の気）が与えられるからです。それを客観的に視ることで、種を掘り起こして発芽させるようにします。そして、それに合ったライフワークを見つけ、社会的な職業と結び付けられるジャンルを決めるのです。発芽させた後は、2項以降のテーマで養分と光合成を繰り返し、開花させていくことが可能です。

## 2, ITブランディング (HP、Blog、SNS etc の活用方法)

サイトやSNSの有効活用法を学びます。WEBブランディングスキルを使い、インターネット上であなたの価値を自動向上させることができます。24時間365日ずっと休まずにアーティストのために動いてくれるインターネットを駆使するために、誰でも使えるWEBのスキルやITの概念を理解することから始まります。このスキルを日々向上させていくことで、アーティストとしてのブランドが出来上がり、自由にメッセージを世の中に発信することができるでしょう。メディアへとつながるツールにもなるので、早い段階でこのスキルでブランディングしていくことは時間を参入障壁とさせることができます。つまり、遅く始めるほど、早く始めた人に追い付くにはそれなりに時間が必要になってくるわけです。

## 3, コピーライティング (心を動かす文章の書き方)

ブログやプロフィールなど、インパクトのある文章を描くテクニックを学びます。義務教育を含め、学校で教えてもらった国語の文章ではなく、人間行動学に基づいた心理的影響がある文章を書けるようになります。すると、独自のメッセージが伝わりやすくなるほか、多くの人々がどんな文章に影響されて動かされているかも客観的に視ることができるようになるのです。つまり、世の中の情報発信の意図が読み取れるようになるため、テクニックで行動を左右されることがなくなります。

## 4, スパイラルマーケティング (協力者や観客を呼ぶ方法)

アーティスト独立起業で成功するためには、協力してくれる人が必要不可欠です。ここでは協力者となる人が直接、あなたへ連絡してくるようになる方法を学びます。プラスのスパイラルで向上させる具体的な方法と心構えがあれば、無償で応援してくれる人が自動的に集まるようになります。影響力を持つアーティストは、多くの協力者が影で支

えてくれているから光を放つことができるのです。

## 5, 師弟制度構築（弟子の増やし方と伝授）

アーティストの成功とは、ヒエラルキーの頂点に立つと言っても過言ではありません。それにはお弟子さんやファンの獲得が必要になってきます。誰も実現させたことのない師弟制度を構築させて、独自の思想を伝達することによって、より良い師弟関係ができあがります。ここでの師弟関係はアーティストの範囲を超え、人生全般にまで広がっていきます。年齢・性別・学歴など表面的なステータスは一切関係なくなります。これを構築すると、「先生」や「師匠」と呼ばれるようになっていくのです。

## 6, メディア出演（TV・新聞・雑誌への掲載方法）

メディア媒体からの発信は、最短最速で成功させる強力なツールともいえます。特にテレビは絶大な威力があり、不特定多数に一瞬で認知させることができます。しかし、「30秒のCMで300万円」というテレビ広告を鵜呑みにしては、莫大な資金がないと手が出せるはずがありません。それら業界の常識を踏まえた上で、無名でも雑誌や新聞、サイトやテレビに無料または報酬付きで出演する方法を学びます。

## 7, マネジメント（心・身体・お金の管理術）

ここでは、自らが人生のマネージャー（管理者）となる方法を学びます。具体的にマインド、ヘルス、マネーの3つのマネジメントの柱を構築することで、100%フルパフォーマンスできる状態を保つのです。心と体はリンクしているため、どちらかが大きく傾けばどちらも崩れてしまいます。そうならないよう心身共にバランスを整えて、紙の生き物であるお金も管理していく必要があるのです。お金はエネルギーが宿っているので、稼ぎ方と使い方と貯め方を正しい循環方法で取り扱わないと上手く回らないようになっています。その仕組みの概念と具体的な方法を学ぶことによって、日々の日常で、自分というアーティストを管理するマネージャーの役も買います。一流のアーティストたちはこれを維持するために、日々のルーティーンワークを大切にしていることも事実です。

## 8, マインドセット (折れない心の創り方)

アーティストとは社会的に見れば、少数派の人種に入ります。目に見える結果が出るまでは「出る杭は打たれる」の風習がアーティストの卵を襲います。打たれても耐えることができる心、決して折れない心が必要不可欠になるため、最強のマインドセットを学びます。鋼鉄の心になるように磨いていけば、「出過ぎた杭は打たれない」ことを証明できるようになります。そうなれば、誰も批判してくる人は自然といなくなるでしょう。くだらない批判をまともに相手にする時間ほど、アーティストの卵にとって無駄な時間はないのです。

## 9, 気のコントロール (情熱を倍増させる上昇術)

人間は地球上に存在する限り、地球に逆らうことはできません。自然に幸せに成功するための心構えと実践方法を学び、夢への原動力を倍増させていきます。気のコントロールをすることで強靱な身体と精神を養うのです。生命エネルギーの存在を確信することはもちろん、それを体内で循環させることが重要になります。すると、細胞の老化スピードは遅くなり、外見は若々しくなっていくことでしょう。これは、アーティストとしての寿命を延ばすというメリットにもなっているので、日々意識して実践していったほうがいいと思います。

## 10, 神降ろし (神がかり的な結果を最速で出す秘訣)

自分でも驚くほど無意識であり得ない成果が出る時があります。それを「神が降りた」と表現しますが、それを意識的に出す方法を学びます。超一流のアーティストたちは、まるで大昔の仙人にでもなったかのような驚愕する体験をしているのです。成功アーティストの彼らは当然、これらを公にすることはできません。なぜなら、枠を超えて能力をリミットいっぱい最活性させるライバルを増やしたくないからです。神がかり的な能力を活せる概念とそれを実現させる具体的な実践方法も学ぶことによって、自分だけの道を最速で走り抜けます。アーティストの神様が本当にいるならば、味方してもらう方が良いのは言うまでもないでしょう。

## 9-5 芸術起業の成幸方程式

そして、「アーティスト・マーケティング」の成功方程式は、下記の通りになります。

### 【ブランディング×行動×マーケティング×情熱=成功】

これら必要な4つの要素を自動車に例えて説明していきます。まず「ブランディング」とは、安全に運転できる知識と技術に当たります。免許を取得すればある程度、スピードを出しながら安全運転ができるようになります。ブランディングとは、成功への道で事故を起こすことがないようにするための知恵になるのです。正しい知識と運転方法を学び、免許証を取得しましょう。自動車免許の試験のように、引っかけ問題が数多くあるので、それで転ばないようにしてほしいと思います。

次の「行動」とは、自動車を走らせるためのアクセルとブレーキに当たります。免許を持っていても、実際にハンドルを握ってアクセルを踏まないと前進しません。行動力のある人はとにかくこのアクセルを踏んで、少しでも前進しようとする人のことです。ちなみに僕は、アクセルを踏んで前進させながら知識を蓄えていくタイプになります。「走りながら考える」ことで時間を節約できるのです。

そして、「マーケティング」とは、車種に当たります。成功への道をスポーツカーで行くのか、それともワゴンなのか、ミニカーなのか選択します。どんな特性を持つ自動車で走るかは、どんなマーケティングを駆使するかということです。事故に遭わないよう無理はしないが、最速で安全に走れる車種を選ぶことが重要になってきます。その上で、目的地から逆算して今やるべきことを判断して車を走らせていくのです。

最後に「情熱」が一番重要な要素になります。それは、自動車を走らせるために必要不可欠な「ガソリン」だからです。知識と行動と戦略があっても、それらの原動力となる情熱がなければ思い通りの結果は出ません。情熱の炎を燃やし、成功への道をハイスピードで走る自動車を運転してみましよう。ガソリンを倍増させる方法を学ぶことで、加速させることも可能です。ガソリントankを満タンにして、思い切り運転を楽しんでほしいと思います。

### 【ブランディング×行動×マーケティング×情熱=成功】

これら4つの要素で生まれる成功方程式は、掛け算で成り立ちます。足し算ではなく掛

け算なのは、どれ一つの要素が欠けていたらゼロになってしまうからです。例えば、成功するための知識があっても、行動しなければ結果は出ません。行動力があっても、知識がなく成功への道にはずれて行動しては、いつまでもゴールに辿り着かないのです。

すべては調和が取れたバランスある実践の先に、真の成功があると僕は考えています。これを読んでいるあなたには是非とも、自他共に納得できる人生の成功への道を歩んで頂きたいです。この方法でアーティスト志望の人が成功したり、脱サラして起業したりする人が増えるほど希少性が低くなって価値がなくなってしまうので、現在は学校や知り合いからの依頼と対面コンサルティングのみ公開しています。

今回は僕の高校時代から現在までのストーリーを書き綴りました。また、「アーティスト・マーケティング」という独自ノウハウも網羅した内容となりました。アーティスト・マーケティングを事細かに解説していくと、1冊のビジネス本になるのでまた機会があれば書きまとめたいと思います。

#### <ともかくうごこう！ 知覚動考>

- ・未来の設計図を心に描け
- ・夢はイメージの質と時間に比例する
- ・人生は頑張るのではなく、楽しむもの
- ・右脳と左脳を融合させろ
- ・まぶしく輝く光になれ
- ・一つ夢を叶えると二つ目も叶う
- ・世界にメッセージを発信し続けよ
- ・爆発的な想像力で具現化せよ

#### <響いた言葉とその解釈>

「他の誰もがやらないものを、孤独の中で創造する。それが自己発見だ。  
周囲に対しても、自分に対しても、挑み続けなくてはいけない」

…芸術家・岡本太郎の言葉。

誰もがやっていることをやっていると新鮮さがありません。誰もやっていないことに挑戦することこそが価値あることだと思います。孤独の中にこそ、自分にしかない新世界の空間があります。そこでは、本当の自分に出会え、これまでにない「特別な何か」が待っています。その「何か」こそが、人生を通してやるべきことであり、天命だといえるでしょう。周囲の視線など気にする必要はありません。自分の奥底にある、核なる部分に耳を澄ましてみましょう。

「鶏の姿を感得した後は、草木や鶏以外の鳥。または虫や魚といった生きとし生ける動植物の姿を知り尽くすことにより、その「神」に会うことができる。そうして初めて（絵筆を持つ）手が動くのである」

…画家・伊藤若冲の言葉。

アートを創造する者にとって、神がかりな能力は誰でも意識すると思います。若冲のいう「生きとし生けるものの姿」とは、言い換えるならば「核となる本質」になります。それを理解して、腑に落とすことができはじめて、本物に出合えるのです。そして、それを感じて創造する過程こそが真の喜びであって、創造物こそが生命となります。そのようなクリアな状態でできあがった創造物を生涯、創り続けたいと僕は思います。

## ～メッセージ～

### 人生という名の航海

人生は、航海のようです。

「後悔しない航海をしたい」

そう皆、心底想っているはずです。明るく楽しく、幸せに満ち溢れている人生を想像しているでしょう。しかし、人生という名の海洋はそう甘くはありません。

不安・恐怖などのいつ来るか分からない負の波も迫ってきます。  
逆に、嬉々・喜樂などの正の波も、もちろん起こります。

そのような様々な種類の波をコントロールして、どんな航海を実現させるかは、船長の決断次第なのです。

船長はもちろん、「あなた」です。人生の主人公である船長は、今日も舵を切ることとなります。目覚めた時から眠りに入るまで、多くの選択肢から1つを決断して、船体を動かしているのです。

穏やかな波に揺られながら、刺激の少ない安定的な舵を取る航海を楽しみたいでしょうか。激しい荒波にもまれながら、アップダウンで冒険的な舵を取る航海を楽しみたいでしょうか。

どちらも同じ航海ですが結局、後悔のない航海をしたいことには変わりありません。

目的地までいち早く前進したい気持ちも、雷雨や竜巻などの天候の事故で船体を壊すことは避けたい気持ちもあるでしょう。

船体が丈夫なことはもちろん、乗船員が心身共に健康であることは未知なる航海をするためには絶対条件になります。

「ああ、あの時あれをやっていればよかった…」

「リスクを取って、チャンスに懸ければよかった…」

「船体の故障を修理していればよかった…」

近い未来、過去を振り返ってそう思わないようにするためには、正しく舵を切る必要があります。

時には、慣れない舵取りで間違えるかもしれません。  
仲間に適切なコミュニケーションが取れないかもしれません。  
羅針盤をよく見ないために目的地から離れているかもしれません。

仮にそうだとしても、一度きりの航海が狂わないように、己に嘘偽りない行動であらゆる壁を打破していきたいものです。

翻って、あなたの航海はどんな旅でしょうか？  
先見の明を持って波を読み、最高の航海を楽しんでいるのでしょうか？

いつどんな時でも、最短でベストな決断を下せるように、常に理想の未来を創造できるようにしておきたいものです。

そう考えながら、また今日一日の航海がスタートします。

## 人生を狂わす2つの見えない波

人生の航海には、「見えない波」が2つ存在します。

その視覚化できない波は、人生にプラスの作用がある「陽の波」とマイナスの作用がある「陰の波」に分かれます。

どちらの波も、船長である「あなた」の捉え方次第であって、良いも悪いも受け取れるのです。

いつどんな時代でも、皆、こう願うことでしょう。

「なるべくなら、プラスになる波に乗って人生を謳歌したい」

しかし、その波は目に見えないがために、時には波に飲まれる可能性もあります。

「なんで自分だけこんな目に…」

過去にそう思える経験はないでしょうか。

「良い出来事だけを受けて、良くない出来事は一切受けたくない」

そう思える気持ちも分かります。しかし、陰の波がないなら地球上で「悩み」という名の霧はなくなっているのです。

つまり、プラスがあるならマイナスも確実にある、ということです。

太陽があつて、月があります。男性がいて、女性がいます。黒があつて、白があります。

この現実世界に陰と陽が存在する限り、「どちらか一方方向のみ」ということはあり得ないのです。すべて、1枚の葉っぱのように表裏一体で構成されているのです。

そういった仕組みが成り立っている世界で、僕らは人生の航海を旅しています。

それが事実ならば、真摯にそれらの波を受け止めましょう。

プラスの波からもマイナスの波からも、学ぶ姿勢で待ち構えましょう。

人生を向上させるために、波の種類を理解しましょう。

そして、これから来る波を、見極められる眼を養いましょう。

そうしていけば、どんな波でも対応できる航海ができるはずです。

翻って、あなたは波が見えているでしょうか？

そしてこれまで、波に乗れてきたでしょうか？

いつどんな時でも、陽の波に乗ることができ、陰の波を避けることができるよう、中庸の精神を常に維持していきたいものです。

その羅針盤が、人生という名の航海を豊かなものとするからです。

これらのことを考えながら、未来の波を把握するために、今日も僕は波乗りに出かけます。

# さいごに

## 脱サラ芸術起業家の人生

人は皆、アーティストだと僕は思います。自由に想像したことを現実化させるアーティストです。目的地までのルートを計算して歩き始めればその場所に辿り着くように、何も芸術作品を創り出す者だけがアーティストというわけではないのです。人生という名のキャンバスに毎日少しずつ色を塗っていくことで、意識的にも無意識的にも完成形へ近づいていきます。

創造者であるアーティストの心は本来、誰でも持っているものです。純粋で真っ直ぐな気持ちを抱いて行動していたのはいつのことでしょうか。それは、幼少期の心にもっとも近いといえます。子どもの心は嘘がなく、自由に発想していき、100%の力で行動していくエネルギーを持っています。

「夢を叶えたければ、子どもの頃に帰れ」とよく聞きますが、それでは夢を実現化できないと僕は思います。なぜなら、大人が子どもになっていては、社会的な生活や仕事を放棄するただのワガママ人間になるだけだからです。「どうせ夢なんて叶わない」と嘆くニートになっても、社会から冷たい目で見られる惨めな者になるだけだと思います。

そうではありません。「覚悟を持って夢を叶えたければ、子どもの心を取り戻し、幼少期に好きだったことをやりましょう」ということが、僕が実感していることですし正解だと考えています。子どもは守られる立場であって、自由に使えるお金もなく、行動範囲も狭いです。しかし、責任を背負う大人は仕事を通してお金と経験を得られ、自由な時間を作ることもできます。その時間の使い方、人生が天国にも地獄にも変化することを本当に理解している人はどれくらいいるのでしょうか。

そして重要なことは、自分に嘘をつかずに正直な思考と行動をするようにして、周囲の意見や環境に流されないことです。一喜一憂しては、人生をコントロールすることはできないのです。つまり、自由な発想を生む右脳を活性化する子どもの心と、論理的な戦略を生む左脳を活性化する大人の心を融合させることです。これができる人が一流の成幸者であり、本物のアーティストでもあると僕は思います。そして、彼らがこれからの時代を創っていくことができる人間になるのです。

本書は、脱サラしてアーティストになると決心した23才の僕が読んだら、多くの失敗をせずにスムーズに成功への道を歩めたと思える内容になりました。

この本を読んで頂いた「あなた」と、出版への想いを汲み取って執筆を後押しして下さった「メタモル出版の石川真貴さん」、無知の状態から出版の知識を吸収させて頂いた「天才工場の皆さん」に深く感謝申し上げます。過去を一步一步振り返りながら原稿を執筆することで9才の頃の僕と再会することができ、これまで地獄だと思った経験も、現在の成功に必要な過程だと腑に落とすことができました。そして、ジェットコースターのように激しい僕の人生は、文章を通して独自のメッセージを伝えるための材料にもなったと思います。

アーティストの道へ歩み出した僕を批判しながらも、結果を出している現在の息子の姿を喜んで応援してくれている両親にも感謝しています。「どうしたらアーティストを職業として生きていくことができるのだろうか？」と深く自問自答することができました。おかげで、夢を現実化するための最初の試練でもある「親からの批判」を、夢へ向かうエネルギーに変換することができました。

そして東日本大震災を機に看護師という安定的な道を自らはずれ、単独上京後に広告業界に飛び込んだ妹を応援しています。生まれてから18才まで同じ環境で育った僕と似た思考と行動ができる彼女なら、きっと理想を現実化できると信じています。

100才という長寿を果たして他界した祖母は、この本をあの世から見ているでしょうか。僕の家系で唯一、本（川柳集）を出版した人物である祖母は、周囲から期待されていた100才を越えてからすぐにこの世を去りました。僕はこの時から、死生観がより深くなった気がしています。今世、限られた時間内にどんなことを経験して、いかに人や社会へ、何を伝え残すのかを真剣に考えるようになりました。そしてそれが人生であり、生の意味なのだと思います。

僕のこれまでの生き方・価値観・行動を知ることで、「人生を変えたいが変えられない」という人へ勇気と行動のキッカケを与えられたらこの上なく嬉しいです。踏み入れたことのない世界に行くのは不安も恐怖も感じると思うけれど、今のあなたで生きる人生は1回しかないことを理解してほしいと思います。何も変化せず現状のまま生きるのも、自分の意識次第でどうとでも変えられる人生を楽しむのも、すべてはあなた次第だということなのです。

「自分が変わることが怖い」という人には、あえて「チャレンジしてみよう」と言いたいです。新しいチャレンジから生まれる新しい世界は、これまで見てきた景色の何倍も素晴らしいからです。そこに生きがいを感じるチャレンジャーと、僕は今後も出会いたいし切磋琢磨したいと思っています。そして、超一流の人たちと超一流の環境・空間で超一流の創造物を生み出すことが、僕の究極形態であります。

夢を叶えて好きなことで生きる、アーティストライフスタイルで人生を楽しみましょう。人間一人ひとり、幸せな人生を歩むために生まれてきたのです。

幼少期に夢中になったことや諦めて止めたことを思い出し、今もう一度やってみてはいかがでしょうか。心を開放することで、子どものように純粋な想いを取り戻してみませんか？

本書を最後まで読んでくれたあなたが過去を振り返り、少しでも自分という他にない種を発掘・発芽させていただけるとこの上なく嬉しいです。そして、何かの機会でお会いできる時を心から楽しみにしています。

## これからはじめる知覚動考

### 1. はじめの一步を踏み出せば世界が変わる

※準備は本格的な行動をするための「助走」でしかない。「失敗したらどうしよう」と恐怖に怯えて、はじめの一步を踏み出さないで準備ばかりしているのは、「頑張っている自分」に酔っているだけだと言える。「見切り発車」の勢いが重要。

### 2. 夢を分解して一つずつ順番にパネルをはめていく

※漠然とした夢は現在の自分とのギャップがある。だからその夢を分割して小さな夢にしていく。小さな行動の積み重ねでパネルをはめていけば、大きな地図が完成してくる。

### 3. 一つの道具がどういう過程で完成されるのかを考える

※例えば1本のペンにしても、完成品を使うだけの意識だと過程は見えてこない。いろんな部品から出来上がる過程、デザインの原点から考えると、完成品そのものに愛着がわくようになる。それを使ってできた創造物は、人を惹きつけるものが宿る。

#### 4. ひらめきを見える化せよ

※誰でも言葉にできないような「直感」が降りてくる時がある。その一瞬のひらめきを記憶に残す、または記録にすることが重要。「即座にメモる」「即座に言葉に出す」「即座に体を動かす」など単なるひらめきを可視化することによって、成幸の原石が出現する。

#### 5. 「とりあえずいる」モノを捨てる

※「絶対に必要ではないけど、とりあえずある」というモノを部屋から失くすこと。必要だと思う過去の思い出となる記録は残して、不必要なモノを捨てることによって、心が軽くなる。実践してみれば、「部屋は心の写し鏡」と言われる意味が実感できるはず。

#### 6. 右脳と左脳を融合させろ

※感性の右脳、論理性の左脳。この2つを融合させることで、成幸へのスピードは加速する。成幸者はすべからず皆、この融合させる脳に鍛え上げるとともに、意識的にフル回転させている。

#### 7. 時間厳守を徹底する

※たかが10分、されど10分。時間を守らないということは相手の時間を奪っているということ。その時間とは、「生命」。貴重な生命を奪っている人に、夢を叶える資格や成幸するための資格がないのは言うまでもない。超一流の成幸者たちは時間を支配しているかのように、時間にも心にも余裕を持っている。

## 8. 本は最もローコストでハイリターンの自己投資

※通常1000～1500円ほどのお金はランチで1時間食事したら消費される。そのお金をもし、未来の自分にプレゼントするとしたら1冊の本を買うべきだ。著者のエッセンスが入っている本から学ぶ。それは、「経験や知識を買う」と言い換えられる。そして、その知識を吸収して行動すると「知恵」に変わり、人生がより楽しくなっていくのだ。これほど低コストで高利益な投資方法は存在しない。成幸者は皆、「読書好き」という共通点もあるくらい。

## 9. 自分を奮起させる言葉を書いた付箋をデスク周りに貼る

※情熱のある文字には、行動を促す強い作用がある。モチベーションが高い時に書いた文字を見ることで、その時の状態を思い出すわけだ。この本の中で何か響いた文字があればそれを丁寧に書いてみてデスク周りに貼る。自然と目に止まるところにペタペタ貼っていけば自然と脳のスイッチが入るようになる。(最悪の上司Mさんに勝手に付箋を捨てられたこともあったが…)

## 10. 幼少期に好きだったことを思い出す

※文集、作文、卒業アルバムなど、過去の思い出と成幸はリンクしている可能性が高い。それらを見返すと、思ってもいなかった「成幸の種」が見つかったりする。時間を忘れたあの頃に、タイムスリップするだけで幸せな気持ちになれるかもしれない。

## 11. 朝晩10分自問自答する

※「これからやることは本当にやるべきことなのか?」「これまでやってきたことは本当にやるべきことだったのか?」毎日2回、質問してみる。自信を持って「イエス」なら、未来は確実に輝いている。

## 12. テレビは録画してから観る

※テレビを観るならば、雑誌で情報を探すように観ること。だらだら娯楽のように観て

いても時間の浪費になってしまうのでそれなら観ない方がマシ。なので、今の自分に必要だと思う番組のみ録画して再生する。CMは飛ばし、本編のみ観ることでマスメディアの発信をピックアップする。ハードディスクに溜まっていき、「どれから観ればいいのか迷う」という状態なるテレビ中毒者は成幸者とはかけ離れた存在でしかない。

### 13. 現状満足は退化の道

※「お変わりありませんか？」という他愛もない会話には「現状維持が人生の幸せ」という美德さえ感じる。この世で変わらないもの、それは「変化しないものはない」という真実。健康の豊かさレベル、経済の豊かさレベル、心の豊かさレベルが現状からずっと一定にキープされることは皆無と言ってもいいくらい変化し続けている。それどころか、現状に満足して進化を忘れていると自然と退化していくのだ。現状維持し初めたら退化の道に入ったということを意識しなければならない。

### 14. 他人の評価を気にしないで自分の感覚を信じる

※受けた教育も環境も異なる他人からの評価よりも、偽りなき自分の心の声を優先する。感覚に従うことで本当の自分と出会えるようになる。

### 15. 無意識だった習慣を見直す

※現在の行動パターンを客観視することで、何が必要で何が不必要なのか見直す。未来への消費的行動から投資的行動へ

### 16. 心から楽しんでいる自分を想像してから寝る

※自由に未来を想像する。夢が叶った自分を想像する。そう空想しながら眠りに入ると心身も充実して明日を迎えられる。そして、夢へのステップが次第に見えてくるようになる。

### 17. 病気にならない健康体を創る

※夢を叶えるための行動には、フルパフォーマンスできる心身が必要不可欠。

## 18. 行雲流水

※「雲が行くように、水が流れるよう」に生きる。そうした我欲が無い自然体になるほど、人生そのものをスムーズに創れるようになっていく。

## 19. 無心

※心が無になるほどの何かを、生涯かけて探す。そしてその無心の状態を維持することでまた新しい無が生まれる。無こそが有で、有こそが無である。

## あとがき

本書と出合っただき、ありがとうございます。

電子書籍の出版を今年2月からスタートして、  
本書で12冊目となります。

毎月、電子書籍を出すことを自分に言い聞かせて  
執筆しておりますが、読者の方からの感想が  
一番の原動力になっています。ありがとうございます。

今回は、  
自伝本の元となった原稿を追記・加筆して  
「ブラック企業を脱サラした23才の凡人」が  
スプレーアートとパソコン1台で成功した  
芸術起業物語を1冊にまとめました。

お金もコネも才能もなかったあの頃の僕と何も  
変わっていない根本となる思想を書き綴りながら、  
過去を振り返っていました。

「人生とは決まっているようで、決まっていない」  
不思議な生命の期限に思えます。

100人中99人に不可能だと言われたことすら  
現実化させてきた現在、成功も失敗も表裏一体だと  
理解するようになりました。

もちろん成功をつかむために試行錯誤したり、  
真剣に行動するわけですが、定められた有限の中で  
そこに向かって生命を燃焼させられることに  
真の意義があるのではないのでしょうか。

いづれにせよ、後悔しない生き方を  
貫いていきたいものです。

人生を一つの最高傑作になるような『成幸者』のアーティストライフスタイルから、ご自身の生き方が少しでもプラスになるキッカケとなれば本望です。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

この本のご感想や次回作のご要望などございましたら、巻末にある公式サイトからお問い合わせいただくと嬉しいです。

また、僕のブログをシェアをしていただくと追加プレゼントが送られますのでどうぞ登録してみてくださいね。

●追加プレゼント請求ページ

<https://yoshi.in/color/mag-thanks>

それでは、執筆中の次回作も楽しみにお待ちしております。

お互い、未来を創造して人生を楽しんでいきましょう。

いつかあなたとお会いできる時を楽しみにしております。

川名 慶彦

二〇一六年七月九日  
(二〇一八年十一月一日・加筆)  
旅中、山梨にて

## < 著者略歴 >

川名 慶彦 (YOSHIHIKO KAWANA)

1985 年福島県生まれ。芸術起業家。日本スプレーアート協会会長。

大学生時代、業界ナンバー 1 の成功者たちに個人でインタビュー活動を行い、人生を豊かにする成功者の人生哲学を学ぶ。大学卒業後、IT ベンチャー企業に就職するも、超過酷労働で肉体と精神の崩壊が近づく。脱サラと同時に起業してライフワークと IT を融合させた独自のビジネスモデルを構築して成功する。

全国各地に招待され、旅を楽しみながら絵を描くアーティストライフスタイルを確立。

2010 年に『日本スプレーアート協会』を設立。現在、全国各地に 5~69 才まで 1000 人以上の生徒がいる。スプレーアートの第一人者である『スプレーアートアーティスト YOSHI』として、テレビや雑誌、新聞などのメディアに出演するほか、全国各地・海外でスプレーアートライブパフォーマンスを行う。

現在、芸術起業家・教育者・講演家・作家としても活動中。

著書に『金なし! コネなし! 才能なし! でも 人生を後悔しない “僕が選んだ生き方”』(メタモル出版)、『スプレーアート マスタープログラム 入門編』(マイナビ) などがある。

コンサルティング業もスタートして、年齢・性別・学歴など一切関係なく、夢をかなえたい学生やサラリーマン・OL・フリーター・主婦・会社経営者・個人事業主に「時間や場所に縛られずに一人で稼ぐ」「好きなことで人生を楽しむ」「世のため人のために自分の才能を活用する」という真の成功マインドセット・テクニックを教えて成功に導いている。

## <リンク>

- 芸術起業家 川名慶彦 オフィシャルサイト：

<https://yoshi.in/>

- スプレーアートアーティスト YOSHI オフィシャルサイト：

<http://sprayart.jp/>

- 自伝本『金なし! コネなし! 才能なし! でも  
人生を後悔しない“僕が選んだ生き方”』（メタモル出版）

<http://yoshi.in/c/amazon1/>

- 無料メールマガジン登録フォーム：

<https://yoshi.in/color/free-mag>

- Lifework-Success.com ～Yoshihiko Kawana Blog～

<https://lifework-success.com/>

## < 電子書籍 >

第1弾：オリジナルオンリーワン ～凡人でも夢をかなえる9つコツ～

<http://yoshi.in/c/ebook1/>

第2弾：テレビに出る技術 ～凡人でもテレビ出演できた非常識な脳みその作り方～

<http://yoshi.in/c/ebook2/>

第3弾：下克上な出版 ～20代の凡人が紙と電子の本を商業出版した異常な戦略～

<http://yoshi.in/c/ebook3/>

第4弾：マイノリティーフリーライフ ～老人になる前に送りたい少数派の自由な人生～

<http://yoshi.in/c/ebook4/>

第5弾：アーティストマーケティング ～無名アーティストが最速で成幸する新芸術起業論～

<http://yoshi.in/c/ebook5/>

第6弾：アーティストマーケティング ～無名アーティストが最速で成幸する新芸術起業論～大学講義

<http://yoshi.in/c/ebook6/>

第7弾：人生の9割はスタートで決まる ～人生がきらめく成幸の絵具0『初動』～

<http://yoshi.in/c/ebook7/>

第8弾：デッドオアアライブ ～死ぬまでにやっておきたい人生の宿題9つ～

<http://yoshi.in/c/ebook8/>

第9弾：未来を創るビジョンの描き方 ～人生がきらめく成幸の絵具1『想像』～

<http://yoshi.in/c/ebook9/>

第10弾：死ぬ前に後悔しないアクション術 ～人生がきらめく成幸の絵具2『行動』～

<http://yoshi.in/c/ebook10/>

第11弾:好きなことで独立起業する前に知っておきたい9つのこと ～幻想の世界から脱出せよ～

<http://yoshi.in/c/ebook11/>

第12弾:脱サラ芸術起業 ～凡人でも人生を自由自在に楽しむ秘訣～

<http://yoshi.in/c/ebook12/>

第13弾:凡人革命 ～人生を変えて天才を凌駕する9つの方法～

<http://yoshi.in/c/ebook13/>

第14弾:人生はドラクエから学んだ ～人生RPGの楽しみ方～

<http://yoshi.in/c/ebook14/>

第15弾:宇宙と人生を豊かにする9つの偉人名言 ～日本人編～

<http://yoshi.in/c/ebook15/>

第16弾:こどものときにおしえてほしかった9つのこと

<http://yoshi.in/c/ebook16/>

第17弾:成功する人は、なぜ武道をやるのか?

<http://yoshi.in/c/ebook17/>

第18弾:人生という絵画

<http://yoshi.in/c/ebook18/>

第19弾:99%の売れないアーティスト 1%の売れるアーティスト

<http://yoshi.in/c/ebook19/>

第20弾:人の道を切り拓く剣道:～人生に応用できる活人剣～

<http://yoshi.in/c/ebook20/>

---

●書籍名：『脱サラ芸術起業 ～凡人でも人生を自由自在に楽しむ秘訣～』

●著者名：川名慶彦 (YOSHIHIKO KAWANA)

●発行日：2016年7月9日 初版  
2018年11月1日 第二版

●発行元：日本スプレーアート協会

Copyright (C) 2018 川名慶彦 All Rights Reserved.

---



# 脱サラ芸術起業

## 完

川名慶彦

Lifework-Success.com ~Yoshihiko Kawana Blog~

<https://lifework-success.com/>